女鑑



大日本淑女學會

第四回新學期開始

本會の講義録
▲大阪三百頁優麗なる冊子一
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は専門女子教育家也
▲科外講師は博士學士卅家
▲毎號科外講話を附録とす
▲純潔高雅の家庭小説あり
▲會員の質問は直に解答す
▲學期毎に修業證書を與ふ
▲講義録は弍ケ年完結とす

御自分のお宅に居つて高等女學校の課程を講習しやうとする人は本會におはいりなさい本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義録を發行します講義の親切丁寧な事は固より新式の教授法によつて獨習に最も便利な方法を計ります卒業は弍箇年會費も低廉であります

會員募集 規則書進呈す

◎五月三十日迄入會金全免す

▲報知新聞評 本講義録は高等女學校の全學科を知名の専門女子教育家が講述せる者也平易懇切を主とせるものなれば何人も難解の處なかるべく各科皆聯絡を保ちて其程度を一にせるなど講述者の苦心を見るに足る且つ有益なる科外講話の外に雜録五十頁の附録あり博士學士等の婦人に關する評論史傳衛生家庭等の文字を滿載し卷末更に純潔高雅の小説あり凡そ天下講義録多しと雖も實益と趣味と併せ有する事斯くの如きは稀也

本會機關雜誌 姫百合 を發行し會員に限り進呈す

◎東京神田南甲賀町（電話本局三千四番）

大日本淑女學會

冬と化粧

美人となる秘法

近來化粧の方法が盛んに研究せられる樣になりましたが、多くは白粉等の研究のみでして、どふしたならば美くしい化粧が出來るかと云ふ事を忘られて居る有樣です、一體化粧の上から見れば、白粉は枝であつて其の下には根の物があるのです、つまり白粉を美くしくつけるには先づ完全な皮膚でなくてはなりませぬ、若しきたない皮膚に美れいな化粧を仕様としますのは、丁度ヨゴレタ「ヌメ」へ立派な畫を書かふとする如く、到底不可能の事で御座います、故に美つくしい化粧をなさりたい方は、まづ第一に皮膚を良くしなければなりません、之は極く譯もない事で、即ち常にローヤル水を用ゐて後白粉を御つけになる事を御忘れにならなければ、自然に好い皮膚と成つて美るはしい化粧か出來ます。

寒氣日増しに酷しく、今後人の皮膚はやゝもすれば荒れ易いのであります故、婦人方は固より殿方も常に注意して夫を豫防せねばなりません、夫れにはローヤル水を御使になるに限ります。

ローヤル水は此の外種々の特色がありまして、例ば脂肪分の多い爲めニキビの出來る人は、洗面の後にローヤル水を御使になれば非常の効があります、又脂肪分の少ない爲め皮膚のアレる方には、適當の脂肪分を與へ、皮膚の營養を增す等、他の化粧水では見る事の出來ない多の効があります、故に世間でローヤル水を稱して萬能化粧水と申しますは偶然で御座いません。

◎定價　特大　一圓　大　五十錢　中　卅五錢　小　廿錢

郵稅は十二錢販賣店は全國至る處の化粧品店洋品店小間物店賣藥店に在ります。

發賣元は東京銀座一丁目佐々木商店です。

女鑑　第拾八年第二號

目次



真正 無毒 高等 化粧

クイーン白粉
クイーン水

◉本品ハ我同盟國ヨリ輸入セル最新最良ノ原料ニ貴重ナル芳香ヲ加ヘ精製シタル化粧品ニテ先祖傳來的ノ陳腐ナル品ニアラズ壹度御試用ノ榮ヲ賜ラン事ヲ

▲取次販賣ハ至ル所ノ小間物化粧品店ニアリ若シ品切ナレバ直接ニ御注文ヲ乞フ

東京日本橋區新和泉町

本舖 三井花陽堂

本品は忝くも
皇后陛下
東京勸業博覧會場へ御行啓の際献上し奉り即時御嘉納の光榮を得たり

内務省衛生試驗所檢査濟

ムスク香油

壹瓶 五十錢



一本品は最良の植物性原油を精製し更に毛髪の攝養上肝要なる加工を施し尚優等なる芳香を配合せしものなれば他に比類なき摸範的香油であります

一本品は一度び御用ひあれば乍ち髪の毛さらりとし艶黒く麗はしく其上優美なる（バイオレット）の芳香を保ち紳士淑女の一日も缺く事のできぬ香油であります

一本品は毛髪の發育を大切になさる御婦人は申に及ばず男子方の散髪用として無比の佳品で有升

一本品は市内到る處賣藥小間物化粧品店にて販賣致し居升御最寄にて御需めを乞ふ

○若し品切等の節は端書にて本舖へ御注文あれば東京市内に限り壹瓶以上何程にても直ちに御届け申上べく候

東京日本橋區本石町四丁目

ムスク香水 ホーサン石鹼 本舖 松澤常吉化粧品部

匂ふ梅風





（犬の聲！）

何と云ふ藥が

欲しいのですか

（令嬢の答）

私は高橋盛大堂の

清快丸が欲しいのです

あの藥は勉強して肩が凝たり氣が欝いだりした

時に能く奏効ますからね

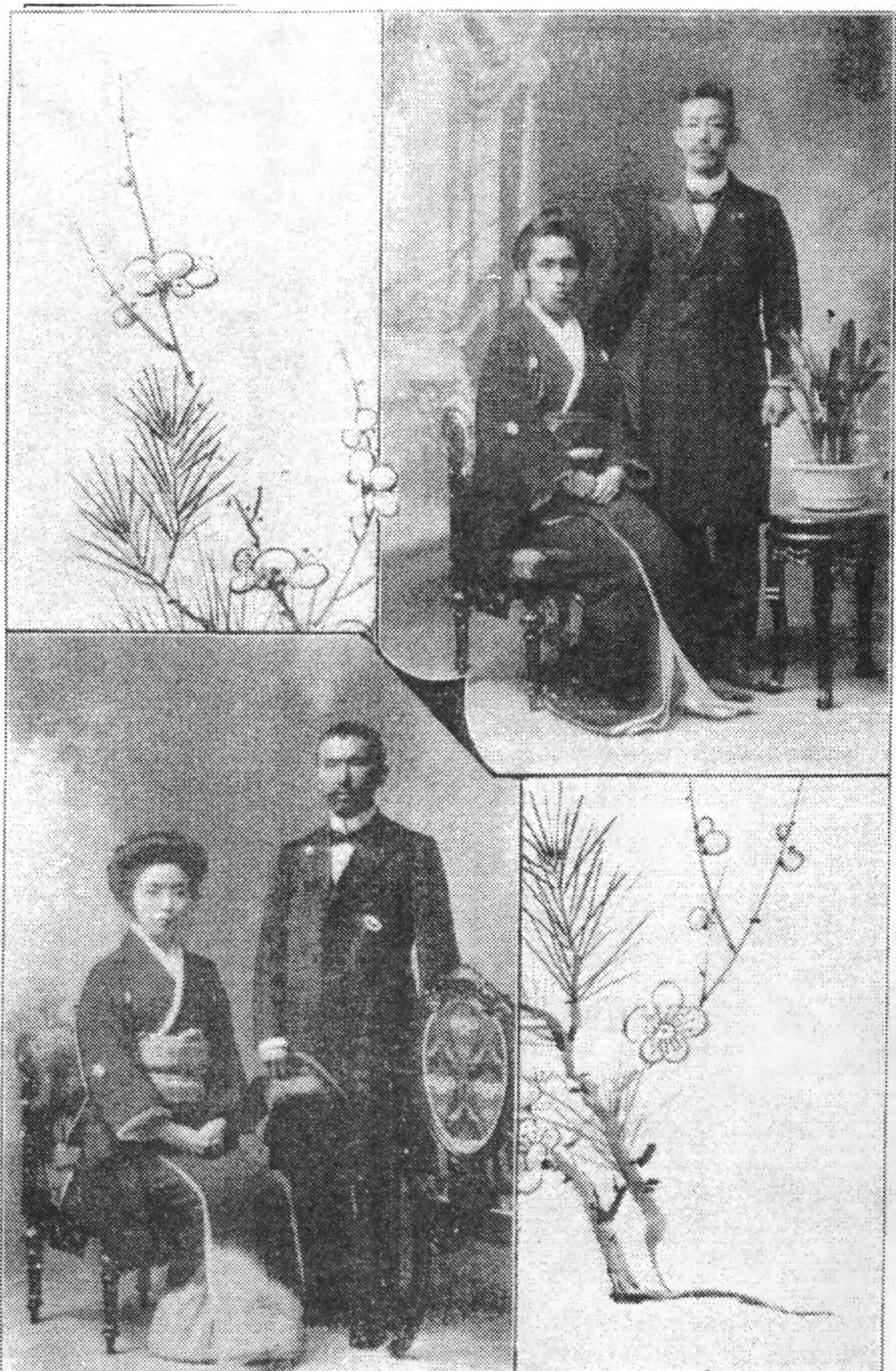


清快丸

價金十錢、廿錢、五十錢、一圓

捻布著二十錢藥罐廿五錢

中川判事と三浦檢事の家庭



東京地方裁判所上席豫審判事　中川寓太郎君　令閨　靜子君

東京地方裁判所檢事　三浦榮五郎君　令閨　不二子君

楠田國手の家庭



楠田謙藏君

令閨りい子君

令息嚴君

令息燕君

令嬢宗子君

令嬢百合子君

社交界貴夫人の會合



下段右より四番目 毛利男爵夫人 正子君

同五番目 ホードレー夫人

同六番目 阿部偉子君

佐藤醫學博士の家庭



佐藤達次郎君

令閨操子君

令息同孃

作文速成に一等よい

懸賞募集課題
○○お伽噺○○新派和歌○○短篇小説○日記文○○新體詩○○實用文○○俳句
○○新論文○○舊派和歌○○美文○短文○繪畫○○新歌謠○○滑稽談○○餘興
(賞外)○○學校通信○文學顧問
○○誌友思ひ〳〵の事柄

選評 巖谷小波、小栗風葉、横瀬夜雨、與謝野晶子、谷江風、中村文學士、佐々木信綱、内藤鳴雪、山中古洞、編輯局

▲詳細の事は見本(價拾錢 送壹錢)に就て御覽下さい

(本誌は卅八年一月創刊)

低廉無比好評

日本唯一女學雜誌

女子文壇

ぢよしぶんだん

發行 毎月一日 增刊四回

口繪 名畫光澤紙原色刷 寫眞肖像風景數葉

定價 壹冊(百卅頁)金拾錢送料壹錢○壹年分(十六冊)同金壹圓六拾錢○半年分(八冊)送共金八拾四錢○郵劵代用壹割增

● 四年第二號 二月一日發兌

定期增刊第一 第三號

春日影

二月十五日發兌

● 新年號 一月元日發行 增刷出來

小說附錄
▲死後迄も……小栗風葉
▲女裝……德田秋聲
▲角……岡田八千代
▲非牧者……佐野天聲
▲乘合馬車……窪田空穗

本號は附錄とも紙數百六十頁 定價金拾貳錢 郵稅不要 名畫寫眞共頗美觀

▲注意＝最寄書店になき時は至極輕便且安全の振替貯金拂込法により直接發行所に御申込を乞ふ

東京京橋區大鋸町十一番地 (振替貯金口座第壹七貳九番)

女子文壇社發行

電話番號 本局六百七番

特約發賣所●神田東京堂、上田屋●日本橋北隆館、至誠堂●京橋東海堂、良明堂 其他取次店は全國各雜誌書店

加藤照麿博士の令息孃



疎影暗香

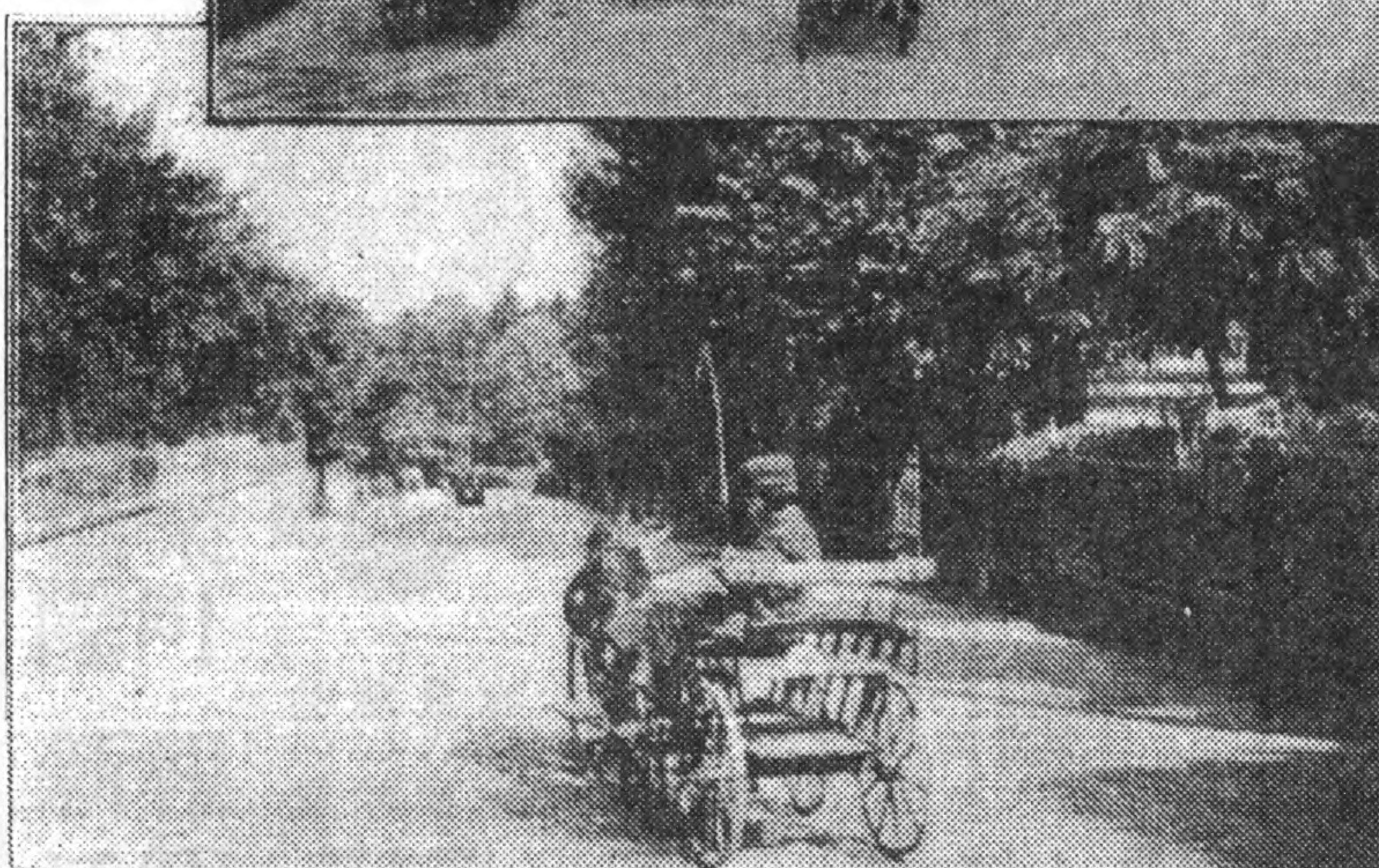




佐藤本社常務取締役後園の老梅、上なるは幹の周圍一丈四尺下なるは八尺の大樹なり

伯林幼兒風俗







全紙悉く寫眞挿入優美艶麗書報兼備

文章平易

婦人世界

說明親切

二月一日發行 毎月一回 三卷 第貳號 一冊拾五錢 郵稅一錢五厘 六冊分郵稅共九十錢 十二冊壹圓七拾五錢

▲男女結婚論（愈よ出でて愈よ佳境に入る）　村井弦齋

◎婦人の愼しむべき言葉使ひ……　西田敬止

◎少女物語 時計物語

◎模範とすべき米國女學生の寄宿舍生活　ドクトル夫人 川瀨富美子

◎私は山脇房子女史の如何なる點に感心せるか　代議士夫人 栗塚龍子

◎私の母棚橋絢子より受けたる家庭の教訓　工學士夫人 橫河下枝子

◎斯くの如き女學生は必らず成業す……　白露生

◎習字は如何にせば上達するか……　御歌所寄人 坂正臣

◎良人を助け愛兒を教育する私の日常生活　鳩山春子

◎日本婦人が初めて米國に渡りし時の實驗談　跡見玉枝

◎注意すべき小兒の夜泣　醫學博士 加藤照麿

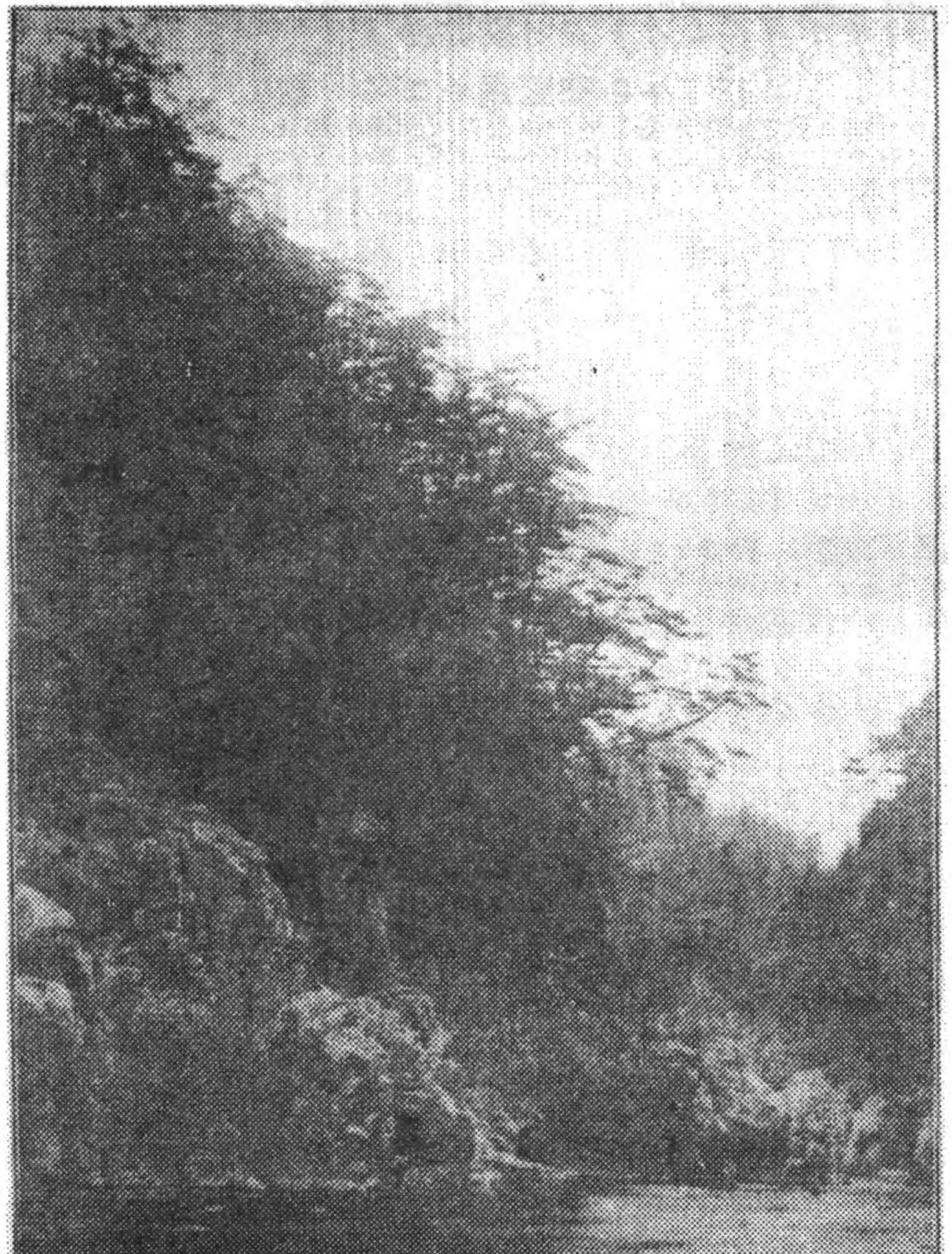
◎牛肉料理　弦齋夫人

▲本號には懸賞附錄當選發見法あり

東京京橋南紺屋町十二番地 實業之日本社（郵便振替貯金口座六參貳番）（電話新橋八四七番）賣捌全國書店

天龍川沿岸の景





美人トナル藥

と申しても憚りなき珍らしき有功化粧品の新輸入

人形的粉飾を好まず自然美を願ふ御方は美的修養として米國デトロキト市アクムケミカル會社製アクムフレンチマッサージクリーム（大金二圓六十五錢小金一圓卅五錢）を日々御使用ありて根本から肌理及び顏色を美化せしむる事に御務めくださいの本品を使用するには入浴の際成る丈け熱き湯に手拭を五六回絞りては顏面を覆ひて蒸し冷風に吹かれぬ内に本品の少量を採り少々の水をまぜ顏一面にぬり指先にて磨擦するのですそうすると肌理は一ヶ月を出ずして微に透き通る樣に美しくなり色を白く艶紅にすることを斷言致します

次に冬季中は寒氣の爲に皮膚細胞が硬くなり脂肪を分泌する事が不充分なので顏や手など忽ちヒヾアカギレ等の荒れを生じ皆樣が大に御悶みになるのでありますが能く此等の憂を防ぎ肌理を微に軟かに保つには最も忠良に皮膚の脂肪に代り、肌を庇護する佛國巴里市ピベール會社製ヒリリン、オドトワレット（美顏劑と白粉下クリームとを巧妙に配劑したる珍らしき透明化粧水金二圓三十錢）を日々御使用になるに限ります尚ほ本品は他に偉大なる特長として尤も心持ちよきサラリとした粘着性を有してありますから白粉下をも兼る無双の優等品であります本品を顏一面に塗り同會社製ヒリリン、プードルドリ（金一圓）の如き正眞正銘無鉛無害粉おしろいをハタキ付けにし三分時の後滑かなる紙類を以て磨擦して艶拭きを施しますときには白粉は普通のクリームを下にした樣にベトベトとしてヨレルことなくサラリとして心持ちよく充分に伸びて光澤を出し白粉をつけたようには觀へず天眞の色白に見へます

扨て美人の形容に雲鬢花顏と申す如く顏と髮とは兩々相並行して美しくなければ則ち美人たるの要素を欠くものと申しても差支はありますまい亦た髮の美は顏容の足らざるを補ふに充分なる力があります底で毛髮の美とは如何なるものかと申せば丈けなす黒髮即ち此の一條件に外ないのであります此條件に叶はんとするには毛髮美的發育法として佛國巴里市ピベール會社のペトロールハーン（大金二圓小金一圓五十錢）を毎朝或は御髮結ひの時小サキ海綿に浸し頭の生地へゴシゴシと力を込めて擦り込むに限ります否な實に天下に此れより良法はありますまい此ペトロールハーンは毛髮の肥料となり毛穴の掃除をなしフケを去ることは勿論脫毛を治する事の上に驚くべき功能があり忽ち其の結果を視る事が出來ます怠なく御使用あれば新に毛を生ずる事をも證言致します以上の各品は皆高價なる香料を用ゐあれば髮飾として品良き香氣を有して居ります

眞正の美人とならん事を願ふ御方の心得べき定義以上の如き有功無比の化粧品をお用ひにならぬ方は美人となる事を願ひつゝも未だ其の實行をなさらぬ御方安化粧品を用ゆる方は時代遲れの一時的人工美人とならうとする御方否な表情も趣味もなき人形に猶ほ劣る御方

弊店は歐米各國に於て有名なる諸大會社と直接連絡を通じ優等なる石鹼香水香油白粉白粉下クリーム化粧水紅毛髮及び爪の化粧料美顏術用具等一切を輸入し最も親切に販賣す乞ふ多少の御注文あらん事を

東京市銀座尾張町二ノ五
輸入部萬治貿易商會

電話新橋[illegible]三三五
販賣部めでた屋

◉◉年極讀者に對する優遇◉◉

今回本誌の大發展に付て、年極讀者諸君に對し、抽籤により左の景品を呈す

甲　女鑑代金一年分前納購讀せらるゝ御方（〆切二月二十九日當編輯局着）

乙　女鑑代金一年分前納して現今購讀期間中の御方

抽籤　三月五日午後一時より本社編輯局にて之を行ふ、其方法は右抽籤資格者に便宜立會を乞ひ、更に立會者より全體の代理者を選擧し、其當選者にて抽籤を行ふ、資格者は成るべく多く立會はれ、抽籤に就て遺憾なからしめんことを望む

賞品

第一等	一人	女持金時計
第二等	一人	繻珍丸帯
第三等	一人	紋羽二重
第四等	一人	寶石入り金指環
第五等	一人	勸業貯蓄債券
第六等	二人	女持蝙蝠傘
第七等	五人	縮緬帛紗
第八等	五人	縮緬半襟
第九等	二十人	女用半手袋
第十等	三十人	タオル

◉抽籤資格者にして、右の選に洩れたる方へは、悉く、淸方畫伯筆上等繪葉書一組宛を呈す



上圖より繪五つを探し當てたる方に、左の方法により、賞品を呈す、

〆切二月十五日

一等　勸業貯蓄債券

二等　縮緬の帶揚

三等　兒童教育

右の外解答者三百人迄優美なる繪葉書を呈す

解答者中より抽籤にて等級を定む、抽籤は二月十七日午後一時本社編輯局にて行ふ、解答者は便宜立會はれたし。

●大懸賞案募集

來る五月一日發行の本誌に於て、盛んなる賞品を懸け公平にして趣味ある方法によりて讀者諸君に頒たんとす、就ては讀者諸君より其懸賞案（官報字數あての如きものにて、目新しきもの）を募集す

（二）〆切　二月二十日本誌編輯局着

（二）賞品　懸賞案を採用したるものは、趣向の甲乙により二圓以上十圓迄の賞品を呈す

繪さがし	
住所	姓名


振替貯金三百番
三越呉服店




生活に必要なる物ほど澤山で安値(其一)

法學士　河上　肇

女鑑　第十八年二號

造化巧妙

造化巧妙と棒讀みにすると、何んだか厭に漢文めいて聞えますので、或はのの字を中間に加へて、造化の巧妙と云つたら宜からうと思はれる、けれども中間にのの字を加へると語氣が緩くなるから、其は却つて加へない方が宜い、と云ふものは、若しものの字を加へると、チョット考へても造化と巧妙と二つの物のやうに聞える、予が意見はさういふのでは無い、造化と巧妙と二つに分けて見るのでは無い、造化それ自身を巧妙**と見るので、暫らく造化巧妙を二つに見るときは、造化は其物の本體で**

巧妙は其作用とでも云ふべきのである、併し斯う見れば前の見解とは、自ら其間に差異のある事が分明せらるゝであらうと思はれる、ソコデ此の造化の巧妙（且らく通俗に從つての、の字を加へて置く、以下倣じ）なる事は驚嘆に堪へないので、その證據は歷々として隱さず、明々として吾人の面前に呈露せられて

宇宙の間に澤山ある

抑も經濟學の上から見ても、此の宇宙間には我々人類（人類のみでは無いが、今は之に止めて置く）の生活に必要なる物は澤山に存在して居るのである、單に斯う云つても漠然として居るが、其は追々に說明する事として、その生活に最も必要にして缺ぐべからざる物ほど價が易くして澤山あるとは、實に不思議の現象では無いか、

空氣の價といへばロハである

吾人が日常の生活を營むに付て、衣食住の三つも大切であるが、それよりもより澤山、寢ても覺めても無くて叶はぬ、實に瞬時も缺くべからざるものは何であるかと云ふに、此の空氣に及ぶものは無い、若し之を疑ふ者があるならば、自ら咽喉を締て見れば直ぐに分かる、縱ひ腹が空ても、或は寒くとも、五分や十分の我慢の出來無い事はないけれども、斯の空氣ばかりはさう行か無い、チヨット出る息引く息一つの工合で吾人の生活狀態如何に影響するのである、此く澤山に吾人の生活に最必要なる空氣は、幸にして到る所、吾人の需に應じて供給を怠らないのみならず、その價を問へばロハである、若しも空氣に價格が附せられて恰も水道の水のやうに

空氣稅が課せられ

たならば如何であらう、それは到底吾人の負擔に堪へ得るものではあるまいと思ふ、是を以ても造化の

巧妙なる事は頌讃するに餘りありと云はねばならぬでは無いか、
空氣は斯く到る處に充滿して居て、毫も吾人の生活に事を缺がないのみならず、その價はロハであるが經濟學の方面から云ふ時は、人口の多い處は斯の空氣が缺乏して居るから、之が爲に死する者が多い、即ち田舍より都市に死者の多いのは其一證である、何故かと云ふに、都會と云ふものは、例へば此の東京の如き、近來我も人もと云ふやうに集つて來る、此く多くの人が集つて來ると、是まで百萬人の口に呼吸された空氣は、增して百五十萬乃至二百萬と云ふ多人數の口に依つて呼吸さるゝのであるから、從つて空氣が腐敗する、その腐敗した空氣を相互に呼吸するのであるから、云ふまでも無く

衛生上に惡い影響

を及ぼすのである、此の故に都會の人は田舍の人に比べて、啻に身體が虛弱であるばかりでは無い、從つて死者が多いのである、

此く詮じ來たれば、一國の經濟政策としても、大いに之が缺乏を補ひ且つ之が完全なる施設を要するのである、苟くも其等が完備して、而して身體が强壯であつたならば、米價などは幾ら騰つたからと云つても彼此云ふ者は無い、畢竟身體が虛弱で十分に活動が出來ないから、少し米價が騰貴すると弱音を吐くのである、其所へ行くと田舍の人は異つたもので、彼の徵兵適齡者の檢査に當りたる者の言を聞くに、何時の年でも

合格者は田舍人が多い

而して都會の者には極めて僅少であると云はれたが、是等は即ち空氣の缺乏に基因するのである、

又他の方面から檢べて見ると

田舍は死する者が少なくして、生るゝ者が多く、
都會は死する者が多くして、生るゝ者が少ない、
のみならず、都會には死産が多いけれども、田舍には至つて此の例が少ない、而して田舍の人は一體に身體が巖丈で重いが、都會の人は身長は高いけれども體量が輕い、是等の事實は眼前爭ふべからざるの現象である。

近頃佛國のジュレイ氏が巴里の人口に就て調査した所に依れば、學童十人の中で六人、即ち半數以上は肺病に侵されて居ると云ふ事を確められたのである、何と懼るべきではあるまいか、

凡そ植物を植うるにも、必らず
一定の間隔を要する
乃ち二尺おきとか又は三尺乃至一間おきと云ふやうに一定の間隔を措かなければならぬ、さも無ければ發育に妨害があるからである、是と同時に
動物にも亦一定の間隔
を要するのである、否らざれば、必ず生活狀態に異變を來たすのである、佛國の學者某は、凡ての花の中で
人間と云ふ花
が、最も多く
太陽の光線を要す
るのである、と云はれたが、單に太陽の光線のみでは無い、即ち空氣を要求するのである、
また昔時獨逸の學者は云はるゝに、都會に住む所の人士は、その子孫まで家計を續けて絶える者もあれ

は、また己れ一代にして死に絶える家もある、或は長くとも四五代の後には其血脈が斷絶する者であると說かれたが、是はさうかも知れない、若し今日この東京在住の者を檢べたならば、思ひ半ばに過ぐるであらうと考へる、必ず純粹の江戸兒といふものは至つて少ないに相違ない、のみならず、今日所謂江戸兒と稱する者も、其祖先を檢べて見たならば、或は純粹の江戸兒種で無いかも知れない、今日富豪を以て聞ゆる三井岩崎など稱する者も、其源は孰れも田舍人である、

サテ其田舍人が俄かに都會に出ると、是まで新鮮なる空氣の呼吸をしつけて居た者が、一朝汚濁せる空氣に接觸するのであるから、如何しても長命が出來ない、多くは夭折するのである、某學者の云へる如く純粹の巴里兒は比較的大丈であると言はるゝやうに、初めから汚濁せる空氣の中でも、此所で育つたものは、幼少の頃から其に慣れて居るから、俄かに田舍から出た者に比ぶれば丈夫なのである、けれども餘り長く子孫は續かぬ、必ず漸次に衰退して行くのである、

故に都會に住む者は、常に此く安い空氣にすらも缺乏を告げつゝあるので、之を補はんが爲に或は海濱に至り、若くは氣候の好い所を擇んで、海水浴避暑または避寒などゝ稱して

空氣を買ひに行く

のである、

但し此く多くの都人士が、擧つて空氣の買出しに田舍へ行くのであるが、別に之は空氣の代價であると云つて拂ふものも無ければ、また代價を請求するものも無い、所謂需めに應じて辭せざるのみか、各自の取るに任せてある、實に造化の巧妙なる事は此くの如くである、空氣に關する事は先づこれぐらゐで止めて措て、（次回は水に關する事を話さう）

衣食より貴き生活要素

近藤修理

人類の生活に缺くべからざる要素と云へば、直ちに衣と食と住居とである、成程是等の三者は生活の要素であることは吾人も亦拒むものでは無いが、縦ひ衣服が必要であると云つても、亞非利加や印度地方の如き熱帶に在る者は別段無くても事は足るのである、併しながら温帶や寒帶に住む者に取つては必要缺くべからざる者になつて居る、然らば衣服が人類の生活に必要であると云ふ事は、氣候や風土等の關係から割り出した話で、謂ゆる程度の問題で絶對的のものでは無い。

然らば食物は如何と云ふに、是は全く衣服の如く程度の問題では無くして絶對的のものである、尤も風を吸ひ露を吸つて生存する仙人など丶稱する者があるけれども、是等は一個の傳説であつて、固より價値のあるものでは無い、併し食物には、年齢および健康狀態等に由つて兩に程度のあることは忘れてはならぬ。

次に住居は如何と云ふに、是また程度の問題である、何故かと云ふに、彼の水草を趁うて移住するものを見れば直ちに分かる、此く云はゞ或は其は野蠻の狀態にあるからであつて、文明人の堪ふる所で無いと云はる丶であらうが、既に文明と云ひ野蠻と云ふのは人智の程度問題では無いか、故に少しく極端かは知らないが、人類生活の根本より見來たれば、居住の有無は毫も人類生活の要素に何等の痛痒を感じないのである。

此く詮じ來れば、以上三者の中で比較的人類の生活に直接の關係を有つて居るものは食物である、けれども是も過不及に由つては、却つて人體に害を及ぼすものであるから、愼重に愼重の注意を拂はねばならぬのである、然るに此の食物より貴き人類生活の一要素があるのであるが、如何も世の人は之に重きを置かないやうである。

近年は左樣でも無いが、今より十數年前までは、我國に於ける諸般、殊に衛生の事に關しては、醫術の幼稚なると同時に幾んど其進歩が遲々たるものであつたから、從つて一般世人殊に女子の身體は虛弱であつて、彼の厭ふべき肺結核など、云ふ病氣の爲に、可惜天壽を夭折する者が尠なくなかつた、是と云ふも當時一種の病的が預かつて力があつたものと考へる、その病的とは、即ち成るべく少しの時間で、成るべく多くの事を學ばうと焦つた事である、之を言ひ換ふれば、高度の氣壓で、無理に學問を頭腦の裏に押込まうとしたのである、此の弊は今尙ほ衰退はしないやうだが、殊に其時分は烈しかつたのである。



それ故に、身體の存在即ち吾人の身體は如何にして存在して居るのであるか、又は身體を存在せしむるには如何なる手段を取るべきか、或は身體と腦髓の關係は如何なるものであるか、或は腦髓の機能は如何なるものであるか、苟くも吾人が常に健康を保つには新鮮なる血液が必要であるなど、云ふ事は全く失忘せられて、單に學問一點張と云ふ有樣で、殊に身體が虛弱であつては、

到底その目的を遂し希望を滿足すべき程の血液を供給する事の出來るもので無いと云ふ事をも考へられずに居たのである。

元來吾人の身體を健全ならしめやうとするには、單に食物を取つたからとて、決して滿足を得らるゝもので無い、必ず全身の血液を十分に循環せしめ且つ活潑ならしむる爲に、及ぶたけ運動を行はなければならぬのである。若しも然も無い時には、如何に滋養に富めるものを飮食したればとて、決して之を消化することの出來るもので無い、縱ひ糲菜のやうな粗食をしても、運動が十分でありさへすれば身體は常に健全に保たれるのである、その適例は、農夫や下等の勞働者を見ても知らるゝのである、之に反して、毎時も三食ともに品を換へ類を撰びて滋養物を執つても、常に運動の不足なる者は、謂ゆる顏面が蒼白であるのみならず、少し遠足しても息切れが爲るなど、云ふ者が中流以上に多くあるのを見ても思ひ半ばに過ぐるであらうと考へる。

右に略述した所に依りても、運動は或意味に於て衣食以上吾人々類の生活要素である事を知得せらるゝであらう、一體誰でも身體の虛弱を希ふべき筈は無いが、殊に國家としては國民の身體の虛弱なるを厭ふのである、凡そ國と云ふものは、その國民の强壯なるに於て、始めて將來の企望を遂し得べしと某氏が云へる如く、國家と云ふものは人々の衆く集まりて成立つて居るものであるから、その國民の身體が虛弱であれば、從つてその國家が虛弱であると云はねばならぬのであるが故に予は某氏の言を轉換して此く言ふことが出來ると思ふ、即ち凡そ人たる者は男女に拘はらず、その身體の强壯なるに於て、始めて將來の企望を遂し得べしと、何せなれば、誰しも身體が虛弱であれば、何一つ爲るにも大儀であるから從つて控目になる、控目にすれば事業を成就する事は出來ないのは理の當然である、古來身體有つての物種と云ふ俚諺の如く、何人たりとも身體が强健でなければ企望を遂し難いので、その身體を强健

に導くものは何であるかと云ふに、即ち衣食よりも體育である。

併し此の體育と云ふものは、此くまで大切なるものであると云ふ事を知つたばかりでは役に立たぬ、即ち之を好み之を悦びて實行せねばならぬのである尤も近時は餘程之が必要を感じたのみならず、勉めて行ふものも大部殖えたやうである、けれども其は主に男子の側であつて、如何も女子の側から行くと僅に學校時代に於て行はるゝのみであるやうに考へるが、それと云ふも一つは我國民が、未だ維新以前の舊習即はち女子は深く家庭の奥に在るべきもので決して公園や所在のコート杯に出て運動を試み體育を爲すべきものでは無い、と云ふ舊思想が除き去られ無いから、偶々女子たる者の之を行るのを見ると冷笑する、ソコデ女子は何方かと云へば、男子に比べては内氣であるから、その冷笑され又は輕躁であると嘲けらるゝのが厭さに、自然之を控目にする所で無い、全く修養時代以上になると之を廢して顧みないと云ふやうに爲つて仕舞ふのである、それでは折角修養時代に少しく筋肉等に與へたる體育の効用と云ふものが減退して、或は反つて奇異の現象を來たすやうになるのである、固より已れが身體は他人の身體では無い、併し已れが祖國を繼續して行くべき所の大切なる身體である、それにも關はらず、或は半途にして、或は之が必要を感じても、徒らに世間の毀譽を怖れて之を廢すると云ふのは、實に日の出の國に產れて大和魂を有てる女子の振舞では無いと考へらるゝのである。

元來之を冷嘲する者も、亦之が毀譽を畏れて廢する者も、畢竟二つながら體育の價値を十分に咀嚼して居ないからであらうと思はれる、依つて聊か其効用の概略を示すことゝしやう、一體我國人は、未だ衞生思想が幼稚であるから、謂ゆる平素の攝生に注意する事が極めて薄い、從つて輙もすれば疾病に侵され、疾病に襲はるれば直ちに醫師の許に驅け附ける、その驅けつける者は結構だが、間々恐るべき廢

藥などに大切の生命を托して居る者がある、之は實に危險千萬の事である、それは兎も角として平素今少し個人衞生に注意を拂ひさへすれば、以上の如き患は尠ないのである、即ち自己の身體をして常に健康を保持せんが爲に體育を勉むるならば、醫藥の幇助に依りて壽命を長からしめやうとするに優るのである、何んとなれば、體育は身體を强壯にするもので、身體が常に强壯であれば、僅少の黴菌などは決して懼るゝに足らぬものであると云ふ醫家の證明に依つて明らかなる事である。

常に身體の强壯なる者は、その虛弱なる者に比ぶれば、固より多く自己の職務に盡す事が出來るのみならず、尙は精神上の業務に於ても多量に竭すことを得るのである、なぜかと云ふに、身體の常に强壯なる者の頭腦は血液を得ることが多いから、虛弱の者よりは疲勞する事が少ないからである、且つ身體の强壯なる者は、少しく前に述べし如く、虛弱なる者に比ぶれば病に罹る事が尠ない、縱ひ之に侵さるゝとも、危險の虞れが無いのみならず、その回復の期が速いのである。

之を約言すれば、常に體育を行ふ者は身體が强壯となるが故に、一生を快樂の中に送り得るばかりでは無くして、延て國家に對しても自己の本分を盡す事を得る者であると云ふに歸するのである、併し體育が如何に必要なればとて、身體と健康とは各人各個に異なるのは天禀であつて、今更之を如何ともする事は出來ないのであるから、從つて其健康を保持し增進して行く道は異はねばならぬのである、殊に我國に於ける上中二層の女子は、前陳の理由と、尙ほ今日家庭に於ける某事情のため、專ら坐居するの風習が盛んに行はれつゝあるから、如何も身體が比較的虛弱である、斯樣の人々は餘り急に過度の體育を取るのは宜しく無いから、まづ其實行の初めは室內運動か又は庭園內の散歩を試むるのが宜い、而して漸次快活の體育に進まなければならぬ。

維新前比較的に上中二層の女流が强健であつたの

は、謂ゆる武藝の嗜みがあつたのに基づくのである
その武藝と云つても一什十件を行つたのでは無い、
タゝ僅かに薙刀若くは鎖鎌等を主としたので、その
他は餘り多く行つたものでは無い、けれども其爲に
身體の强壯であつた事は、維新の大業を成した多く
の英雄豪傑および學者等が、夫等の人々の身體から
産出したのでも分明に知らるゝでは無いか、雀が
鷹を産と云ふ事は決して理に於て有るべからざる事
であるから、賢明なる諸嬢は其樣な俚諺を信じは爲
さるまいが、若しも其樣いふ事があつては、決して
斯の光輝ある日本の國威を宣揚持續する事は得ら
れぬのであるから、他の毀譽褒貶などには毫も耳を
傾けないで、成るべく生涯を醫藥の世話に爲らない
やうに、專ら意を體育に注いで、近くは家庭のため
遠くは社稷の爲に玉躰を大切せられんことを祈り且
つ望むのである。

胃腸の養生法・(承前)

醫學博士　長與稱吉

米の話

米飯の滋養分

吾々が日常攝食て居るところの米飯は、どれだけの滋養分を有つて居るものであらうか、これ諸君の知らんと欲する所であらう。

例によつてこれを表にして示すと左の通り

	澱粉	蛋白	脂肪	木纖維	水分	灰分
普通の米飯 百分中	三一、三〇	三、一六	〇、〇五	〇、一七	六四、三五	〇、一五

次に粥とおも湯の分析表を掲げて見る。

	澱粉	蛋白	水分	脂肪	其他の成分は略す
白米一合に大凡五合の水を加へて製したる粥	一五、三五	一、二六	八三、三五	—	
白米五勺に大凡五合の水を加へ約三十分程煮て其の中の飯粒を去りたるおも湯	二、七八	〇、一六	九七、〇〇	—	

吾人は嘗て前章に於て、おも湯よりも粥、粥よりも常飯の方が滋養分に富んで居ることを說いたが、以上の表を見ると、益々其の事が證據だてらるではないか、即ち生米百分の中には

澱粉が　七一、九五
蛋白が　六、八二
脂肪が　〇、二九

あるけれども、飯になると

澱粉は　三二、二七　に減り
蛋白は　三、一六　となり
脂肪は　〇、〇五　となり

而して唯水分のみが非常に增加て居るのである。更らにこれが粥、おも湯になると、其の差が益々著しくなる。見よ左の表を

白米、飯、粥、おも湯の滋養分比較表

	白米（百分中）	飯（百分中）	粥（百分中）	おも湯（百分中）
澱粉	七一、九五	三二、二七	一五、二三	二、七八
蛋白	六、八二	三、一六	一、二六	〇、一六
脂肪	〇、二九	〇、〇五	—	—
水分	二〇、一三	六四、三三	八三、〇五	九七、〇〇
其他の成分は略す				

玆に於てか吾人は知る。生米が飯となり、飯が粥となり、粥がまたおも湯となれば、唯水分が增加るばかりで、他の貴重な滋養分は益々減損してゆくものであることを。

粥の効用……俗間の誤解

斯の如く粥やおも湯は、普通の米飯に比して滋養分が少ないにも拘らず、單に『粥は飯より消化れ易い』といふ一種の迷信——所謂素人かんがへから、病人の食餌として重寶がられて居るのである、勿論病氣によつては粥でなければならぬ場合もある、又おも湯でなければならぬ場合もある。けれどもそれは少ない。多くの場合は粥、おも湯を食べなくても故障のない病氣であるのに、飯を杞憂てワザと滋養

分の少ない粥、おも湯を食べる。恁んな詰らぬことがあるだらうか。

言ふまでもなく、病人は健康者よりも身體の成分を消耗される事が多い——衰弱するのは一つはそれが因である。故にそれを支へるだけの用意がいる、即ち消耗れば消耗つただけ補給つていかねばならぬ、而して一方、病魔と戰つてそれに打克つだけの身體をつくらなければならぬ。それには是非滋養分の饒多い食餌を攝取る必要があるのである。粥、おも湯のやうなものは是に至ると其の効用が少ない、是非普通の飯を要するのである



粥、おも湯を什麼しても食べなければならないのは、前にもいつたが、食道が狭窄なつて飯が通らぬとか、胃に潰瘍があるとか、癌腫が發生て出血の虞れがあるとか、重い熱病に罹つたとか、其他胃腸を成るべく安靜にして置く必要がある時などで、其他は決して飯を食べて惡いといふ事は無いのである。然るに諸君は什麼であるか？、少し熱が出たといつては粥を食べ、頭が重い頭痛

がするといつては飯を自制へ、又感冒をひいたといつてはおも湯を啜る。これ皆大なる誤りである。故に自分は多くの病人は、病氣で身體が衰弱くなるのよりも、食餌をひかへ過ぎて増惡くなるのが多いと思つて居る。

先づ斯の如き次第であるからして、粥やおも湯は左程有難いものではない、病氣を罹たらは必ずこれを食べなければならぬといふ事はないのである。「普通の飯が食べられる病氣ならば、決して杞要れる事はないからしてドシドシ飯を食べるが可い。飯は粥よりも消化れ難い」など丶いふのは、取るに足らぬ素人かんがへである。口の中で充分に咀嚼んで粥になる位にして食べたらば、粥も飯も消化れる點に於て大差はないのだ。尚ほ此の消化の事については後章に於てお話する積りであるが、兎も角も諸君は

病氣を罹たら粥を啜るといふ昔からの迷信

を打破つて、何んでも彼でも病氣の際には、身體を衰弱させぬやうにして、病氣そのものに打克つだけの體力を養ふといふ事に注意して貰ひたい。粥やおも湯に信頼して、知らず識らずの間に身體を衰弱らせ、病氣を増進らせるやうな愚を學んではならないのである。

麥の話

大麥は米と共に、古くから我が國民の常食となつて居た、多くは引割麥となし米と混合して炊ぎ、又は醬油を造り「ビール」を釀し、飴を製する原料と供し、其他熬つて麥焦となし、或は麥湯となして茶に代用せられるなど、中々應用が汎い。

前に掲げた表によると、大麥は蛋白質を含むこと米に優つて居るからして、從つて麥飯は米飯よりも滋養の効が優秀かの如くにも思はれる。けれども決して然うではない、大麥は不消化な木纖維を多量に含んで居るのと 而して味が至つて不味いのとで、米飯の右に出ることが能ぬ。

然し麥飯にはまた一得がある。それは胃腸の運動機を亢進めることである、故に麥飯を食べると早く腹が饑る、即ち米飯を食べて五時間で腹が空く者ならば、麥飯だと四時間乃至四時間半で空腹になる。これ麥飯は絶對に消化が善いわけではないが、米飯よりも質が粗糙であるから胃腸を刺戟することが多い、夫が爲に下へ早く下るのである。こんな關係からして麥飯は脚氣病者の食餌として稱揚せられる。

麥飯の滋養分

	澱粉	蛋白	脂肪	木纖維	水分	灰分
麥飯の分析表	一八、七四	三、七七	〇、二五	〇、七七	七六、〇六	〇、四五

。。小麥　は歐洲人にとりて我國の米に相當すべき、重要の食物である。我國にありては唯主として、麵麭を製るに用ひらるゝのみであるが、近來其の需用高は非常な勢ひを以て昇騰した。從つて其の產額も年々增加の傾向を示して居る。

小麥は大麥のやうに、飯に炊いて食用に供せられることはない。皆な麵麭として用ひらるゝ、麵麭には「白麵麭」「黑麵麭」「堅麵麭」等の種類あるが、日常吾人の食用に供せられるのは「白麵麭」である。

麵麭の話

極簡單に麵麭のお話をしやうと思ふ。

麵麭は小麥粉に水を加へ、能く攪拌て糊のやうに泥狀となし、之れを燒いて海綿狀にしたものである燒けあがる時に、練粉の中に含んで居る炭酸瓦斯のために膨脹して、海綿のやうになるのである。

斯の如く燒け上つた麵麭を食する際には、更らに其の表面が狐色になるまで炙つた方が良い、炙ると早く消化する、故に麵麭は中身の柔軟な部分より、上層の堅い部分の方が消化がよいのであるといふのは、焦げる位に燒くと水分が熱のために無くなるからして、非常に碎け易い、從つて唾液にもよく混和するのである。

唾液とよく混和させるといふ事は、凡ての食物を

食べる時に最も注意すべき要件である、が、殊に唾液の作用に待たなければならぬ麵麭の如きは、一層その必要を見るので、啻にパンばかりでなく唾液の消化作用を受ける澱粉質のものは皆さうであるが）「黒麵麭」は燕麥から製出されたもので、「白麵麭」に比しては消化が不良い。「堅麵麭」はたゞ砂糖分を多量に含んで居るので飯の代用品には不適當である其他小麥粉から製出する、饂飩、素麪、麩等いろいろの食品はあるが、是等は後に至り「人工食品類」の部に於て說くつもりである。

白麵麭の滋養分

終りに白麵麭の分析表を揭げる。黒麵麭堅麵麭は常の食用品として用ひられないから畧して置く

	澱粉質	蛋白	脂肪	纎維質	水分	灰分
日本製パン	五三、四四	六、九〇	〇、一三	〇、九〇	三七、七七	〇、七四
獨逸製パン	六四、四〇	九、二五	一、〇九	四、一九	一三、四四	五、七九

以上三種の外の穀類については、左程必要と思ふものがないから省いて置く。

第二類　荳菽類

荳菽類とは凡て荳科に屬する植物の子實をいひ、大豆、小豆、豌豆、豇豆、落花生等これに屬し、多くは米の副食物として用ひらる。

其の中の成分は穀類とほゞ同一であるが、唯其の含有比例が違ふ。即ち穀類には蛋白や脂肪は太甚だ少ないが、荳菽類にはそれが頗る多いのである。殊に落花生に至ると脂肪の含有量が、著しく多い。豆の蛋白質は肉類のそれとは違ひ、荳素といつて一種の植物性乾酪素を含んで居るものである。

荳菽類の分析表

（凡テ本邦產）	蛋白質	脂肪分	澱粉質	纎維質	水分	灰分
黒大豆	四〇、三五	一八、三六	二三、九〇	五、八八	一一、〇九	四、五四
黄大豆	三六、七二	一七、二五	二四、九五	二、四〇	一五、四六	四、〇〇
緑大豆	四二、八五	一五、四八	一五、六八	二、九二	一三、六八	四、五四

小豆 二種平均	二一、四九	〇、五九	五五、五五	五、四四	一四、八四	三、二〇
豌豆	二三、六九	〇、五六	五二、〇三	七、三〇	一四、九三	二、四九
蠶豆	二六、八八	一、二九	四九、七四	一、三三	一五、七六	三、一二
菜豆(乾物)	二〇、三〇	一、〇七	五三、一九	四、四六	一七、五二	三、四七
豇豆 二種平均	二九、八〇	一〇、一九六	四八、九六	四、八四	一四、〇五	三、六八
刀豆 未熟莢共	二、三九	〇、一四	五、三三	二、二六	八八、九八	〇、九二
落花生(剝皮)	二七、五五	四五、八〇	一六、七三	二、三三	六、九五	二、六八

○大豆は菜食者にとりて、一日も缺くべからざる食品である。上に掲げた黑豆、黃豆、綠豆等の他に色んな種類があるが皆、蛋白及澱粉脂肪に富み、其のまゝで煮たり、熬つたりして食し、若くは豆腐となり、豆腐皮となり、豆粉となし、味噌を製り、醬油を醸造る等、其の應用の汎いこと、實に豆類中の冠首といつても差支はない。

味噌醬油の事に關しては、種々お話しなければならぬ事があるが、それは後章に至て說く。

第三類　根菜類

これに屬するものは馬鈴薯、甘藷、萊服、蕪菁、牛蒡、百合、蓮根等で、凡て蔬菜の主根、又は根塊である。中には莖、葉をも共に食用せられるものもあるが、主なのは其の根部である。

滋養成分は表に示すが如く、多量の澱粉の外に、或種のものは中等度の糖分をも含んで居るのを以て特異とする。

蛋白、脂肪は豆菽類に比しては劣るけれども、水分が多くて、不溶解成分たる纖維質が一般に少ないだから此の後に說く葉莖類――葱、蕨、筍、菜等に比すれば消化がよいのである。

根菜類の分拆表（上欄中右方記入にせるは澱粉、左方のは糖分なり）

(凡テ本邦產)	澱粉及糖分	蛋白質	脂肪	纖維質	水分	灰分
馬鈴薯	一九、三三	一、四九	〇、一〇	一、三六	七六、八〇	一、〇三
甘藷	二四、六〇 四、一七	一、一五	〇、一九	二、四八	六八、三八	一、三九
里芋	一一、七〇	一、四〇	〇、〇八	〇、六三	八五、一〇	〇、〇九
九面芋	二五、六九	二、七八	〇、一九	一、一五	六八、八二	一、二八

蕃椒	一四、〇八	二、八二	〇、一三	一、七八	七六、一九	一、二五
佛掌薯	一四、七一	二、八七	〇、一二	〇、七五	八〇、三三	一、三六
蘿蔔	三、二〇	〇、六二	〇、〇二	〇、五六	九四、一四	〇、四四
蕪菁（二種平均、）	二、三五 二、一六	一、三六	〇、一三	〇、六四	九二、四〇	〇、七四
胡蘿蔔	七、四一	一、二九	〇、一五	一、一〇	八九、二三	〇、七七
牛蒡	一五、二三	一、五六	〇、〇七	二、一八	七〇、五五	〇、六六
百合（二種平均）	一六、四二	三、一五	〇、〇九	〇、八八	七九、四五	〇、九二
蓮根（同）	九、八五	一、四〇	〇、〇七	一、〇九	八六、六〇	〇、四六
慈姑（同）	三一、二三	五、九九	〇、一四	〇、三四	七一、六四	一、三五
蒟蒻	六、四〇	一、〇五	〇、〇八	〇、三〇	九一、七六	〇、五六

予が女性觀

江馬蕪藷

方木は圓孔に入らずとか聞いたが、方今の女子敎育に敎育せられたる所の我國の女子は、到底我國に於ける

家庭に不適當

なる者と斷ずるを憚からぬのである、此く云つたならば或は餘り突飛に走り、或は奇矯を衒ふの誚りを免がれまいが、夫等の攻撃は固より甘受する所で、毫も夫が爲に持說を枉ぐる事は出來ないのである、縱ひ陳腐と云はれやうとも、又は因循と罵られやうとも、予は舊來の女大學主義に養成せられたる女子を以て、圓滿なる家庭を形造り得る本能の女性であると前提を置くに憚からぬのである。

今更めて吾人が繰返すまでも無く、方今の敎育には、男女を通じて智育體育德育の三點より割出されてあるのであるが、その中の智育および體育は、或は多少學校の主趣として目的を達せられつゝあるのかも知らんが、吾人の見る所では、何も秦の始皇のやうに黔首を愚にする事を望むのでは無いが、誰やらの言ひし如く

人世字を知る憂患の始

と云ふが如く、近來女子敎育を奬勵せられし結果として、長兵衛の娘も八太郎の娘も、小學校は勿論、

進んで高等女學校または技藝の學校等に入つて、それも十分に學べば宜いが、僅か二三年の短時日の間修業して卒業證書を與へらるれば、最早それで鬼の首でも取たかのやうに手柄顏をして、直ぐに教員になるとか、又は其を嫁入の資格として他に嫁ぐまでは宜いが、

サテ一旦他に嫁しづいてからの狀態は如何といふに、十中の八九と云ひたいが十中の十までは、舅姑と衝突するのみでは無い、殆ど之に事ふるの道も知らないで、無暗に抗辨を試みたり、或は他に向つて舅姑を讒訴するなど、云ふ醜



態を演じつゝある、夫等の實例は日々に吾人の眼を衝て來るのである、之加のみならず、甚しきに至りては、意志の薄弱なるか、又は彼等の容色甘言に酖酔して居るのか、その邊は定かで無いが、何と言ひくるめてか、牝雞の晨するの古智に傚つて夫に奬め、親子別居などいふ不埒をさへ講ずる輩がある。

如何に自己が、まだ浦若くして世故に長け無いとは云へ、是まで親子が共棲して樂しき家庭を作りつゝあつたものが、僅に一女子の增した爲に家庭に波瀾を惹起すさへあ

るに、遂には親子をして別居するに至らしむると云ふものは、これ畢竟方今教育の罪過であると思ふ、何故なれば、昔時女大學主義に養成せられたる時代の女子は、よく其身を保つのみならず、曾て舅姑に對する道を失はずして、剰へ良人に事へて内助の力を致したもので、實に日本女子の美德、美質を具備して居たもので嘆賞に値ひするのであるが方今の所謂學校教育を受けたる女子は、憖ひに本を讀み理を學びし所より、輙もすれば、父兄長上等の見界も無く、直ぐに彼に斯くと口返答をして、所謂理窟詰めにしやうと試むるのである、之は一家の平和を保つ爲には甚だ宜くない、尤も吾人とても、理が非でも屈服せよといふのでは無い、併し縦ひ父兄舅姑等の長上に於て、時に多少の無理があらうとも直ちに其席で口返しをしたり、又は理屈を捏ね廻はすのは宜くない、その時は縦ひ無理と知りつゝも、凝と尖を耐へて置いて、何時か機會を見て話をするとか、又は話をしないまでも、時としては長上の者の氣附く事があるものであるから、それまでの辛抱が大切であるのに、昔しの者とは違つて、今の者は直ぐ遣りこめて以て得意とする風が多いのであるが是等は實に嘆ずべき限りと云はねばならぬ、決して女性の本能を盡す者とは云はれぬのである。

ならぬ堪忍するが堪忍

古來堪忍とか辛抱とか云ふ事は、吾人の常に口にする所であるが、その堪忍と云ひ辛抱をいふ事は、既に文字の示すが如く、何も常に忍び得らるゝ、例へば、腹の空たのを三十分乃至一時間堪へるとか、又は夏の熱いのを堪へるとかいふやうな事は、何人でも辛抱するので、別に珍とするに足らないのである之に反して衆人稠坐の中で辱められたとか、又は彼の韓信が百姓に股間を潜らせられたとかいふやうな事は、實に堪へ難き事である、けれども其ならぬ堪忍をするが堪忍である、それを爲ければ、何事でも仕遂げらるゝものでは無い。

火の中にも三年

と云ふ事は、是また吾人が耳にする所であるが、誰とてこの生身を持つた者が、炎々と燃ゆる火の中に三年は愚か、只の一分間でも居らるゝものでは無い若し其の大火の中に投ずれば、直ちに身を喪ひ命を失ふのであるが、その如く人世といふものは、何事に由らず、畢竟三度の飯さへも硬し柔かしで思ふやうにはならぬものであるから、辛抱が大切であるといふ事を示したものである。

況して人間の中でも、舅姑といひ嫁といふものは互に是まで家風を異にした家で育つて來たものであるから、それが今此に一緒になつたとて、直ちに融和する氣遣ひは無い、如何しても其には少壯なる後入の嫁女たる者は、よくその舅姑の意を迎へて家風を呑みこむやうに努めねばならぬのである、然るに方今の所謂敎育ある女子と稱する者の多くは、他に嫁ぐや否や、直ちに卓上で覺えた圓滿なる家庭を形造り、又は理想の主婦とならんと欲して、却つて風波を惹起すものが尠なく無い、是は畢竟文字を知らしめた害毒ではあるまいか。

生兵法は大疵の本

とやら云ふ事があるが、當今の女子には殊に此の俚諺の痛切なるを覺ふるのである。

一體敎育といふものは、注入と啓發との二主義あるが、注入は權道で啓發こそ眞に敎育の主眼とするものであると云はるゝが、それは或はさうかも知れんが、今日の女子敎育を見るに、多くは女子の天性を延び伸ばさうとするのであると云ふけれども、實際はさうで無いやうに察する、吾人の見る所を以て之を許すれば今日の女子敎育なるものは

角を矯て牛を殺す

の類ではあるまいかと思考するのである、何故なれば、智育の及ぼす所は日本固有の女子の特性たる從順の美を沒して反抗力を助長し、極言すれば三百代言的の人物となし了りて持餘し、體育を奬勵しては粗暴輕佻の風に浸染せしめて、其極所謂擬成男子に

非ざるかの感なきまでに、女子特有の坐作進退に於ける度を破壞して優秀の容を變じて仕舞つて、大いに豫期に反した一種異樣なる病的女子を多々に養成したのは、是れ實に世の先覺者の責を負ふべき事ではあるまいか。

是の故に、殘る德育の如きは、僅に樣に憑つて胡蘆を描くと云ふやうに、徒らに史上を漁りて古人の言動を繰返すに過ぎないのである、尤も或一小部分に於ては、此くの如く古人の言動を繰返すの要もあるであらうが時勢の變れる今日、殊に活きたる者を律するのに、死したる言動を以てして、已れは毫も之が陶冶鑄造に與かり知らざる者の如き態度を執りながら、如何して彼等に德育を强るの權利があらう元來德育と云ふものは、言動のやうな鎖末に拘はるべきものでは無い、縱ひ言もなく動もなくとも、自から其間に於て之を施すことを得るものであるにも關せず、已れ自から電話の送話器のやうな考では、到底第二の我を敎育すべき主婦の德育を涵養する事が出來やうぞ。

また將來一家の主婦たるべき女子達も、德育を文字の上より得らるゝものであると思つて居るのは、抑も間違の本である、それ故に自然一家を成して後も、輙もすれば、親子間の愛情を割き、又は家庭の圓滿を缺ぐやうな事が生ずるのであるから、希くは智體德の三育を受けられたる後、必ず彼の女大學の部分を嚙み分けて、益々日本固有の女德を發揮せられん事を望むのである。

▲朝鮮の栗

農學士　原　熈

韓國には隨分果物の種類がありますが其中で最も多いのは栗であります、大抵の處には樹が栽培されてあつて往々市街頭の家屋の周圍にも見受けるとがあります。朝鮮の栗で一番優等なのは邦人の間に俗に平壤栗呼ばれて居る種類此栗は平安南道の成従郡及其近郡一帶に盛に栽培されて居ます。これは普通の栗とは頗る異つて居て極めて小さな圓形で外皮も甚だ薄い、外皮を剝くに小刀などを用ゐず爪を以て容易に剝くことが出來るのみならず澁皮は外皮に喰付いて除き去られるから大變便利でこれが此栗の大特徴です。只實の小さい外は肉が緻密で味も最も佳く、燒栗茹栗金團などにして最良の一種と推賞するに躊躇せぬ。思ふに此種は清國にも多少栽培せられて居るに違ひない。其栽培は極めて簡易で多少園藝の心得あるものならば誰でも出來ます。要するに我々の見逃がすべからざる一種の果樹として之を諸君に御勸めするのです

育兒に關する世人の誤解

ドクトル　鈴木清義

油斷は大敵

小兒を育てるのは、即ち第二の己を作るのであるから大切の事であるといふ話は、今更私が云はなくとも、毎々その道の方々が被仰ることである、けれども如何も世間では、此方で心配する程ではない、所謂親の心子知らずとでもいふやうに、誠に其道の者と素人の方とは意思が疏通しないやうに見受けらるゝ、或は素人の方の見やうが宜いのかも知れませんが、ともすると如何もさうで無い節もあるやうに思はるゝ、といふのは、兎角世間では、同じ小兒でもあばれるよりは、おとなしい方を好かるゝやうである、成程 私 とても、あばれるよりは温順いといふ方を好かないでは無いが、私の専門からいへば、寧ろあばれる位の小兒を愛するのである、尤も此あばれるといふ事も程度の問題であると同時に、また性質の問題であつて、一概に私があばれるのが好きだと云つたからとて、無暗にあばれ廻つて、友達とは喧嘩する、餘所の墻根は壞すといふやうな悪い性質を帶た事をするのを謂ふのでは無い、

御承知の如く、小兒といふものは大人と違つて、縱ひ一分間でも靜止として居られず或は饒舌るとか、或は手や足を動かすとかいふのが即ち小兒の持前である、故にチッとやソッと悪戯をしても、血色が良くて肉附が緊つて、よく食ひ、よく飲み、よく眠り、大小の通じも適度にあつて、日々學校へも厭がらず 能く通ふけれども、如何も成績が悪い抔といふ小兒があるものですが、何もそれは氣に掛けるには及ばぬのである、固より一から十までといふ譯には行かないが、學問の成績といひ、行狀點といひ、兎角の非難を受けるやうな小兒には、得て健全

の者が多いのである、さういふ健全の小兒は、此の寒中に足袋も穿かず、また薄着をして居ても風も引かなければ、時として少し位食べすぎても、別に膓や胃を傷すといふ事もなければ、手足は冷え切つてまるでヒヾやアカギレだらけでも、毫も頓着なく、あい、、、、ばれまはつて居るやうな小兒は、實に壯健なるもので、また發育も良いのである、斯ういふ小兒は、實は親達が左ほど心配するには及ばないのであるにも拘はらず、兎角學校の成績が惡い、行狀點が下つたと云つては、復習を强ひたり、擧動を口喧しくいふが、それは甚だ宜しくない、一體幼年の頃には、成るべく放任主義を取つて、小兒の遊びたいまゝ、それも學校を休んでまでも遊ばせよといふのでは無い、通常學校へ通ふ者は通はせて、家に歸つて後は、凡てとは云はないが、餘り干渉を試みない方が宜い、例へば、樹木のやうなものでも、生えた天然のまゝのものは伸々として居る、けれども盆栽のやうに無暗に手入れ干渉すると、その性質を萎縮させて終ふと同じやうに、小兒も餘り干渉したり、又は小言を云ふと、その身體も精神も共にコヂらしてしまつて、遂には取返しの附かないやうな者にして終ふものである、是等は大いに父母たる者の注意すべきの要點である、ツマリあばれるといふのも快活なる程度に於て之を認容しなければならぬ、然るに多くの小兒の中には、他の兒女とは異つて、學校から歸ると、言ひつけなくとも温習もすれば、該ては科業外なる物の本や雜誌を讀んだり、非常に勉强をするから、毎時も學校の成績は一番で二番とは下らず、品行も他生徒の模範となるといつて、先生も褒めるが親達も悅ぶ、所が、この小兒は少し寒いといふては頭痛を感じたり、少し食べすぎたと云つては腹痛を發し、學校から歸つても別に外に出て遊ぶでも無く、始終家の内で讀書とか遊戯とかをして居るのみならず、夜になつて寢付が良く無く、僅かな事にも癇癪を發して執念るといふやうなのは、

多く世間の父母は、斯兒は智恵が勝つて居るとか又は悧發で末頼母しいとか云つて悦ぶのであるが、之は實際危險なことで私の所謂油斷大敵といふのは爰にあるのである、

誰しも大切な吾子の事であるから、毛頭油斷のあるものでも無くまたあらうはずのものでも無いのであるが、その無いと思ふのが油斷の抑も初まりである

前段に述べたやうな、所謂あばれ廻る小兒に就ては寧ろ無用なまでも油斷なく注意干渉を試るが、之に反して、注意の上にも愼重の注意を要する所の、即ち後段に例示したやうな小兒に對しては、平然として之を顧みないといふよりは、翻つて彼を危險に導くことに腐心して居る、見よ父母は彼等に對つておとなしい勉强家である、少食である、目覺いなどいふ、あらゆる賞讃の辭を與へて、一步は一步より該子女の虛榮心を增長せしむると共に、身體をして虛弱に陷らしむるのである、



前に予が說きたるあばれ者の中には、時としては成人の後、終生拭ふべからざる耻辱を父母に被らしむる事が無いとも云ひ切れないが、それは後者とても同じことである

まづ其は例外として、普通の生立ちから云へば、前者は無難に父母の希望に副ふことが出來るけれども後者の多くは、半途にして病魔に襲はれたり、又は夭折して終つて、啻に自巳の希望を貫くことが出來ないのみならず子女として父母を悲惱の底に沈淪せしむる樣な事に陷るゝのであるが、畢竟これは油斷の結果に外ならぬのである、どうも是まで世間では醫者といふものは、喩へて云へば、家屋が破損したので、據ろなく之を修繕するの大工を頼む樣な氣になつて居らるゝのであるが、醫者といふものは單に家屋の修繕に於ける大工職のやうなものゝみでは無い、尤も從前は、大人小兒に關はらず、萬一病苦に侵さるゝ時は、ソレ醫者樣といふやうに醫師の許に驅けつける、さうして診斷を乞ひ藥を貰つて歸る、固よりその疾患を治療するのも醫師の天職であるが是を以て醫師の天職は盡きたりと思ふのは大早計である、殊に小兒科の醫師に至りては、小兒の疾患を治療するに先だちて、小兒の健康を常に確保して行くといふのが天職である古語に、木まづ朽ちて而して後蟲これに生ずとかいふが如く、小兒の身體といふものは、多少父母の遺傳性に基づくものもあるだらうが、まづ無病息災で產れて來たものとしなければならぬ、その無病息災なる身體、即ち木なれば立木の生々としたやうなものである、然るにその父母たる者の油斷よりして樹木の風雪のために折れたやうに表面には見えないけれども、いつとはなしに病身にして終つて、最早それがし表面に顯はれるやうになつては、恰も木が朽ちて蟲が之に生じたと同じやうになつてから、初めて醫師の許に連れて來る、父母も困るだらうが醫師も樂では無い、啻に父母や醫師の困るばかりで無く、その子女たる者の不幸は此上も無いのである、それといふも是まで世間の多くが病氣に罹らなければ醫師の玄關を跨ぐものでない、決して達者な身體の者の行くべき所でない、と片意地に思ひこんで居て、

達者な時に醫師の門を潜るのは、何か世間の者に顧を見らるゝやうな氣がして、即ち病人らしく思はるゝと云ふので、實は少し位病氣でも、成るべくは生體も知れない所謂毒にも藥にもならぬといふやうな賣藥などを、高い價を拂つて飲む者がある、

醫師は賣藥屋にあらず

大切な掛け替への無い生命を保ちたいが爲に、爲體も知れない賣藥の廣告や能書に目を眩まされて、それを用うるとは實に危險千萬の話である、けれども成るたけ病人の風をしたくないといふ爲に、此くの如き危險までも侵すのであるが、是といふも約まる所は、醫師は病患を除くと同時に賣藥屋であるといふ舊來の誤想が脱けないからである、であるから、猶更小兒の身體に就ても、まづ病氣で、その病氣も素人の手で如何ともすることが出來なくならなければ醫師に診て貰はぬといふ風に頭が固まつて居るのである、併し醫師といふ者は、舊來はイザ知らず、最早今日では單に疾病のみを療ずるのが天職では無くして、豫め人々が疾病に陥らないやうに注意して行くのが先天的の醫師の本分となつて居るのである若しも醫師に此先天的の本分が無いとすれば、なんと不斷から

公衆衛生の個人衛生

のと說き廻る必要がありませうや、是は醫師の側ばかりでは無い、素人側の方でも毎年之を喧ましく飛廻るのであるが、それといふも畢竟は各自が生命を大切に思ふからの事である、然るに如何いふものか第二の我たる子女の身體に關しては、誠に之に對する注意が及ばない所か、やるで油斷がちで、平常から之が注意を拂つて、月に一回乃至二回なり、子供健康診斷を受けるなどいふ父兄は、まづ今日の所では全く無いといつて差支へないといふ有樣で、實に心細いといはうか、はたまた嘆はしいといはうか殆んど之に適當なる文字を見出すに苦しむのである殊に中流以上になると、所謂御出入醫師なる者があつて、毎日のやうに推參するのであるから、さぞ

かし家庭内の衛生は勿論、患者に對する手當等も十分に行屆いて居るであらうと思ひの外、尤も或點は形式上よく行屆いて居る、けれども折角の點を閑却して居ることが多い、例へば氷嚢を使ふ場合にも、患者が若しも寒冷に堪へられないと云へば、直ちに之を除き去つたり、小兒が若しも藥が苦いと云へば、その効果の如何を顧みないで多量の砂糖を混ぜたり或は全く或藥劑を除いて與へたり、甚だしきは患者の意を迎へて投藥を見合する者さへある、

此の如きは其罪の果して孰れに在りと問ふのが寧ろ愚であるから、それは暫くおき、一體是等の家庭では何が爲に所謂御出入醫師なる者を抱へて置くかといふに、多くは世間體を繕ふと同時に、間々疾病を構ふるに便利なるが爲の如くに思はるゝ、若し否らざれば、專門たる醫師の投藥を拒んだり、或は疾病でも無い者が殊更に投藥を乞ふなどの必要は何處に求むることが出來やうぞ、中流以下ではさうでも無いが、より以上の階級にある家庭の子女は、常に是等を見聞して居るから、矢張り見やう見眞似とやらで、なか〳〵醫師の言ふことを聞かない、所が、斯ういふ所の子女は、常に金錢に自由なると、周圍の者より徒らに尊敬を拂はるゝものから、綺羅を纏ひ、または故に尊大倨傲の念を增長して、同じ遊ぶにも人目を憚り、或は外見を繕つて、快活の遊戯も爲し得ないのみか、偶々チニスや競爭をしても、いつも人後に落つるといふ有樣である、

毎時も此く人後に落つるから、終には其遊戯競爭にも加はらない、是等に加はらないから、從つて引込み勝となる、引込み勝となるから、知らず〳〵身體が虛弱に陷る、身體が虛弱になれば、自然運動でも厭になる、太儀になるといふやうな結果に陷りて、所謂一種の病的人間となつて終ふのである、此くの如き病的子女は、個人としても何の快樂もないばかりで無い、成長の曉に至りても、社會に何等の効用を爲さないのである、畢竟子女をして此くの如き不幸の淵に沈ましむるのは、果して誰の罪である

かといふに、言ふまでもなく父母の油斷よりして此に至るのである、彼の太陽が照しても

陰翳と日向

のあるやうに、世の中の事には必ず裏と表といふものがある、然るに單に一方ばかりを見て速斷する時は、後に取返しの附かないやうな事に立至るのである、況して小兒の心持といふものは非常に變化の度の激しいもので、朝と晝、晝と晩といひたいが、尙ほ極端に云へば時々刻々に變遷して行くものであるから、父母といふ中にも殊に母親たる者は一層之に意を注いで善良なる方嚮に導くべきは云ふまでも無いが、尙ほ常に子女の言語、擧動、行爲、智力、意志等に付ても、單に子女の表面に現はれる事のみでなく、此の如き行爲の後には如何なる飯結を與ふるや、此くの如き言語の半面には如何なる意味が潜伏するや、或は某々の願望または否定を含蓄するのでは無いかといふやうに、須らく其裏面の如何を讀破るだけの眼識が無ければならぬ、

芝山益子の君の略傳

小川直子

君は益子と稱へ、脊の君うせ給ひて後の號は昌懇院、氏は芝山と呼びたり、祖父を持共卿といひて、文學並に敷島の道に深く心をこめ給ひ、當時世に名ありき、考を宮内大輔國典朝臣と稱へたりとぞ、御母は淺野氏にて、天保十四年四月一日、打日さす西の都のそれの館に生れ出給ひ、幼きより才かしこく萬の道にさとかりければ、大和唐土の文のはやしはいふもさらにて、敷島の道にも秀で給ひ、はたみめ形の勝れ給へること類稀なる聞え高く、實に公卿の姫君と稱ふるにもにげなからず、らうたき御さまなりき、はやうより從一位坊城俊明卿に養はれ、十七歳になり給ひし時、從四位上民部大輔芝山敬豐朝臣に嫁ぎ給ひ、妻たる道をよく勤め、夫の君の寵を得たる思ひ者ありしかど、ねたみ心などは露ばかりも

なくて、妹背の中らひうるはしかりけれど、敬豊朝臣病にかゝりて、日にけにあつしくなりゆき給ひ、遂に文久二年八月十三日といふに、はかなくも朝の露と消え失せ給ひければ、益子の君悲しみ歎き給ふ事大方ならず、見る人さへ袂をしぼらぬはなかりきとぞ、此時僅に二十歳にて、御子もおはしまさゞりければ、勸修寺經理朝臣の公達にて、慶豊君といへるを養ひたてゝ嗣と定め、これを愛しておほしたて給ふさま、我うみたるに異る事なく、四書五經などはみづから敎へ授け給ひしに、やう〳〵人となり給へる頃、此君しば〳〵病におかされ給ひ、いづを果とも見えざりければ、みづから家を退き、山深く隱れ給ひければ、すべなくて益子の君しばし家を嗣ぎておはしけるが、後に正三位坊城俊政卿の三郎祐豊君を乞ひ請けて嗣となし、萬の家政は坊城家に任せ益子の君は心靜に風流の道に心をこめ、それのみならず、わしの深山の敎をもしたひ、宗淳の宮とてはやうより御ぐしおろさせ給ひ、朝日が岡のつゝきなる鹿ケ谷に住せ給へる尼宮にしたがひ佛の道奥深う尋ねつゝ、心を澄して月日を送り給ひけり、さるからに山階の宮へもしば〳〵めされて、月次の御歌會はさらにもいはず、霞の匂ふ花の頃、霧の薄ぎぬ引はへて、錦をさらす秋の末には、此宮必ず大井川に舟を浮へて御遊びせさせ給ふ、其折には御ともし給ひて、呉竹のよのうきふしをよそにしてすぐし給ひしに、祐豊の君は陸軍に從事して居給ふほどに、ゆくりなく此世を後にして、極樂の蓮の臺にいそぎ旅だち給ひけり、益子の君いみじう驚き、やがて東の都へとのぼり來給ひ、跡とふわざもねもごろにいとなみ、はた嗣をも定めむと、兎かう心をなやまし給ひけるが、幸に粟田口定孝朝臣の二郎孝豊君を養ひ給ひ、御住居をも鳥が鳴く東の都にうつし給ひ、樞密顧問官高崎正風卿の乙姫松子の君を乞受けてめあはせ給ひければ、妹背の中らひむつまじく、ひとりの姫君をさへまうけ、をさ子と呼び榮え給へば、こよなう樂みつゝ居たまふほどに。日露のたゝかひ始

まりて、孝豊朝臣軍に随ひ、満洲の野におりて、國家の為に命を捧げむといそしみ給ひし時、益子の君は、君の御ために命をさゝぐるは益良健男の習ひなれば、露ばかりもいとふべきにはあらねども、おなじくは百戦百勝してつゝがなく凱旋こそあらまほしけれとて、神佛に誓をたて、身をもて嗣孫の君にかはらんと、御嶽山の神にねぎ、大教正芳村正康ぬしを頼み、祈りのわざどもねもごろにせさせ給ひけるが、其の験いちじるくて、孝豊君一點の疵だにうけず凱旋し給ひぬ、益子の君の喜びなゝめならず、嬉し涙に袂をさへうるほしつゝ、これこそ神の守り給ひけるによるなれと打喜び、これより相州葉山のなり所にうつり住み給へば、高崎大人のなり所へは、御庭つゞきの通ひ路はひわたるばかりなり、されば大人もいとねもごろにのたまひて、朝夕近きわたりのせうえうなどをも諸共にしたまひつゝ、過にし頃も海邊に遊び給ひし折、益子の君



おもふどち磯菜あをのりとり〴〵につきぬは春のあそびなりけり

と口すさひ、また大人の方へは、さま〴〵有識なるともがらのしば〴〵問ひ奉る事にしあれば、芳村正

康、川合清丸ぬしなど來たらるゝ折は、必ず傍にて其物がたりどもをば、皆きゝとり心にしめて、世を樂しみつゝ暮し給ふほどに、春去り夏になりければ涼しき御住居ながら堪へぬ暑さにやあたり給ひけん例ならずくるしみ給ひしを、嗣君妹脊にて問ひ來給ひ、いたく打驚き、くすし達も何がしくれがしと招きて見せ給ひけるも、はかぐ〵しからず、醫師達のすゝめによりて、鎌倉病院に入れ奉り給ひ、うからやからの君たちあまた來給ふ中にも、高崎三位殿には、いたくうち驚き、御孫のをさな子の君をも伴ひゆき給ひしかば、こよなう喜び給ひ、あはれ此世にて此兒の顔を見る事はおもひもよらざりしものをとて、涙を目ひとつにたゝへ、幾たびも手を合せて拜み給ひきとぞ。其をり大人より梨の實の大きやかなるをうづ高く籠にもりて贈り給ひしに添えられし歌

　いつまでもかくて此世にありのみを
　　なしとのみやは思ひすつべき

とありけるを見て、打よろこびつゝ、かへしに

たまはりしみ歌のごとくいきのびて
　ながくこの世にあらむとぞ思ふ

かく玉の緒も絶えぐ〵なる折にしも、思ひを述べ給へるは、常のみこゝろがけよかりし故ぞと、人々感じ合へりけり、かくても遂に明治の三十とせ餘りこゝのとせ八月二十六日といふに、齡六十あまり四とせを一期としてみまかり給ひぬ、終にのぞみて

　極樂も高まが原も今よりは
　　こゝろのまゝにゆきて遊ばむ

と一首の歌を詠じてねぶり給ひけり、諡を高秋月絢姫命といひ、神式もて谷中のおくつきに葬れり、此折にも、北白河宮の妃の君殊にをしませ給ひて、玉串の黄金あまた賜ひぬ、諡にいふ死榮とか見えてめでたかりしは、悲しき中の喜びなりけり。

　さて世におはしける折の御人となりを、一わたり申さば、御心の底ひ清らかにらう〵しう、情深くて、唐土文を鹿ケ谷にすめりし朝梧陽といふおうなに學び、易經までもしらべ給ひ、佛の道は相國寺の

獨園禪師に參禪し給ひ、大和文並に敷島の道をば高畠式部刀自に學び給ひけるが、此刀自うせにし後は、三輪貞信といひし尼につきて問ひきゝ給へりしが、諺にいふ藍より出でゝ藍より靑しといへるごとくなりき、歌集あり、放懐樓歌集といふ、猗箏の御琴も妙なる御爪音、はち插花も茶道も皆奥深きゆるし迄得給ひ、水莖の跡もうるはしうかき流し給ひければ、宮々の御遊びかたきにしば〱めされても、萬に行わたりて、起居振舞のうるはしかりけるさま、いひしらすぞおはしける、ひと日御庭の松を見てよみ出で給へる、

常盤なる松のみさをにならはまし
　よはひは願ふわが身ならねど

とあり、かゝればやもめになり給ひてのち、四十とせ餘り一日の如く愼みて、家庭を治め給ふにも、すべて德を先とし、奢侈をいましめ、萬つゝまやかにし給へども、世の爲慈善のわざとしいへば、施し給ふこと大方の人の及ぶべくもあらず、はた過ぎにし年、にしの都に住み給へる頃、光風社とて女どものみにて敷島の道につきてのつどひを開きける折などにも、人々社長にとて願ぎけれど、力及ばずとて、固く辭して、うべなひ給はざり、斯く我身を後にしてゆづり給ふ事大概斯の如くにて、女の鏡とするに餘りある君なれば、おのれも常にしたひまゐらせて西の都にすめりし頃より親しみ深かりき、されば其みこゝろざまの懐かしさを、我教子達にも語らぬとて、いさゝか書つらねおきぬ。

現代の女流畫に對する予の感想

東京美術學校教授　紀　淑雄

女子が繪畫を學ぶと云ふ事は、もと趣味の觀念を養成するに在ると云ふ事は固より論を待たぬのであ

る、然るに現時女流の專門的畫家には老年者が多いが、青年の女流は、之を專門的といふよりは寧ろ

嫁入りの準備

として、或は一定の學校に入り、若くは塾等に通つて之を研究した後、或物を描きて之を展覽會等に出し、世間に對して己れが評價の瀬踏をする、乃ち職業—專門的に之を學んで生活すると云ふまでに行かずとも、物質的精神の要求は大抵此くの如くである

而して專門的に之を學ぶものも、高等女學校等の敎員となるが爲に、檢定試驗なる關門を通過するのを以て、終局の目的とするに止まると云へば、それは先づそれまでゞあるやうなものゝ、之も或意味より云へば、高等女學校の敎員には、十分適當なりと云ふ事は出來ないのである、何故なれば、女子は男子の如く想像力に富まざるのみならず、また修養力に缺くる所がある、併し女子には又女子の特性なる緻密なる能力、注意深い點などがあるので、換言すれば、

男子は自在畫
女子は用器畫

を授くるに於て各々優つて居るので、尙ほ適切に云へば、女子は下級なる初歩の者に繪畫を敎ゆるに最適任者と云ふことは出來るけれども、上級の自在畫を授くるには少しく考慮を要するのである

殊に文部省の檢定試驗も、近き將來に於て之が廢止に接するので、その曉には女子が折角繪畫を研究しても、之を利用すべき途を失ふのであるから、その時には文部省も

美術學校の一部を開放

せねばなるまいと思ふ、否らざれば私立の學校に特權を與へて、女子を公けの機關に使ふと云ふ事は、今より大に考慮を廻らすべき事と考へる、現時女子の方面に取りて、音樂のみは美術の代表として設備がある、けれども繪畫に至りては、女子を美術學校に入れると云ふ途は塞がつて居るのである、但し私立のものは此の限りでは無いが、その換り別に特權

も無いのである、
他の一面より見れば、女子が美的の教育に手觸る事が多くなつて來たので、所謂畫家として立んよりは寧ろ専門的職業的として立たうとする傾向が、現今の若い女子に多くある、之を以つて見るときは、今よりして後、日本の繪畫界には女流畫家の新現象が出る事であらうと豫想せらるゝのである、現に女流畫家の成効者、例へば、文部省の展覽會に於ても男子と頡頏して成効者を出して居る、縦ひ夫等が成効者で無くとも、必ず將來に成効者を出す事を理想視して居るのである、また縦ひ夫程までゝなくとも女子が繪畫に就て快樂を感じて居る事は非常なものである、

ソコデ成効した者若くは繪畫界に途出の者は、兎角獨身生活に傾き易いのであるが、之は其研究中に婚期に遲れる等の爲であらうと思はれる、若しも若い女子が素志に反して専門的に進む事が出來なく、設ひ半途にして家婦となつても、之を學ばざる者に比ぶれば其快樂は非常に多いのである、當に自分が快樂なるのみならず、爲に夫を慰め、子女に趣味の教育を施すことが出來るのである、

繪畫は從來日本のみでは無い

世界何れの國といへども、形式の美術と云ふものは、必ず中心に外の美の趣味を感ずるのである、例へば床の間の掛物、花瓶の花、欄間の額、その他起居調度等に付ても、一も之の無いものは無い、

故に此の趣味の無い者よりは、既に素養のある者は、設ひ一輪の花を挿し、或は夫若くは小兒を伴うて展覽會に行き、又は公園を散歩しても、あらゆる方面に向つて觀察を下して趣味感興を有つて居るから、克く夫や小兒を慰藉する事が出來るのみならず自ら其者の人格も高く、且つ世間に對する道も廣く見る事が出來るのである、

然るに從來女流の畫家には、比較的成功者が尠ない、世間は多く是等を目擊して居るので、兎角の評がわるのみならず、動もすれば、彼の教員または成

功者が獨身生活を爲し、又は之を唱ふるものから、尙は種々の批評を下さるゝのであるが、之は前述の如く、研究中に婚期を失つた者等で、寧ろ憐むべきものである、尤も往々女流畫家の中には、一種の性癖を成して居る者もある、けれども夫等の多くは前掲の事情に歸因するのである、

之に由つて見るときは、予は寧ろオールド、ミスに對しては、從來の如く趣味索然たる家庭に奕むる爰に憚らないのである

梅のうた

中山幸子

梅

梅の花さけるときゝて來て見れば
　われより先に人も來にけり

花といふ花の中にも梅の花
　花にさきだつ花はこの花

社頭梅

龜井戸のみやしろまへの梅の花
　ことにかをりの高くもあるかな

早春梅

まだ〳〵とおもふがうちにけさ見れば
　うめのはつ花かをりそめたり

浦の梅

うらやすくすめるなるらむうら人の
　軒ばつゞきの梅をめでつゝ

田家梅

おのづから籬に咲きたる梅の花
　ふしおもしろきうぐひすの聲

名所梅

ふる雪に月が瀬の里もうづもれて
　おぼろに見ゆる梅のはつ花

箙の梅

宇治川におくれしことを思ひ出に
　生田の森のいさましきかな

訟廷より得たる男女の戀愛觀

東京地方裁判所 豫審判事 中川富太郎

予は自分の立場からして斯樣の問題を論ずることの甚だ穩當であるまいといふよりは、寧ろ正鵠を失するなきやの嫌があるのであるが、折角の御囑望であるから、聊か自分が職務の上より得たる事の一二を御話して見やう、

予が職務として裁判所より重大なる犯罪の爲に出張して、昨年一ヶ年中に臨檢して取調べたる事件は總計五十件餘である、而して其五十有餘件の中に、之が犯罪の動機を取調る所に依れば、その半ば以上所ではない、

總計の三分の二以上

すなはち三十件餘は孰れも男女の戀愛より生じたもので、殘り二十有餘件の中、十五件許りは酒と賭博とに原因し、其他は種々なる原因に基くのであるが是に由つて見れば、世の中の重大なる犯罪は、槪して男女の戀愛から生ずると云つても宜い、昔は酒と賭博といふことを云つたものであるが、酒と博奕とが犯罪の原因となるものは至つて尠ない、

ソコデ男女の戀愛上から多くの犯罪が出來る所を見れば、この戀愛といふことに就ては、尤も世人は注意を拂ふべきである、殊に社會の爲に盡瘁する人は研究せねばならぬのである、特り恨らくは、裁判所に現はるゝ是等戀愛上の犯罪は、未だ深く其原因を究むるの遑がないので、其は他日に讓るとして、今日まで表はれたる事實の上からいへば、上流の社會には皆無の姿で、中流に至ると少しはある、けれども誠に僅少で、下流が最も多くを占めて居る、是の故に、犯罪の上より戀愛を觀やうとしても、如上のやうに、上流の人には幾んど無く、中流といつても極めて少ないといふ有樣であるから、從つて犯罪の上から男女の戀愛を見るとすれば、それは

下流の社會に於ける狀態

に過ぎないのであるから、云はゞ我々の見る戀愛といふものは下層に就ていふものと思つて貰はなければならぬ、

偖その下層の者の戀愛は、果して世上で云ふ所の戀愛であるや否やといふことは疑はしいのである、まづ予が今日まで得たる下層の者の戀愛は、概ね神聖なる戀愛の下に男女が結合するのではない、言を換へて言へば、その男女の性格、身分、目的等に依つて結合するのでは無くして、總て

一時的の感情から發作

するのではなからうかと思はれ、その一時的の感情といふても、その人の容貌などに基くよりも、寧ろ

金錢の下に結合

するのである、その證據には、毎時も男女の戀愛から生ずる犯罪に於ては、男子が金錢のある時は、誠に女子は從順であるけれども、一朝男子の懷が寂しくなつて來たのを見て取ると、女子がその男子を捨て顧みないことは、恰も敝れたる履ほどにも思はないのである、殊に甚しいのは、女子の觀念は、今日甲の男と結合して居ても、其の懷の淋しいのを見ると、直ちに其を捨て乙の男と結合し、乙の無資產となるのを見れば、忽ち丙と結合するのみではない、既に一旦振捨てたる男子と途中で出逢つても、殆んど行路の人のやうな按排で、毫も愧る模樣がない、それは未だしもであるが、若しも今日結合して居る所の丙者が懷の輕くして、前の甲者が時を得顏に資產が出來たと見ると、また忽ち丙者を振捨て甲者と結合しやうと試みる、否幾らもさうして居るのがある、

ソコデ男子と男子の間に、その女の事から爭を生じて殺傷したり、又はその女子の不貞を憤つて殺傷することが最も多い、してみれば犯罪の上に現はれたる男女の戀愛といふものは、金錢の上に男女が結合するのであるから、迚も本統の戀愛といふことは出來ないと考へる、殊に可笑いのは男子の方でも、女子に捨てられて、畢竟これは自分の懷が淋しくな

つた爲であると觀念して、更にその女子を顧みない者もある、

今年に入つてから、彼の諸新聞紙上にも出た、大崎村の女房殺し即ち平野新吉が、その內緣の妻笹川吉を殺傷したのも、初め互に金錢の上に結合したのであるから、その金錢が無くなつたから、別れやう別れまいといふ事の爭の下に、遂に重大なる犯罪を生じたのである、また昨年の年末に、岩淵町の岩瀨由藏が女を殺したのも、是また眞の戀愛の上でなく金錢の上に暫らく結合した結果である、また昨年十二月初旬、小石川に於て藤原龍太郎が竹內文次郎を殺傷したのも、ツマリ婦人の事に原因して彼が如き慘劇を演じたのである、また是も昨年十一月末の事であるが、本所永倉町に於て蜂須縫作なるものが杉浦甚五郎なるものを殺傷したのも、初め蜂須が關係せし婦人が、漸く蜂須の懷が淋しくなつたのを見て杉浦に慇懃を通じたといふのが原因である、同月中に遠藤松造なるものが吉田花なるものを殺傷したのも、孰れもその犯罪の動機は戀愛であるが、その戀愛が大卒金錢の上に男女を結合した結果に外ならぬのである、

凡そ男女の戀愛といへば、多くは之が働きかけをするのは男子である、所が、犯罪上に現はれたる所から見れば、却つて　女子が働きかけをする觀がある、何故かといふに、下層の婦人は固より其男子と結合するのではなくして、即ち金錢の上に結合するのであるから、女子から結合を求めやうとするの傾きがあるのである、

畢竟是等に就ては、周圍の境遇、其者の位置、生活の狀態等種々の原因が綜合して此に至らしむるものであらうとは察するが、尙ほ手本へ切込んで見れば敎育の不完全なる事の爲に斯樣な結果を生ずるのではあるまいかと考へる、故に世の父兄たる者は勿論であるが、之が子女たる者も、謹に人の擧動みて己が擧動なほせといふ事を味ふて、邪路へ踏迷はぬやうに切望するのである、

實扶的里の話

高橋房次

余菲才を顧みず、曩に小兒病の二三に就き諸姉の注意を希望したりしが、再び餘白を得て實扶的里病に就き知る處を述べて新年の初訪問となす

實扶的里とは如何なる疾病か

時昔既に世上に知られたる小兒病にして、吾人の危懼に値ひしたるは幾百年前來なりし、漢醫呼んで馬脾風と云ふ、其の名の起因する處を知らず、染傳力の劇烈なると經過の悲酸なると豫後の猛惡なるとにより、子々持てる親の心痛一方ならず、爲めに種々迷信上の豫防法などありし、然るに泰西の文物浸々として輸入し、殊に醫術に於て然る以て、傳染の系統も明瞭となり、病原も闡明せられ、治療も完全となり、昔日の馬脾風は單に醫學界の過去歷史となり、實扶的里も亦往日の鋭鋒を收むるに至れり、此の病は實扶的里桿菌の侵入によりて爲作せらるゝ八種傳染病の一なり、往日の馬脾風は單に喉頭咽頭等に侵來する處の一ッの疾病の如く解釋せられたりしも、今日の實扶的里は粘膜、創傷面に侵來するものにして、眼の結膜に來りて實扶的里性結膜炎となり、又創傷面に發病する事もありと、主として好發する部位は、扁桃腺喉頭鼻腔等にして、呼吸困難を惹起す、之は腫脹及義膜の爲めにして、敢て本病に關らず、凡ての疾病も早期に發見し直ちに醫療を要するを急務とすれば、小兒にして發熱し咳嗽し咽頭痛あり、加ふるに不安、啼泣などあらば醫療を忽にすべからず、尙ほ一歩進んで咽頭の檢査、是れは育兒上に老練家であるとか、看護上知識のある人なれば容易の事で、其の檢査によりて咽喉に白色の膜様物でも認めたら尙ほの事至急醫門を叩くべきである、學術の恩典は偉大の物にて實扶的里との診斷がついたなら、刻一刻も早く實扶的里血淸液の注射療法を受くべきものなり、此の血淸療法は今日殆んど完全なる療法にして疾病の特効藥としては血

淸は蓋し理想的のものなり、往日悲酸を極めたる本病も昔日の夢となりしは實に血淸の賜物にして、本病の血淸創作者なる獨乙のベーリング博士及本邦の北里博士は世界の巨人であると信ず、本病も絶對的特効藥の血淸療法に縋て進渉せし藥物的應用を以て幾多可憐の愛兒を救濟する事が出來るも、倘ほ特筆大書して諸姉の注意を絶叫するは實扶的里後麻痺と云ふ後發病である、是れは實扶的里に罹りたる後ち若干日を經て心臟の異常とか、假性脊髓痨と云ふ四肢の麻痺とか口蓋板の麻痺とかを來し、嚥下困難・嚥下液の鼻孔より逆流、發聲鼻聲を帶ぶとか、それはそれは嫌惡すべき疾病にかゝるものにて、今日の學問にては、此の後發病を絶躰に豫防する事は出來ないとなつて居る。



こは實扶的里より導ろ恐るべきものにて、往々輕症の後發病は家人も心付かず終る事もあるべし、一度實扶的里に罹りたる場合は、全治した後も約一ケ月位は醫門を辭せざるは患兒の爲めに大得策となす、余は諸姉に告ぐるに實扶的里には特効藥あるも後麻痺には然らざるを以てす

如何にして豫防するか

有病兒は勿論病原附着の恐れあるものには絶對

的に隔離するは云ふ迄もない、且つ流行地に兒を連れ行かず、本病は咽頭の外傷とか炎症とかあつた後に發病することがある、即ち魚の骨を刺したとか麻疹水痘後とか猩紅熱病中とか咽喉加答兒後とかに頻發し易きものである、一度患兒を出したる時は法律規定の下に消毒は勿論豫防法を行はる、これは患家の爲め國家衛生の爲め重大なる事にて、患家にても勉めて他に傳染するが如き事なき樣に注意すべきで、病原は咯痰中に咯出せらる、者にて嚴重に痰壺を消毒し被衣寢具居室の消毒は當事者のみに委せず專心注意すべきである、亦多數の子供を有てる家にありては一兒の罹患したる場合には他の小兒を隔離するか或は患兒を病院に送り他の小兒には實扶的里血清液の豫防注射法を受るを至當とす、重に二年乃至七年位の間の小兒に流行するものにて稀れに大人にても罹患す、そして免疫と云ふものが極短月日であるとの事、故に再三患へないとは謂れない、季節は四期を通じて絶えず散見するが最も多いのは春冬の二期であるとの說なり、あひも變らず無味乾燥の話し諸姉の一覽に値しないは慚愧すべきである

完

裁縫を能く覺える教へ方

女子高等裁縫學院校長　小出新次郎

裁縫はもと〳〵實科の事であるから、個人に就て教へるには、左までむつかしいこともないが、五十人七十人といふやうに團體になると、それに對する方法を講せねばならぬ、

そこで感じたのは、小學校などで生徒を率ゐるに、オイチニといふ掛聲をして居る、オイチニといへば藥賣のふれ聲にも使はれて居て、近頃妙にも聞ゆるが、一二といふたのでは、何うしても揚々として歩かれぬ、そこで安々と掛聲も出、足取もうまく行く

オイチニとやらねばならぬ、この呼吸が何にも應用せられ、裁縫を敎ふるにも參考とすべきである、

裁縫に於けるオイチニは內經外經といふことである、たとへば褄先をつくればとて、羽織の襟付をすればとて、被布の小襟をつくればとて、それ〳〵この內經外經といふ原則によらねばならぬ、何故かと云へば、褄先をつくるにしても、一寸ブキをつけるには二寸の間を半圓形にナリをつけねばならぬ、そのナリは表の布を平かにして、裏だけに二寸のナリをつけて、褄先の格好を作らうとすれば、その困難は一通りでない、而已ならず到底よい格好が出來ぬ、これに反して表と裏の双方で相當の割合を立て丶、表に切下をし、裏にそれ相當のナリをつける、斯うすれば造り方も容易く、自然完全なものが出來る、その表と裏との割合は、卽ち外經內經の關係である、

たとへば

羽織の襟つくり

をするにしても、折裏と折表とを同じ寸法にする人があるが、これも外經內經を考へぬ仕方である、羽織といふものは、平らかに襟をつけて、折つて被るのである、それ故折裏よりは折表の方を廣く襟づくりして、そのまゝで襟つけして、折つて被るやうにすれば、折表の方が一分の緩味があるからして、樂々と襟が反る、被布の小襟の如きも大同小異である、なほこの襟づくりに就いて注意すべきは、身頃の襟付のへらが、襟肩近邊と裾とは、三分以上の差になつて居らねばならぬ、たとへば襟肩近邊で三分の縫代にへら付するとすれば、裾では五分もしくは六分の縫しろにする、さもなければ襟との一致がとれぬ、又襟のゆるめ工合もそれ〳〵定めがある、先づ襟肩廻はしの範圍で、凡そ指先だけ襟をゆるませ、又それより下を乳附まで、同じく指先だけゆるめ、乳附より下は裾より五六寸上までの間は、身頃も襟も少しもツり、タルミなくして、それより下の五六寸の間で、又指先だけのゆるみにする、先づか樣にすれば手際よく上るのである、又一つは襟先の縫

方、今一つはマチのへら付が、前マチと後マチの差に定めがある、少くもこの五點が完全にゆかねば、羽織の襟は完全に出來ぬ、また

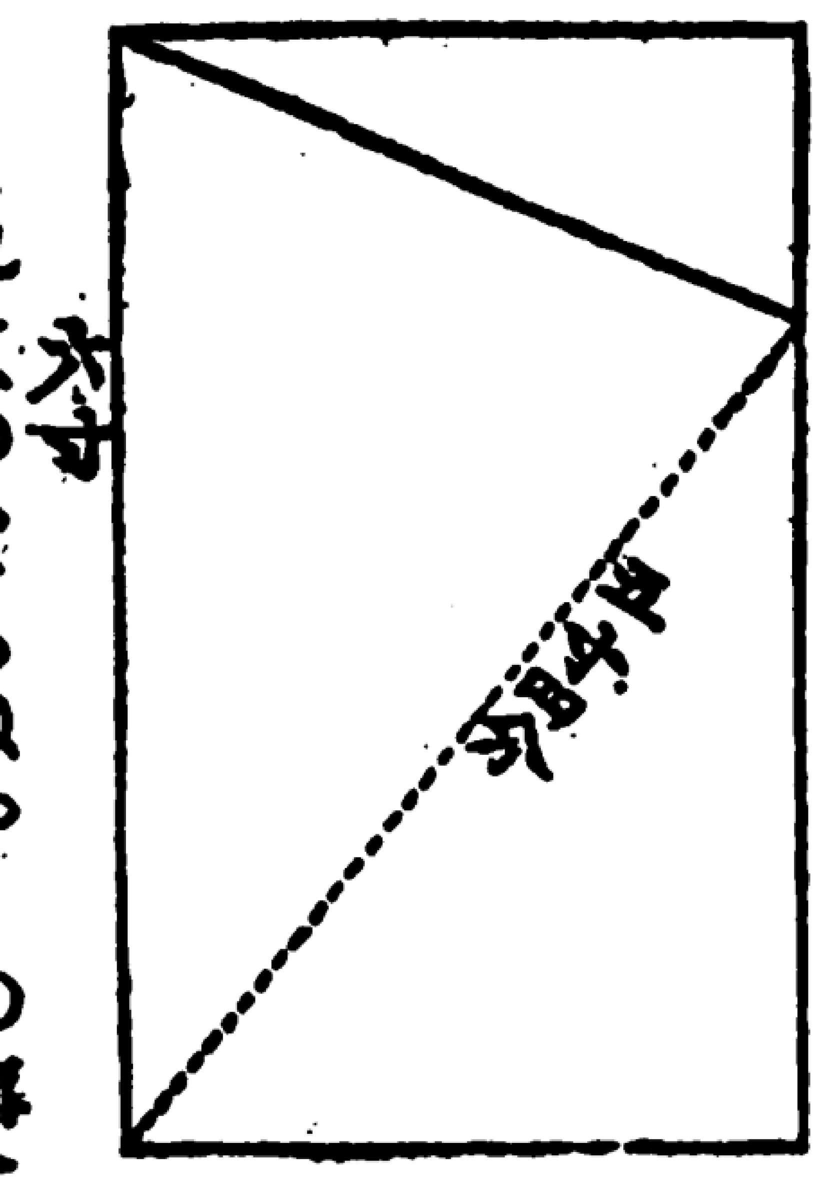
　袴にしても

それ〳〵拵へ方に一定の方則がある、たとへばこし板をとるにも四六九、また六減四九といふ術語さへ出來て居る

　この術語の解、

こし板の下部の寸法より六減する、即ち六寸なれば六分、五寸五分にしても六分、すべて下部の寸よりも六分を引けば、六寸なれば五寸四分、五寸四分なれば四寸九分と、六分を引きたる端數は四、又は九とする、これは記臆の便法で、六分減じたる、何寸四分、又何寸九分を、一方は下部の右の端より上部へ向つて斜に尺度を置き、六減したる寸の所より、左部の端へ箆を引きたるものが、即ちこし板の勾配寸法である、左右とも同し方法にて、更に之を圖解すれば左の如く、假に下部を六寸とすれば

右の方も左より斜に尺度をあて丶、同じ方法にて勾配寸法を得るなり



これはつまらぬやうの事なれど、多數の人を教ゆる場合に少からぬ便利がある、すべてか丶る便法を考へて、これを原則とすることが必要である、

　帶のぬひ方

にしても、隨分種々なる仕方があるが、そのうち尤も完全なるは、鯨帶のつくり方である、第一帶心のつくり方入れ方で、それは如何なる風にするかと云へば、帶心といふものは、幅は表の幅と同一でよいが、長さは少くも五六寸の猶豫を全體の上に置いて、出來得る限りたるめて綴つけるやうにせねばならぬ、

　その他比翼をつくればとて、振袖をつくればとて、單重をつくればとて、それ〳〵一定の方則がある、然るに今日まで一般に敎ゆる所の方法は千差萬別で

あつて、隨分迂濶なことをして居るのがある、故に裁縫の如きもの、團體教授は、大に工夫して、すべて理屈の通つて、順序の正しい、應用の利くやり方をせねばならぬ、

料理及製菓の實驗談

富田寛

葉山葵の製法

葉山葵を俎板の上へのせ、庖丁の背にて叩き、莖も葉も共に七八分に切り、目笊に木綿の裂をしき、前の切りたる山葵を入れ、熱湯をかけ、絞り、熱き所へ、酢を掛け、蓋をして振るべし、二三十分過ぎ、冷めたる時、蓋を開け食す、

◎注意　振るのは、摩擦のため、辛味も、香氣も増すのである、廣口の壜か、少し製するには、燗徳利に入れて、コロップにて、口をなして、振るがよし、

海苔卷もち

切餅を七分角、長さ一寸二三分位にして燒き、醬油を附け、別に上等の淺草海苔(壹帖十五錢位)八ッ切りして燒き、前のつけやきの餅を卷き、器に入れ、蓋をなして蒸し置く、茶媒に尤もよし、

甘藷をいろ／＼に製法

●かまぼこ藷　甘藷を生にて擦し、汁氣を搾り、うどん粉を少し入れ、能く摺混せ、薄板に恰好よく、蒲鉾の形につけ、蒸籠にかけ、蒸しあがりたらば、罌粟、或は靑海苔粉を振りかけ、小口切になすべし、

◎ちく輪いも　甘藷を、如上通りになし、竹簀に卷きて、蒸籠に掛け、蒸しあがらば、火に炙りて、燒目をつけ、小口より切るべし、

●海苔卷いも　甘藷を丸にて蒸し、皮を去りて、裏漉になし、淺草海苔を燒き、其上に伸べ、小口より卷きて切るべし、

●昆布卷いも　甘藷を生にて擦し、メリケン粉少し混ぜ合せ、棒の如く、細長く伸べ、上等の靑昆布

にて、上を卷き、其上を竹の皮にて包み、糸にて括り蒸すべし、

●ちやきんいも　甘藷を蒸し、前の如く裏漉になし、白砂糖を少量入れ、白木綿の裂を、水にて絞り、夫へ前へのいもを大きめの團子位に包み、布を寄せ、ねぢりながら、平形に押し、裂を開き取出す、

●いも羊羹　如上の蒸し甘藷の、裏漉になしたる物へ、メリケン粉、白砂糖、挽茶、(末茶)等、適宜に加入、能くまぜ合せ、蒸籠にて蒸す、冷めたる時庖丁すべし、

●いも葛　甘藷の皮を剝き大根卸にて摺おろし、水にて溶し、木綿布の袋に入れ、絞り其液汁を、器に入れて、暫く置くと、澱粉溜る、上水を流し、清水を入れて、倘かき廻し、又暫く置き、上水を流し、澱粉のみ、平らなる板の上に、木綿布を敷き、其上に澱粉を厚さ三分位に、平らに伸して、乾すべし、

●切揚いも　甘藷を細く切り、胡麻の油を煮たてゝ揚げ、同時に、別の鍋に、胡麻の油を煮たて、再び揚るべし、但し壹度揚げにては、決してカラリとはならず、

●めしのいろ〳〵(續き)

蒟蒻めし

蒟蒻めしは、白瀧こんにやくを、堅魚節の煮出し汁、味淋酒、砂糖、醬油等にて、適宜の鹽梅にて煮上げ、炊たての飯に、交せ食すべし、

挽茶めし

甘鹽の鮭を燒き、正身をむしりて、飯の上にのせ、挽茶をも、少量を加入熱湯をかけて食すべし、

海苔めし(甲)(乙)

(甲)は煖飯で、極上等の淺草海苔を燒き、もみて飯の上へのせ、醬油を少量入、熱湯をかけて食すべし、

(乙)は、中等の淺草海苔を四ツに切、飯を入れて卷き、紙に包みて、能くかたく、平身に握り、もち網の上にて、燒き、醬油を引き、あたゝかき際に、食すべし、(鐵砲卷とも云ふ)

難產は我儘女に多い

楠田病院長　楠田謙藏

子を產むといふことは、女の大役に算せられ、常に大役なるものゝ例に引かれて居る、實に十ケ月間重き腹をかゝへて、揚句の產が、重いか輕いかまで心配すれば、それは容易な話ではない、而して難產の爲に胎兒を失ひ、或は產婦自身の命をまで失ふとも珍らしからぬことで、時にこの悲慘事あるが爲に、產は最も女より恐れられて居る、



然らば子を產むといふことは命掛の仕事で、極めて不安心なものかと云ふに、決してさうではない、そこでまづ難產は如何なる場合に起るかといへば、

一　產道狹小にして通過すべきものとの釣合のあしき時、

一　胎兒の向あしく、通過すべきものゝ位置あしき時、

この二つの場合で、これは難產の原因となるべきもので、是は他の例を引くまでもなく、一の財產より二を求むると同じくむつかしき話で、產婦を無事ならしめん爲に、胎

兒を犧牲に供せねばならぬ、去ながら斯る場合に遭遇することは、曉天の星の如く、極めて稀なることである、

而して事實上多く起る難産の理由は、陣痛作用即ち胎兒を押出す力に乏しく、子宮の收縮力が弱いからである、

この陣痛作用は精神感動によるもので、産婦の我儘によつて、異狀を來すものである、甚しきは夫が心配してかゝる、親どもが甘やかす、本人いよ／＼他愛もなく弱くなつて、忽ち陣痛力に異狀を呈して來る、難産になる、胎兒を失ふ、自個を危くするといふことになる、

故に産婦は從順であつて、その手當に安心することが出來れば、まづ産は輕いものと思うてよいので、始めから深く氣遣うてかゝり、其度を過すものに難産が多い、即ち難産は我儘女の專有と見て差支ないのである、

遺傳と矯正

廣井辰太郎

吾人の品性の要素といふものは、遺傳と境遇との二つから涵養せらるゝもので、此の二つのものは神が自然界を統御し經營せらるゝものである、眼を放つて世界を見るのに、之を大別して二つとする事が出來る、即ち平等的と差別的とである、

近き例を以つて譬ふれば、その平等的の方面より云ふ時は、人間も虱も同一なる生物で、現に虱が人躰に寄生して居るのは、恰も人間が地球上に寄生して居るのと毫も異ひは無いので、吾人が太陽の温熱を受くると同じく、虱は人間の體温に依つて温熱を感じて居るのである、而して虱が人體の血液を食物として居るのは、恰も人類が動植物および其他の食物を執るのと少しも差は無いのである、斯樣な風に見て行く時は、水と火、黑と白も遂には同一に歸する、即ち平等的になつて仕舞ふのである、之に反し

て差別的の側より見來る時は、倫理上でも自己を本位とする個人主義といふものがあれば、片方には人類を本位せる、社會主義と云ふもの丶あるやうに、啻に甲と乙との差異のみでは無い、尙ほ手近に切り込んで觀れば、自身すらも感情若くは意志といふもの丶各自に要求する所が異なるのである、また其れ所では無い、最近心理學の敎ゆる所に依れば、己れと云ふものは即ち無數の觀念の聯鎖であると示して居る、此くの如く前の觀念と後の觀念とは異ふのである、

　古代希臘の學問は、同じ物と我に流れて居るのである、即ち一定したる我と云ふものを認めないのである、旣に一定の我と云ふものが無いと云ふ事になるときは、從つて道德上に何等の責任も無いと云ふ歸結を得るのであるから、頗る危險の虞れがある、要するに古代は平等無差別主義であつたのであるが、晩近に至りては科學の進步と共に差別的になつたのである、換言すれば、昔時の學問は演繹的で內包が大きいのであるが、今時のものは歸納的で外延が廣いのである、併し以上の二者は孰れも極端から極端に趨つて居ると云はねばならぬ、然らば如何に之を詮衡したならば可いかと云ふに、即ち中庸穩健の思想より熟考する事が必要であると斷言するに憚からぬのである、

　生物界に於けるスピーシスは、古今主として差別に依つて區分されて居る、即ち猿は猿、人は人と云ふが如くである、而して其種を傳へて行くのは遺傳に因るのである、小兒と云ふものは、人類の生殖作用に基づく所の分身である如く、單に種の保存のみなれば此の生殖作用、尙は換言すれば遺傳のみを以て其目的を達する事が出來る、けれども進化と云ふ事は期せられないのであるから、その進化の作用を望むには、是非とも周圍の狀況即ち境遇と云ふもの丶必要が生ずるのである、例へば、今より十四五年以前、予が幼時鄕里に在りし頃は、尙ほ未だ純粹の日本犬と稱する、兩耳の直立した所の者は、少な

いとは云ひながらも、まだ多少は殘つて居るのであるから、何ほ種の保存と云ふ事に就ては、今日別に差支へも無いのであるが、是も今日より更に五十年も經つたならば、上野や淺草の公園に數萬金を抛つた日本種を見るやうに至るであらうと想はれる、

維新の前後を問はず、從來我國の婦女子たる者は、出ては舅姑に仕へ、入つては夫に順ふべきものであると云ふ道德主義が行はれた、此の主義は今も何ほ或少部分に行はれつゝあるのであるが、此の主義も近時は非常に歐化力の爲に變化して來たのである。その現象は今日社會の生活上にも見ゆる、のみならず、神武以來、忠君愛國の情に富み、敵愾の氣に滿たされたる事は、遺憾なく曩の日露の役にて發顯せられたのであるが、此の事に就ては我國の博士教育家等も彼此と評論せられた、殊に歐米の有識者間に於ても兎や角の詮議もあるが、ヤンキーにはヤンキー、ロンブルにはロンブルの特性が存在して居るので、鶴の脛が長いと云つて、之を截つて短かき鴨の足を繼ぐことは出來ないので、彼の鷹揚なる支那人の態度の如き、又印度人の非常に記臆力に富みたるが如き、孰れも遺傳と境遇の然らしむる所で、迚も他の者が學んで及ぶべきものでは無いのである、此に就て一の珍話がある、曾てオックスフォードに在學せる印度の一留學生は、或時試驗問題にスロットの湖上の美人に就ての事が出ると、幾んど初めより終りに至るまで、一字一句を誤らずして原本の如く書いて出すと、試驗官は驚いたさうです、成程之は吾人も喫驚するのであるが、併し此の印度の留學生は、特に此の湖上の美人に就て深く興味を感じた等の爲に此く明細に記臆より呼起し來つて書いたのでは無く、單に小兒が無意識にいろはを暗記したのと毫も撰ぶ所は無いので、聞いて見れば如何にも馬鹿〳〵しいやうの話ではあるが、併しその記臆力の強大なるに至つては驚かざるを得ないのである、然らば此の遺傳性は、指導・統御、開導に因りて得らるゝかと云ふに、迚も其は慾に獲らるゝものでは無い、

併し道徳上の生活は、決して遺傳と境遇とに依つて支配さるゝものでは無い、若し左樣で有るとすれば、其は實に價値の無いものである、例へば、猫と鰹節との關係は、遺憾なく此の間の消息を語つて居る、猫は自己に與へられたる物と否と、又は自己の家のものと他家の物との分別は無く、其所に鰹節さへ在れば必ず之を喰ふのである、之は食する事を裸體的に暴露したものである、之と等しく所謂小兒は無官の大夫と云ふが如く、いまだ半ば以上は自然界に屬して居るのであるから、凡て慾望を直截に表はすものである、けれども最早大人となれば、その間に瘦我慢と云ふものがある、例へば、他の爲に何事かを成したる後、金品等の報酬を贈らるゝと、自己が彼事を成せしは、是れ貴下に酬ゆる所以の道なれば、敢て之を受くるに堪へずと云ひながら、その顏と眼は夙くその金品の上に注がれつゝあるのである、



エマーソン氏は、眼といふものは克く舌の語らざる所を語るものであるが、人類と云ふものは、能く己れに克つて周圍と戰ひ、之に反抗し之に打勝ちてこそ、始めて道徳の價値があるものであると云はれたが實に格言である、併し特性即ち

習癖といふものは却々除き去ることは難いもので、俚諺にも、乞食を三日すれば忘れられぬと云ふやうに、一旦染み付いた性格と云ふものは去り悪いもので西洋の諺にも、狼といふものは、縦ひ歯を失ふとも其性は失はぬものであると云ふが如く、兎角劣等なる品性の家庭に於ける子弟は、矢張り之を失はぬやうである、一體人類が善性となるも、又は悪性となるも、半ば或は全然此の遺傳と境遇との二者に由つて岐るゝのである、

ソコデ悪性の者の見方も古へより種々に變遷し來つたので、最も昔時は復讐的に之に刑罰を課したものであるが、稍降りては其罪を悪んで其人を悪くまずと云ふやうになつて、漸次に體刑と云ふものは無くなつて博愛的に變じて來たのである、畢竟之に就ては、各自が自己といふものを省みれば思ひ半ばに過ぐる事があらうと察知せらるゝのである、

リ、ー氏は、天稟が分を盡さなければ、吾人の能力は無効であると言はれました如く、若しも自己の天稟が底弱で、その底弱は遺傳に基き、或は境遇の爲に怠慢に流れ易い特性が浸染したと自覺したならば、剛健なる意思の決斷力を以て之を矯正する事に努めねばならぬ、之を自覺しながら矯正する事をしないのは、全く能力の無効を暴露するもので、人類の價値は殆んど零となるのである、實に今日は吾人々類の内容は開拓を要する原野である、而して其開拓に要する耒耜は何であるかと云ふに一の努力なるものである、人は境遇を作るものに非ずして、境遇は人を作るものなりとビーコンスヒールド氏は云はれたが、是は半面を道破したものではあるが、未だ他の半面の眞理を閑却した言と云はねばならぬ、何故なれば、設令自己に不利なる境遇も、努力に依りて利便の方面に轉ずる事が出來るもので、之を遂げるには自信力が確乎不抜で無ければならぬ、



美人となるの法

美顔術専門　森田千子

近來化粧術の進歩に伴うて、化粧といふことが婦人界の一流行となりました、併しその割合に美顔術の効用をお認にならないものが多い、如何に化粧を巧に致さうとしましても、その土臺となるべき皮膚の攝生を怠りましては、恰も掃除の行屆かぬお座敷へ、立派な装飾を施すのと同様で、少しも引たゝぬ譯であります、

美顔術は常に空氣にさらされて、いつとなく皮膚の氣孔に微細なる埃がたまり、洗濯や石鹸位では中々とる事が出來ぬ顔面の氣孔中の汚物を、生理的に掃除いたしますので、言はゞ化粧の準備といふてもよいのであります、故に顔面の掃除だけでも、少くも月二三回は試みるだけの價値は十分あります、

先づ其順序として、受術者を横臥させ、充分消毒したるタオルを以て顔をぬぐひます、從來の美顔術にては皮膚を柔かにすると申して、熱く蒸したるタオルでしばらく蒸しますが、これは學理上あまりよろしくありません、私はたゞ拭ふだけに止めて置きます、それから米國製ハイセイニックスクリームを塗り込みますと、皮膚の吸收作用で氣孔中へはいりますので、それを吸取器をかけて、毛穴の中の垢をとり、護謨製のフエシャールブラシを以て血液の循環をつけ、皮膚の働きの悪き處へ活動を與へまして、顔面に出て居ります其汚物をタオルで拭取り、奇麗になりました所へ、ポンピアンマッサージクリームを塗り、皮膚の摩擦を指頭を以て行ひ、仕上に化粧水をつけるのであります、而して脂肪分多き人、少き人、にきび、そばかす等、それに應じて、摩擦の方法、化粧料の選擇をしなければなりません、

全體皮膚の摩擦は最も必要な事でありまして、血液の循環を助け、血色を美しくし、きめを細かにし、しみ皺等を除くのでありますから、少くとも此クリームが皮下の結締織に滲透する丈の方法を施さねば

效用がないのであります、そして此クリームは何も舶來の高價品に限る譯はないのでありますが、悲しい事には未だ日本にはクリーム並に化粧料とも適當の品が發見せられてゐないのでありますから、之を用ひて居りますが、他日是以上の品が發見せらるゝ時期が來ると信じて居りますから、今は據なく之を用ひて居ります、

私が一の職業として美顔術の依頼を受け、他へ出張いたしました時は、湯をわかしていたゞいて、その湯で顔を拭うて居りましたが、何うも不充分でございましたから、携帶用消毒器を案出いたしまして使用いたして居ります、

日本人の常として、少し年をとると、すぐ引込思案をし、從つて世間に遠かるものですから、自然萬事に暗く、活動も出來ぬやうになるのであります、それは平生顔面の攝生を怠るから、第一に顔から先に年をとるのでありまして、早く老人の仲間に入れらるゝを厭うて、活動すべき勇氣がなくなるのであります、その證據には、西洋人は老いて益々肥滿し、其色美白を呈し、壯年と伍して活動するのは、是は習慣にもよりますが、若き時より身體の攝生に注意し、併せて顔面の衛生を重んずるからであります、

朝化粧うつくしく取つくろひて、良人に素顔見せざらんを婦徳の一に數へしは、昔も今も同じにて、此心ばへ萬事に應用してこそ、實に修身齊家の法ともなるのでございますから、化粧といふことは、決していやしむべき事ではありません、出來るだけ美しく粧ふの必要があります、

併し此化粧につきましては、色黑き人、赤ら顔の人、蒼白の人等には、それ〴〵其人の皮膚に適したる化粧原料を加減して用ひなければなりません、たゞ白くぬりさへすれば化粧であると思ふのは、大なる間違で、それでは醜業婦の化粧と一般、何の選ぶ所がないのでありますから、自然此等に從事するものは、少くも是等の理想をそなへて、廣く社會を益したいと思ひます、尙委しくは追々申上げませう、

手足の化粧

増田鏡子

二面の化粧

手足の化粧と申しましては、如何にも耳障りに聞えますばかりで無く、殊に西洋のやうに常に靴をお穿きになる習慣の方より見ますれば、どうも少しく病的のやうにもお考へなさる方が無いでもありますまいが、尤も此の手足といふ中にも、手の方はさうでもありませんが、足となりましては殆んど中流以上の方々には御用は無いやうなものゝ、偖廣い世の中には、縦ひ御身分の好い方でも、時としては一應は御目を通して置きなされるのが御調寶の事が無いとも限りませんと考へましたので、實は此に手と足とを並べて出た、次第でありますが、此の手足に限らず、一體御婦人が化粧をなさるといふ、その理由は如何にと尋ねまするに、或人は斯樣なことを申して居ります、坤柔なる女子は、その美しき容姿と、温和なる德とを以て、乾剛なる男子の心を和らげ慰むべき責任を有つて居るものであるからして、その德を全くし、その責任を果すために、天然の美を發揮して倍々美しく見せる必要から、化粧といふものは起つたものであると有仰るのでありますが、是は少々私共の意見とは異ひますが、併し此の中に又多少の眞理は認めらるゝのであります、まづそれは兎も角といたしまして、タヾ一口に化粧と申しますものゝ、此の中には自然二つの方面より見なければならぬものがあるやうに思はれます、即ち

自己本位と他人本位

とでも申しませうか、或は學者先生方の口調で申しましたならば主觀的と客觀的とでも申しませうか、何だかイヤに四角張つて參りましたが、極く通俗に平たく申しましたら、自分だけで滿足する化粧と、他人に見せびらかすのを目的とする化粧法との二つがあらうと思ふのであります、少し例に引くのは失禮のやうですけれども、能く田舍の方が東京見物な

どにお出でになつたのを見ますると、白粉の刷き工合といひ、臙脂のさし鹽梅といひ、又は着物の着こなしといひ、如何も何處とも無く野暮に見えまして、中々東京の中邊の者などが及びも附かないやうな綺羅を着て居ても、所謂着榮がしないので、
　品物を殺し化粧を沒して了ふのでありますが、併し其御當人は縦んば都の者に笑はれやうとも、毫も頓着は無いのみか、それで
　十分の滿足を買つてお出でるのであります、之を私は自己本位の化粧法と申すのでありますが、
　倘ほ一つの他人本位若くは客觀的の化粧法と名けますのは、例へば、俳優が自己に割り當てられたる、何々の御臺所とか又は國主何の守とかいふやうな役を勤めまするときは、自己といふよりも先づ觀客の側を慮つて眼や口を隈取るやうなものをいふのであります、さうはいふもの丶自己本位の中にも自から他人本位も含まれてあれば、他人本位といふ中に必ず自己本位は含まれて居るのであります、否、含まなければ化粧そのもの丶價値は無いのであります、例へば、前に掲げたる田舍の方でも、自から滿足に思ふと同時に、是より出で丶都の人士に見せばやとの念は決して無いとは否定せられないのであります、また俳優とても其通りで、觀客の喝采を博しますれば、是を以て已は滿足に思ふに相違ありません、でありますから、この自己本位と他人本位と申します二樣の化粧は、暫らく見る立場を異にした所より彼の此のと申しますもの丶、畢竟は二つであつて一つ、一つかとすれば二つであるといふに過ぎないのであります、
　この化粧も社會の他の事物と等しく、人文の進むに從つて發達もし進化もするものでありまして、例へば、倘ほ未開の地位にある蠻族の如きは、能く坪井博士の御講演などにて承はります所に依りますれば、身體に種々なる色土を塗るとか、甚しきに至り

ては、苦痛を忍びて胸間などに縦横の瘡傷までも附けるものがあるといふことでありますが、是は私共の想像にも及ばない程の化粧法と思はれますが、手近い處で我が版圖の内なるアイヌの婦人が口の周邊に入墨をするのを見ても、乃てさうであらうと察せらるゝのであります、けれども人智の進むと共にさういふ事は無くなつて、天物を取つて化粧するやうになつて來るので、その仕方も巧みに爲るのであります、此樣な工合にして化粧法といふものも發達しましたので、我國なども現今は餘程進んで參りましたが、まだ西洋各國との交通が開けません以前より化粧は女の身嗜みであるといふ諺もあつた位でありますから、隨分此の化粧法も進んでは居りましたが、迚も現今のやうでは無い、その現今の流行とか又は歐米各國の化粧法とかは且らく御預りとして置きまして、丁度時候柄手や足のあれる季節でありますから、チヨット化粧に二樣あることから、是等の化粧法をお話しする積りなのでありました所が、ツイ序文が長くなりまして相濟みませんでした、



着物には凡て釣合と申すものがございまするので、所謂提燈に釣鐘では如何も平均が取れません、それと一つで、如何に顔ばかり美しうございましても、手の甲が相馬燒のやうに皹が入つて居たり、踵の邊が岩石の皺のやうな口が開いて居りましては餘り外見の良いものではありません、私が此頃某所を訪づれました時、足は足袋を穿いて居りましたから分りませんが、茶を汲んで出してくれました女中衆の手の甲は、全で前申しました相馬の皹燒宜しくといふ手でございましたので、別に出された茶の味に變りは無いのであります、けれども何んとなく一種不快の感を與へまするもので、殊に私は感じたのであります、尤も手を美しく保ちまするには、寒い時や又は冷たい水に浸たり、若くば荒い仕事などを仕ないやうにしなければならないのでありますが、それは御姫樣とか何とかいふやうの方で始めて出來るので、迚も普通の家庭では其樣事はいつて居られません、主婦たる者は、時としては臺所の流し元で、冷たい水いぢりもしなければならず、また種々手の美を損ずるやうな仕事もしなければなりません、殊に御飯炊奉公をする者は、朝から晩まで何から何と仕事をしなければならぬのでありますから、隨分手の美も損ずるであらうが、私が實見した者のやうにまで爲るには及ぶまいかと思ふのであります、それには第一

手當が大切である

その手當さへ怠らなければ、幾ら寒中だからとて、左程にあれるものではありません、全體寒さに向ひますると、一般に誰でもさうでありますが、手足の皮膚のみには限りませんが、殊に手足といふものは他の部分とは違ひまして、常にサラのまゝに多く寒い冷たい氣に觸れまするので、この皮脂線と申して、手の脂肪又は足の脂肪などいふ、皮膚を保護いたします所の脂肪が出て來る途を收縮しまして、夏のやうに十分それが分泌しませんから、從つて皮膚の細胞といふものが硬ばる所よりして、遂には皹や胼

といふものが出來るのであります、而して一たび之が出來ますと、人に不快の感を起させるなどといふ事はさておき、自分も其痛さに堪へないばかりではありません、その裂目からして恐るべき種々の病氣の黴菌が侵入して、爲に危險を招くやうな事は、決して例の少くないのであります、

尤もこの皸や胼は、或は不潔から來ることもありますから、常に垢の溜つて居らないやうに清潔に洗はなければなりません、洗ふといふので思ひ附きましたが、能く若い女中や、年の行かない商家の小僧さんなどは、水遣ひをした後に、碌々手を拭きもしないで、直ぐに炭火や焚火の上に翳して焙りますが、實に是は無考の至りと云はなければなりません、さういふ時には必ずよく〳〵手拭で拭いた後焙らなければ可けません、さういふ事をするから、皸や胼が裂れた上にも亦裂れるから、寒中一杯苦しまなければならぬのであります、是は克く自ら注意をしなければ、誰の損でもありません、ツマリ自分の苦しみ損に歸するのであります、

又水の性質によりまして手足のあれる事もありますが、是は土地に依つては如何ともする事が出來ないのであります、水道のやうな軟らかな水は其儘で宜いけれども、其他の水は、若し出來得るならば一度煮沸て使ふが宜い、と申しますのは外でも無い、井戸水や川水には石灰質分があつて手をあらすからであります、

故に若し一たび皸や胼が裂れたならば、ワゼリンか又はグリスリンを時々塗るが宜いのであります、此のワゼリンやグリスリンは、單にそれらを治すばかりでなく、常に之を用ふれば手や足が柔軟になつて居りますから、決して皸や胼の裂れる憂はございません、而して平素は成るべく臥床へ入る前に少々づゝ塗つて、概ね之が乾くまで塗りこまなければならぬのでございます、

予が渡英中に感心せること

法學士 村田俊彦

　兎角洋行すると、所謂泰西の文物に心醉すると云ふよりは、寧ろ眩惑するので、一も二もなく彼を以て我より優れりとなすのみならず、之を我國に移し植えやうと試みるものが尠なく無いのであるが、諺に

　　處かはれば品かはる

とか、または

　　郷に入つては郷に從ふ

と云ふやうに、自ら其所の風儀のあるのみならず、我國には即ち我國に於ける

　　立國若くは建國の由緒

と云ふものがあるので、之は決して枉ぐべからざるもので、英を變して米となす事も出來なければ、露を化して清となす事も得るものでは無い、況して我日本の如き、二千五百有餘年以來、即ち

　　萬世一系の皇統

を戴くものは、地球上またと在るべからず、所謂世界に冠絶せる國家で、是ばかりは迚も世界萬國が、如何に鯱鉾立をして眞似をしやうとしても斷じて出來得べからざるのである、

　まづ國柄はそれとしても、その國柄を大切の上にも大切に、美いが上にも美くするのは、是れ即ち國民たる者の當に務むべき事であらうと考へる、のみならず、縱ひ國柄は如何に良くとも、若し其中に行はるゝ所の風俗または習慣等の點に於て、他の國に劣るやうの點があつたならば、宜しく他の美點を執りて我醜を斥け、改むべきは更めてこそ、眞に大國民たるの雅量とも云ふべきのみならず、當に先進國の取るべき寛容の態度と云はねばなるまいかと想ふのである、

　日進文明の今日に在りては、最早在來の虛禮虛飾に拘泥して居るべきでは固より無いのであるが、如何も我國の風習は、未だ全く之を除くことが出來ないのみならず、或點に於ては、却つて舊來に倍蓰し

たと云はねばならぬ點がある、加之のみならず、或方面の如きは、頗る惡潮を瀰らしたかと思ふ、例へば、演説集會の如き席上である、是等の席上に於ける公衆の態度は如何と云ふに、己が同志の時は兎も角として、若しも反對者が演壇に現はるゝ時は、拍手または咳嗽等をなして場内を喧噪するばかりでは無く、延て辯論を阻遏妨害するに至るのであるが、此の點に於ける英國の人々は、如何に反對黨の演説であれ、如何に己れは歡迎せざる集會にあれ、一たび其席に出でたる時は、決して喧噪の擧に出で、または他をして辯論を中止せしむるなど云ふ事は無い、その靜肅平穩なることは、恰も寂然として水を打ちたるが如くである、是は宜しく我國人が則とるべき事であると考へる、



次に予は或時英國の國會へ傍聽に出掛けて驚いたのである、それは外でも無い、我國では近年議員の數が殖えた爲に、議院の建物を改築せなければならぬと云ふ説が盛んであるやうですが、併し之も結構な事ではありますが、彼の英國などでは、矢張議員の數が以前より殖えましたので舊來の議院

の建物では議員の席が足りないので、餘儀なく傍聽席の一部を議員席に利用して居るのである、何も彼の英國が、議事堂の改築に要する負擔が出來ないと云ふ譯でもあるまいが、前に述べた如く、傍聽席の一部を議員席に利用して居る、之を見れば英國人の氣質は略察知せらるゝのである、即ち英人は

實質に重きを措きて

形式の末に拘はらないのである、之を我國に於ける議會は勿論、その他萬般の現狀に比較し來るときは、實に慷慨に堪へないと云ふよりも、寧ろ噴飯に値ひするのである、

尙ほ前言を繰返して見れば、英國の人士は男女に拘はらず、凡て多人數が集會した席上に於ては、必ず秩序を保ち、公德を重んずるが爲に、決して喧囂に渉るやうの事は無く、相互に靜肅を保つのである、

而して何事も實質に重きを措く時は、例へば、飯茶碗と極つて居ても、場合によりては水呑にも副食入れにも利用するやうに、所謂融通を利かせる事を專一として、決して鍋だから茶が沸かせぬ、釜だから汁が煮られぬと云ふやうな片意地に陷らぬのである、ツマリ用を辨ずるを主眼とするのである、

凡そ一家の主婦といふものは、所謂家庭の主宰であつて、その人の采配の振りやうで、一家の禍福得失といふものは分れるのであるから、專ら意を此に注がねばならぬ、

中流以上に在りては餘り無い事であるが、兎に角それより以下になりましては、多辯多口は婦人の通有性とも云ふべきもので、それが爲には、諺に口は禍の門と云ふが如く、此の口の爲には思はぬ禍を招くものであるから、同じ口を開くにも最も愼重の態度を取らねばならぬ、と云ふても、予は人の口を噤むものではない、況して現時の世間の交際も盛んな事であるから、言ふべきだけは語るが宜い、若しも語るべきを語らないのも禮を缺ぐ事があるから、その掛引が大切である、

また實質に重きを措きて形式に拘はるなと云ふの

は、チョット前に一例を示した所で、賢明なる諸嬢は一を聞いて十では無い、百も二百も推知せらるゝのであるから、最早繰返して云ふまでも無いが、尚ほ婆心に之を簡約に云へば、即ち

急所を押へよ

と云ふに過ぎないのである、古語にも愚者の千言、智者の一語と云ふが如く、縦ひ千言萬語を並べたてゝも、要領を得なければ何も役に立たない、又朝から晩まで立働いても、所謂物の締りが無い時は、是また何の詮も無いのである、故に日常是等に十分の注意を拂つて、決して他より後指を指されないやうにせねばならぬ、これ即ち二十世紀に處する婦人の踏むべき道と考へる



睡眠の必要

高山憲定

人間と云ふものは、凡て老若に拘はらず、又賢愚を問はず、必ず腦力には一定の程限と云ふものがあるので、若しその程限以上に使ふと云ふと、必ず疾患を惹起すか、又は沈衰の狀態に陷るものである、尤も賢者と愚者との腦力に就ては、多少その間に長く堪へると否らざるとの相違あるに異ひない、けれども、さう無限に働けるものでは無い、故に智者も愚者も、一日の仕事をすれば、孰れもそれ相應に草臥れるから、夜になれば睡眠と云ふものを催ほするので、これ即ち吾人の大休息である、若し此の大休息が無かつたならば、到底吾人は天壽を全うすることは出來ずして、必ず皆夭折するに相違ない、

然らば睡眠と云ふもの丶吾人に必要なることは、毫も彼の衣食と異ならぬのであるが、扨その睡眠と云ふもの丶如何、何故に睡眠から覺むるのであるか

と云ふ事に就ては、餘り世人が氣を留めないやうである、只昏で來るが故に眠り、覺め來るが故に起ると云ふに過ぎないやうであるが、一たび如上の問題に接したならば、之を研究するのも趣味のある事であらうと思ふ、

斯の事に就ては、從來學者間にも久しく研究せられつゝある問題であるから、生理學を以て有名なる佛國のプルシャー氏の如きは、筋肉の働作といふものは、必ず之に伴ふ一種の老癈物を發生するものである、此の毒物が腦を麻醉せしむるから睡眠を來たすのであるが、一たび此の毒物の作用が消滅さへすれば、再び睡眠より覺るのであると云はれ、又或者は、睡眠中の腦は稍貧血の狀態にあるものであるが、果して之が睡眠の原因であるか、はた結果であるか明らかでないと說く者もあり、又或者は、吾人が醒めて居る時に於ては、神經細胞と云ふものは、突起の接觸によりて交互に相聯關して居るから、是を以て刺戟を末梢部、即ち手足皮膚等より腦に傳達するけれども、最早吾人が或程度の勞働に服して疲勞した時には、神經細胞と云ふものは收縮して、仕舞うから、その突起間の連關と云ふものは全く斷絶する、依つて腦は最早外界よりの刺戟を受けないから睡眠を來たすのである、而して睡眠によつて神經細胞が大休息する時は、その細胞は再び膨脹して突起間の連關を恢復するので、扨てこそ覺めるのであると、斯樣に說くものもある、

その孰れにもせよ、睡眠と云ふものは、吾人の心身を安靜にして大休息を與ふる唯一の方法である事は疑ふべからざる事實で、專門家の診察に依れば、吾人が睡眠して居る間の心臟の搏動數は、必ず醒覺して居る時よりも、一分間に六乃至十搏を減ずるものである、元來心臟の一搏動は、七十五斤の働作に等しいものであるから、吾人が若しも七時乃至八時間の睡眠に於ける心臟の働作は、云ふ迄もなく、醒覺時に於ける働作よりも數噸を減ずる事になるのである、是を以て。眠らぬと云ふことは、如何程心臟

の働きを増すものであるかと云ふ事が想像せらるゝ、のである、之に加ふるに、呼吸の作用も遲鈍となり、消化液の分泌も減少し筋や靭帶は弛み、且つ身體の各機能も休止するのである、而して日々の心身の働作に由りて來る所か身心の疲勞や、組織の消耗等は、皆この睡眠によりて回復補償せらるゝのである、

是の故に、若しも睡眠の不足する場合には、その消耗と補償とが幷行しないから、爲に心身を衰へしむる事は甚しいので、此の睡眠の不足が久しく繼續するやうな事があれば、從つて老衰



を來たす事も早いのである、實に睡眠は長壽の根木と云ふも誣言では無い、學者の實驗に依れば、一の動物を捕へて之を二十日間斷食せしめた所が、その體量は殆んど半分に減じたけれども、その後十分に注意を加へて飼養した爲に、再び元の狀態に復せしむる事が出來たと云ふ事である、又一疋の小犬に十分の營養を與へながら、僅か四五日の間その睡眠を妨げた所が、到頭その犬は衰弱より回復する事が出來なかつたので、尙ほ仔細に之を檢べて見たれば、後者は腦に重大なる異狀を呈した爲であつて、前者

は毫も神經系に故障を生ずる事は無くして、單に血液や筋が損耗したのであるから、容易に之を回復し得たのであると云はれた、又或學者は研究の結果を公にせられて、不眠と云ふものは筋力を減少せしめ、記臆力を衰弱せしめ、且つ注意力を全く失はしむるもので、平常二分時で暗記し得る事すらも二十分時を費して尙ほ暗記し得られぬものであると云ふ事を確められた、是を以ても睡眠と云ふものが、如何程神經系に大切であるかと云ふ事が知らるゝのである、去れば、彼の夜更しをして勉强をなし、朝は九時十時まで、甚しきは正午時分までも朝寢する習慣のある者の夭死をするのは理の當然である、

尤も斯の睡眠の時間は、各個人の年齡、習慣、職業、身體の狀態および性質等によりて酌量しなければならぬので、迚も一定することは難いもので、予が友人にも、一人は三時間を以て足れりとし、他の一人は八時乃至十時間寢ねざれば、翌日頭痛を覺ゆると云ふやうに異なるのであるけれども、先づ普通成人に在りては、一日平均八時間の睡眠とすれば、大した狂ひは無いのであるが、二十歲に充たない者は、尙ほ生長と發育が盛んであるから、成人の者に比しては、一層多くの睡眠時間を要するのである、併し十時間を超えては宜くない、

每夜寢に就くにも、止むを得ざる場合を除くの外は、必ず一定の時刻に就床する習慣を付けることが肝要である、まづ大抵遲くも十時には寢に就くが宜い、併し神經過敏の人とか、又は衰弱して居るものなどは、少し早めに就床するが宜い、斯く習慣を養へば、其時刻が來れば自然に睡眠を催して來るから、床に就けば直ちに眠ることが出來るのである、僅か十分か十五分の事でも、その就床の整齊と云ふものは、直ちに神經系統、循環系統、筋肉系統、その他の機官に著しき變動を來たすものであるから、必ず正確に規則を守ることが必要である、若しも一旦不規律に流るゝ時は、容易に再び元に回復すると云ふ事は困難なものである、大抵不規則のものは早く

就床すると云ふことは稀で、十中の九分九厘までは遲く就床するから、朝寢の習慣と云ふものが附隨して來る、謂ゆる夜更しの朝寢坊と稱せらるゝので、一たび此の癖がついては、愈々除き去る事が困難になるのであるから、惡習慣を改良しやうとするには、必ず毎朝早く起ると云ふ規則を定むるが宜い、さうすれば夜も從つて早く眠氣を來たすやうになる、併し之は人に强られずに、自ら心に此の規則を設けねば無駄である、

よく世間には就床後直ちに眠ることが出來ないと云ふ者もあるが、斯う云ふ人は熱心に其惡習慣を破ることに注意さへすれば、大抵數週間で之を治する事の出來るものである、又神經過敏のために床に就てから二三時間も眠れないと云ふ人がある、此くの如き人は治療法として、順數を數へるとか、又は同一の言語を繰返すとか、又は一分間に十回位の割合で、徐々に深く呼吸するが善いとか、その他種々の方便を說く者があり、又用ゐられも爲るやうだが、吾人の經驗に依れば、專ら無心となり、眼を瞑りて一所を凝視し、徐ろに一より十までの數を反覆するのが一番成績が良いのである、

云ふまでも無く、寢室は成るべく閑靜な所を擇ばねばならぬ、尤も習慣と云ふものは驚くべきもので、彼の水車の轟々たる室內、又は海濱の波打際の騷々しい所でも安眠する者もあるが、先づ普通の人は靜かな所で無ければ眠られぬ、若し喧噪なる場所に於て住居する時は、睡眠中に幾度も妨碍を受けるから、從つて神經過敏となり、且つ熟睡する事が出來ないから、健康に大いなる害を與へるものである、依つて成るべくは靜閑な所を擇び、溫度は華氏の六十度前後が適度である、甚だ寒冷なのは無論宜くないが、又溫度の高いのも害になる、即ち溫度の高き場合には、頭痛、食欲減退、神經過敏、咽喉の乾燥等を來たすものである、又寒冷だからとて、餘り多くの炭火を室內に置く時は、單に空氣を不潔にするのみでは無く、之が溫度を高めるから宜しくない、燈火も

亦空氣を不潔にするが上に、睡眠を妨ぐるものであれば、之を消して暗黒にするが宜い、而して日中着用したる衣服、その他不潔物を室内に置いてはならぬ、又日中は日光をして室内に射入せしめ、夜間は空氣の流通を得せしむるやうに注意せねばならぬが、然し睡眠中、頭の邊に空氣を強く流通せしむる時は感冒に侵さるゝの虞れがあるものなれば、之は避けねばならぬのである、

睡眠中は決して頭を覆ふてはならぬ、第一感冒に罹り易いのみならず、且つ不潔の空氣を再び呼吸するから健康に宜しくないから注意すべきである、

消化不良とか又は便秘その他胃腸の疾病は、凡て不眠症の原因となり、且つ不眠症は是等の疾病を惹起すものである、尚ほ過度の勞働や、就床の前に過度に精神を使用すること、過食、不良の飲食物、煙草、茶、コーヒーの類、運動の不足、心臟病、喘息、腦に充血を來たして神經を過敏ならしむる疾患就床前に飲食物を攝取する等は、孰れも不眠症を來たすものであるから、十分に注意をせねばならぬ、

前にも云へる如く、吾人の腦力には一定の限度と云ふものがあるのであるから、若しもそれ以上に之を使用する時は、必ず不眠症を引き起し、神經衰弱に陷り、ヒステリー又は狂病等の恐るべき疾患に罹るものであるから、必らずその日〳〵に消耗した各機能、約めて云へば腦力の補償回復を計らねばならぬ、之を計るには身體の大休息たる睡眠を取るのが最も肝要である、

此く云へばとて、吾人は朝寢を奬勵するものでは無いから、此の邊は取り違ひをせぬやうにして貰はねばならぬ、若しもさういふ誤解を來たす者があれば、そは自身の懶惰を自白するので、決して予が罪では無い、即ちそれ自身が貴重の時を空費するのであるから、學術や技藝の進歩しないのを憂ても無効である、宜しく其は三省すべきである、

吾人は當時の流行語に就て云々するの資格ありや

文學士　村上辰午郎

先づ父兄及び敎育者は省みよ

近來女子が男子に對する言葉は勿論、女性同士の間で遣ふ言葉が非常に惡くなつた、それに就ては之を改良しなければならぬ、或は某々の言葉は嚴禁せねばならぬといふやうな議論が大部喧ましいやうに聞こゆるが、一體言葉といふものは時勢に連れて變遷するものであるばかりではなく、或は時代の要求に迫られ若くは或動機の爲に新らしき言語の流行することなどもあるものであるから、之を一概に河を防ぐやうに塞ぐことの出來るものでは無い、

抑も現今世上で八ケ間敷いふ所の、醜惡なる女子の言葉も、强ち女子のみを責むるのは酷であらうと思ふ、言葉に關はらず凡て社會のことゝいふものは、必ず之が原因のあるものである、而もその原因を究めないで、無暗に事の末にのみ趨つて論ずるのは、抑も事の本末を誤まつた仕方であらうと思ふ、一體今日女子の言葉が惡くなつたといふ事に就ては、吾人も之には少しの異存も無いのであるが、之をして此くなさしめたる誘導の原因は何であるかと云ふことを調べて見なければなるまいと考へる、その誘導の原因は多々あるであらうが、之を約言すれば、女子の敎育を奬勵して、是までの幽閉主義を破つて活動的にしたからであらうと思ふのである、

サテそれは何者がさうしたかといふに、父兄および敎育者である、然らば世の父兄および敎育者は、須らく之が責に任じなければならぬ、併し之が責に任ずるといふても、今更之を敎訓するよりも、先づ之が誘導の原因たるものを撲滅するに努めねばならぬのであるが、その衝に當る者は矢張り世の父母や敎師等が、所謂爾より出でたるものは爾に還るの原則で之を努めねばならぬのである、

凡そ何事でも世間の上のことは、極端から極端に走るもので、例へば、儉約々々といつて無暗に儉約を勸めた結果は吝嗇に陷るやうなものである、また思想もその如くであつて、初め個人主義が盛んに歡ばれるかと思ふと、やがて厭が來て社會主義を迎ふるといふ風に、兎角極端から極端に趣いて、凡て中庸を取るといふことは六ケしいものである、固より個人主義も社會主義も必要である、決して一方に偏してはならぬのであるが、人類の弱點といはうか、又は通有性といはうか、どうも之が
中庸を執る
といふことは困難に感ずるのである、殊に女子に於ては甚だしいのである、

前にもチヨツト述べたやうに、維新前には三從とか七去とかいふやうな、女子には一つの制裁といふよりは、寧ろ一種の強壓力があるのみならず、殆んど深窓の底に幽閉せられて居つたのである、然るに王政復古と同時に之が桎梏に等しき禁を解かれたのみならず、女子も亦男子と同じく教育を受くべきものであると云ふ所よりして、所謂女子の教育なるものが旺んに唱導せられ鼓吹せられた結果、恰も籠の鳥が空中に放たれたるやうに、急に何處へでも押し廻はすといふやうになつたから、從つて言葉といふものも粗暴に流れて來たので、言はゞ
幽閉對開放
の結果であると云はなければならぬ、して見れば其粗野若くは淫靡に流れたのも固より咎むべきであるが、要は
せしめた者が惡い
と云はねばならぬ、

既に社會が女子に是等の自由を許した以上は、家庭または社會の上に於ても之を許さねばならぬのは必然の理である、而も此く一旦許したにも拘はらず今更のやうに之を禁じて、從來の如く窮屈の位地に立ち戻らせやうとしたならば、その反動は實に今日より以上の惡結果を招かないとも限らないのである

が、而かも尙ほ世には、社會と時勢とに反對の方針を以て嚴格主義を固執して居るものがあるけれども、抑も之は何の意たるかを解するに苦しむのである、或は

家庭が立場のために夫等を唱へ、或者は賢妻良母主義の爲に之を叫ぶ者もあるが、既に賢妻良母主義のために女子に教育を施しながら、一方に於ては社會に接せしめないやうにする、それは間違つて居るのである、そも〳〵女子を家庭內にのみ限るといふとは宜しくない、苟くも具體的に進むならば、縱ひ父母が惡くとも、その子女に敎育を施しさへすれば決して自己の品位を墮すものでは無い、況して今日は社會が廣くなつて居るのであるから、從つて子女も親の手下を離れて下宿生活をする

この下宿生活も、遠く故鄕を離れて之を爲す者と、



吾人は當時の流行語に就て云々する資格ありや

父兄が餘り嚴格主義に失するが爲に、種々の口實を設けて爲る者との二種類あるが、その何れにしても一たび父兄の許を離れて下宿生活をすれば、いまだ辨識力の固まらない青年の女子たちは、知らず〳〵周圍の誘惑に魅せられ、從つて精神および擧動までが醜惡に浸みつくのである、

　尙ほ一つ從來の敎育家には、所謂女子の敎育家なる者は多くない、女子を敎育するにも、重に男子が女子の敎育に任じて居るのであるが、今後はさうは行くまいと思ふ、何も男子が女子の敎育に從事して惡いといふのでは無いが、今日のやうに老朽者が多いのは餘り悦ばしい現象とは云はれぬ、故に從つて敎訓する所が女子の敎育に作なはないのである、實は當路でも、女子の敎育には女敎師を用ゐたいのであるけれども、前にも云ふが如く、現今は適當な女敎員を得ることが出來ないから、餘儀なく北不足の爲に、男子の敎員を用ゐて居るのである、併しながら男子の敎員には特有がある、卽ち意志、忍耐、勇

氣の强健なること、是等は到底女子の男子に遠く及ばざる所である、元來女子は情の旺んな者であるから、男女を問はず、凡て是等を敎育するに就ては、强ち男敎員ばかりでも可かなければ、又女敎員のみでも宜いといふ譯には行かない、男女相合つて初めて圓滿に行はるゝのである、何も女子の生徒だから女敎員に扱はせねばならぬとか、男學生だから男敎員で無ければならぬといふ道理は無いので、男女を取扱ふのに

別に區分はいらぬ

のである、然るに從來は少しく無理に流れた點がある、加之のみならず、翻つて所謂女子の敎育家なる者を見るのに、惜いかな生徒を感化するに足る人物が少ない、所謂女子敎育家として言語、風采、擧動是等の點に於て、果して人の儀表となるべき敎育家は實に稀である、

　模範すなはち生徒の手本(世間並の)と稱する者も或意味から云へば、反つて外れた特別の一種異樣の

誤解を抱いて居つて、寧ろ服裝の如きも、特に質素が宜いと云つて、生徒よりも劣つて野卑に流れて居る者がある、また擧動や言葉使では、所謂先生風なるものがあつて、その氣障サ加減は無いのである、斯樣な人の手に依つて善良なる人を造るを得るとするも、其は單に敎場に於てのみ望み得るので、實際には反對の結果を顯はすのである、たとひ反對までには行かずとも、所謂木に緣つて魚を求むるの誹は免れないのである、

次に女子が技藝を學ぶといふ事は、吾人も亦之を悦ぶべき現象と思ふが、如何にせん技藝を敎ふる所の敎師の人品の劣等なることには、實に一驚を喫せざるを得ない、殊に其言語の粗野なる點に於ては最も此感を深うするのである、一體彼等の眼中には

神聖なる敎育

といふ事の頭が無い、まるで學校に來て生徒を敎ふるのを、工場の監督でもして居るやうな氣になつて居る、學校といふものは、常に

道德の修養

を離れてはならぬ、苟くも之を離れたならば、當に其者の品性を墮落せしむるのみではない、究竟學校の價値は零になるのである、而かも技藝の學校の多くは是等の敎員を以て充たされて居るのであるから夫等の學校の生徒の品性が下落するのも、實は之が大原動力をなして居るのである、

一方より考へると、修身道德の敎へ方も、昔と今では大いに趣きを異にして居る、昔は凡て科學的で無かつたけれども、其頃はその敎訓で滿足して居たのであるが、

今日はさうはいかぬ

何故なれば、今日の兒童は直ちに疑問を懷くから昔流では行かぬ、然るに現今世上に行はるゝ所の修身書を見るのに、例へば、忠臣の正成を擧ぐるかと思ふと、直ちに一方には逆臣尊氏のことを示してあるこれは大層可いやうに見えるが、その實良くないのであるから、是等は改良せなければ宜くない、餘り

斯ういふことを窮屈に教ふるが爲に、遂には道徳といふものは、

守るだけ損である

といふやうな感念を懐くやうになる、これは實に由々しき一大事で、曾ては靑年男女を墮落せしむる一大原因とも爲るのである、卑近の例だが、吾人は西洋の讀本にあるが如き、小兒が蜂の巣を取らんとするを誡められたるにも關はらず、强て之を襲うたが爲に、その報いとして螫されたといふやうなる、所謂自覺、反省に基きたるもの丶訓誡を喜ぶのである

一體世間の人が、所謂學者に依つて凡ての敎育を享けやうとする傾があるが、彼の智育の點はそれでも宜いとして、德育に至りては、克く世間の辛酸艱苦を甞た人より受くる、即ち生きた敎訓を授けらる丶人を歡迎するやうに爲りさへすれば、前來縷々數千言を費した言葉の改善の如きは、實に食頃の易々たる事である、故に世の父母たる者は、宜しく子女敎育に對して此に注意あらん事を切望するのである

我家の愛犬

澤田撫松

私の家の犬が二匹居る、一匹は頗る大きく一匹は至つて小さい、大きいのはスパニエルで、小さいのはホックステリアである、

スパニエルの方は一昨年の十月に生れ、昨年の正月の元日に本鄕の友人から貰うて來て、ジョンと名を附てやつた牝犬である、ホックステリアの方は生年月は判然しないが、昨年の二月迷ひ犬であつたものを拾ひあげてやつたのである、其時は生後四五ケ月程の兒犬で、飼主に捨られたのか宿なし犬が産捨てたのか分らぬが、同じ樣な兄弟犬と二匹數寄屋橋内の路地の中にウロ〳〵して居つたのである、兒犬でも乳離れがして親犬慕しい風も見えぬ、私が毎日其路地を通ると毎々二匹揆合ふて淋し相に往來を眺めて居る樣が如何にも哀れなので、兒犬を發見てから十日程經て路地の入口の家で訊ねて見た、此犬は

飼主があるのか無いのかと、すると果して飼主が無い、何でも一ケ月程前に何所からか路地へ捨に來たのであるが、誰も拾つてやる者が無い然れども全然り喫はなければ死んで了ふから、それも不憫だと言ふので時々其家から食ふ物を與つて居るのである、其所で直に相談が出來て牡犬の方は其家で飼ふことになり牝犬の方は私が貰ふことになつた、生後四五ケ月しか經たない兒犬であるが、親に離れ主人に捨られて苦勞したので、餘程老成て居るが身體は至つて小さい、手平に載せると其上に整然と四足揃えて立てる程の小さゝである、幾等小さくても動物である以上品川の宅まで伴れて歸るには些と面倒だ、其まゝ電車に乘る事は出來ず、さりとて數寄屋橋より品川東海寺まで犬と相乘も氣がきかぬから、惡い事とは思ひながら一計を案出した、ボール製の卷烟草の空箱を貰ふて來て其中へそつと兒犬を入れて、これを風呂敷に包むで見た、如何見ても手土產か進呈物としか見えない、これなら大丈夫と言ふので風呂敷包を提て電車に乘つた、幸ひ暫くは乘客が多かつたのと犬が魂消て動かなかつたので惡事露見に及ばなかつたが、札の辻邊まで來ると電車の中が餘程淋しくなつた、私の方の側に四人と向側に三人と合計七人になつたから私は一番前の所に席を變へた、それは風呂敷の中の一物がモガ〳〵動き出したので、成べく車掌に遠ざかつて氣の附かない樣に用心したのである、ところが伊皿子の停留所まで來ると其所で三人の乘客が増えた、四十五六の紳士風の男と三十七八の其の細君らしい女と十一二の少年とであるチーンと鈴が鳴ると電車が又動き出す、風呂敷の一物は愈々堪らなくなつたと見えて無闇に動く、件の少年は敏捷く目を附けた、アラ風呂敷が動くと大きな聲で叫んだから堪らない、乘客一同は皆私の包に目を注ぐ、ハツトして傍を見るとニユーと風呂敷の間から兒犬が頭を持ちあげて、そしてクン〳〵と啼き出したのである、失敗たと思ふたがモー仕方がない、車掌は飛で來て小言を言ふ乘客はクス〳〵笑

ふ、遂々其所から下されて車で歸つた、

家に伴れて歸つてよく見ると、ホックステリアで迷犬には珍らしい好い犬である、名をペットと附けた、然れども何分今まで飼主なしの乞食犬であつたので毛が塵と泥に汚れ、殊に皮膚病で所々毛が脫けて、それは〳〵見る影も無い姿である、翌日から毎日アルボース石鹼で洗つて遣ると一ケ月と經たぬ間に見違へる程美しくなつた、八月の末には立派な娘盛の犬となつた、それでも身體は至つて小さい、密柑箱の中に安々と寐て未た空間がある、こんな小さい犬でも年頃と言ふ事が分るものと見えて、何所から來るのか種々の牡犬が遣つて來る、各自にペットの機嫌を取つて我こそ三國一の花聟にならうと運動して居る、ペットは多くの牡犬の中で氣に入つたのが一匹も無いと見えて振向もしない、牡犬の中で最も熱心なのは材木屋のエス、鳥屋の權太、金子さんのポチ、北馬場のハマ、山の重兵衛である、山の重兵衛と言ふのは小牛の樣な日本犬で、天王山に住むで居る野犬である、野犬でもちやんと重兵衛と言ふ名が附いて、山の重兵衛と言ふと其邊で誰知らぬ者ない有名な犬である、犬殺しも重兵衛だけは手を出さぬ、と言ふ理由は南品川に山本重兵衛と言ふ米屋があつた、隨分手廣く商賣をして居つたのであるが日清戰爭の時唯一の相續人を名譽の戰死と言ふ美名の下に奪はれて了まつたので、重兵衛は落膽して病氣になつた、すると後妻が情夫をこしらへて家政を滅茶々々にして姿を匿した、斯う言ふ羽目になつたから、重兵衛は遂に住むところもなくなつた、人の好い正直な重兵衛は斯んな落目になると如何する事も出來ないので、町内の知人に賴み火の番に使うて貰ひ漸と喰扶持にありついた、それから他と話一つしない偏人になつて晝は寐て夜は忠實に火の番をして居つた、其後何所からか兒犬を貰うて來て一生懸命に可愛がつて居つた、その中犬が大きくなる重兵衛は齡をとる、ところが昨年の八月重兵衛が天王山の杉の樹に縊て死んでからこの犬も天王山に住む樣

になつた、それから誰が言ふともなくこの犬を重兵衛々々と呼ぶので重兵衛は追々犬の名になつて了つた、犬の重兵衛も主人の重兵衛と同じ樣に人が居なければノツソリ〳〵歩いて居るが、人の顔を見ると恐ろしい眼でジロリと睨むで尾も動かさずに逃げ出すのが常である、これでも主人の重兵衛が生て居つた時は夜は重兵衛の布團の裾に寢てそれは〳〵好く馴れて居つたのであるが主人が死んでから人を恐れる樣になつた、この重兵衛が私の家へ來るのは毎も人の居ない時に來る、ペ



ツトは重兵衛が一番嫌ひで、重兵衛の姿が見えると内庭へ飛込むで例の密柑箱の中に小さくなつて匿れて了ふ、すると重兵衛は入口まで來て悲し相に長吠をしてノッソリ〳〵歸つて行く、若し人でも出やうものなら毎もの一瞥をくれて驅け出すのである、材木屋のエスも鳥屋の權太もセッターでなか〳〵強い犬であるが、重兵衛を見ると皆逃げ出す、それは稍當から嚙合を始めた事があつて其度毎に重兵衛に散々惱されたので、重兵衛を恐しい者にして居

るのである、エスや樺太でさへ左樣だから金子さんのポチや、北馬場のハマや其他の犬は重兵衛の遠吠を聽いてさへ縮みあがるのである、斯んな風にペットの聟さだめは常に重兵衛に防害せられて、九月の末になつてもペットは處女であつた、

この恐しい重兵衛が絶えず附け廻して居る中を如何して出來たものか、ペットに夫が定まつた、それはエスでも樺太でもなければポチでもハマでもないこれまで見なかつた雜種の黑犬である、この黑は飼主が無いのか首輪をして居ない、犬と言ふ者は妙なもので交尾期に男が定まるまでは多くの牡犬がやつて來るが、男が既に定まると他の犬は斷念して來なくなる、ペットも亭主が定まつたのでエスも樺太もポチもハマもモー來なくなつた、然れども重兵衛だけは相變らずノッソリ／＼人の居ない時やつて來るそして若し黑を發見やうものなら牙を露出して咬みつくので、黑も暫らく來なくなつた、ペットは全く妊娠したのである、一ケ月も經つと黑が又やつて來た、それから時々出て來てペットの樣體を見る樣子である、ところがペットは遂に流産して了つた、それから三日程は夜になると黑が門口で悲し相に遠吠をする、黑が遠吠をすると何處から出て來るのか重兵衛が飛出して黑を追ひ廻す、黑が悲鳴をあげて逃げ出すとペットは庭からワン／＼吠え出す、然れども重兵衛が恐いので外へは出ない、家から威張て居るのみである、然し重兵衛の姿が見えなくなると飛び出して追ひかける、無論重兵衛の傍へは行かぬ遠か此方から吠えて居る、若し重兵衛の姿が見え樣ものなら狼狽て逃げ歸るのである、其年は犬には大した出來事も無く暮れた、正月になるとペットには新しい朋輩が出來た、それは例のジョンで本郷から貰うて來た兒犬である、生後二ケ月程は經つて居つたのであるが、兄弟が多くて乳が充分に飲めなかつたから、榮養不良で發育が遲いのである、種はスパニエルだから大きくなければならぬのが至つて小さい伴れて歸つた晩はさぞ親を戀うて啼くだらうと思ふ

て居つたが、ペットが自分の居間として居る蜜柑箱へ伴れて入つて抱いて寢たから、幼けなき兒犬はペットを親と思ふて乳の出ない乳房に吸付いて寢て了つた、翌日からジョンはペットの傍を離れない、暫時でもペットが見えぬとクン〳〵啼き出して仕方がない、ペットも幾等か可愛いと見えて遊びにも出ないで嘗て遣つたり調弄つたりして居る、四月頃になるとジョンはペットより大きくなつた、それでもペットはジョンを兒犬扱ひにして居る、ジョンも亦ペットに甘へて居る、三度の食事は固より菓子一つ與つた時でも二匹一緒でなければ決して喫はぬ、若しペットかジョンか一匹より居ない時に食物をやると自分は喫はないで直ぐ朋輩を呼びに行つて伴れてくる、如何して伴れて來るかと言ふと、先づ自分が一口喫うて其口を朋輩の鼻の先に持つて行く、すると御馳走の臭がするから直ぐ食物のある事が分る、急で歸つて來て二匹一緒に分け合ふて喫ふ、その仲の好い事は確かに人間以上である、其時分の事でおつたペットが重兵衛に咬まれて二ケ所の傷を負うた、するとジョンが一生懸命に毎日朝から晩まで其所を甞て遣つて遂々癒して了つた、それから暫らく經とジョンが病氣になつて到底も自宅で治療が出來ないから溜池の東洋家畜病院へ入院さした、ジョンが俄に見えなくなつたのでペットは心配をして食ふ物も喫はない、終日ジョンを捜し廻はつて夜になると悲し相な遠吠をする、十日程の間にペットは目切痩せたそれでも幸にジョンが全快して退院したのでペットの元氣も恢復された、

また秋の交尾期になつた、例に依つて材木屋のエス、鳥屋の權太、金子さんのポチ、北馬場のハマ等言ふ連中が遣つて來た、無論重兵衛もノツソリ〳〵遣つて來る、然れども犬はなか〳〵節操の堅いもので、一度夫と定めた以上は決して他の男に心を寄せぬのである、だから幾等權太やエスやポチやハマが騷いでも、重兵衛が恐ろしい牙を露出して來てもペットは振向きもしないのである、唯黑の來るのを待

つて居る、果して黑は出て來た、他の犬が喧嘩を吹き掛ける、幾等黑でもポチやハマには敗けないが、權太やエスには到底かなはぬ、殊に重兵衞は大の禁物每も喧嘩は始まると黑は一番に緣下に逃込む、半月程は每日ワン〳〵キャン〳〵の騷ぎが却々烈しかつた、それも濟むで了ふと後は黑と重兵衞が時々來るのみである、ペットは又妊娠した、犬は二ヶ月で出產するのであるから一ヶ月も經つと、餘程苦し相だ、黑は心配相に時々來てはペットの腹を嗅いで居る、出產期に近づくに從ひペットの呼吸が荒くなつて來る、ペットは密柑箱を產蓐に不適當と認めたのか、緣下に深い穴を掘つた、無論產蓐のつもりであらう、藁の柔かにしたのを穴の傍へ置てやると其を又細かくして穴の底へ自分で敷く、そして絕えず穴の中に寢て居る愈々產期が近づいたのである、重兵衞は時々穴を覗きに來る、然れどもモー斯うなると鼬鼠の勢流石のペットも重兵衞を傍へ寄せつけない黑は每日の樣に出て來る、一晚雨が夥に降つた翌朝前の目黑川の對岸で犬の悲鳴が聽えた確かに犬殺しにやられたらしい、其日から黑の姿が全く見えないペットは未だ出產しない、重兵衞は相變らずノッソリ〳〵

專賣特許の蒸氣こて

家庭用器具として、最も必要品なる蒸氣こての發明世に公にせられたり、この蒸氣こてはアイロンの如く絹にかけられぬなどいふ惡癖なく、又火熨斗の如く地を焦がし色を變へる等の事なし、底に三つの穴ありて、それより蒸氣を吹出し蒸氣にてしめしたる後を、熱度にて乾かすやうになりたれば黴を生せず、洗ひて少し糊をつけ、蒸氣こて



にてのせば、立派に延びて、湯のしやにやる手數も省かるゝなり、全體は眞鍮にニッケル鍍金をなし、絹房など付きたれば、貴顯の家庭用にもなるべし、價は中形一個三圓八十錢東京麴町二丁目の千鳥商會の發賣にて、三越吳服店にも賣捌く由、學校裁縫店には殊に必要品なり、

細川十州先生序文　三輪田眞佐子刀自著

女子の本分

第二十三版

彩色摺表紙大和綴菊版美本全壹冊定價金廿五錢郵税金六錢

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　電話新橋二六九三番　株式會社國光社

島田三郎先生序　小畠幾次郎先生著

腦力增進論

全

正價　三拾五錢

送料　六錢

沼南島田三郎先生本書の冒頭に序して曰く心身の二者を保養して人始めて其發育を完全にするを得べし、心性を措いて偏へに身體を説き身體を外にして專ら心性を論ず二者各其半面を語るものにして全局を蔽ふの見解に非ずと、著者夙に玆に見るあり世の青年學生の腦病に罹る者多きを慨し研究を積み推考を重ね汎く專門諸大家を歷訪し其所説を叩き大に悟る處あり遂に此書を作せり、賀古耳科院長、井上眼科院長、中濱回生院長、此木ドクトル、三浦大學敎授、岩佐告成病院長、鈴木胃腸病院長等の卓説高論は著者の實驗及び古今に涉れる實地談と共に輕妙快活なる文章に由りて描寫され一讀の下頓に精神の壯快なるを覺ふ蓋し心身の二者を保養するに於て極めて必要なるのみならず一般學生の爲めに無上の清涼劑たるべし

小畠幾次郎先生著

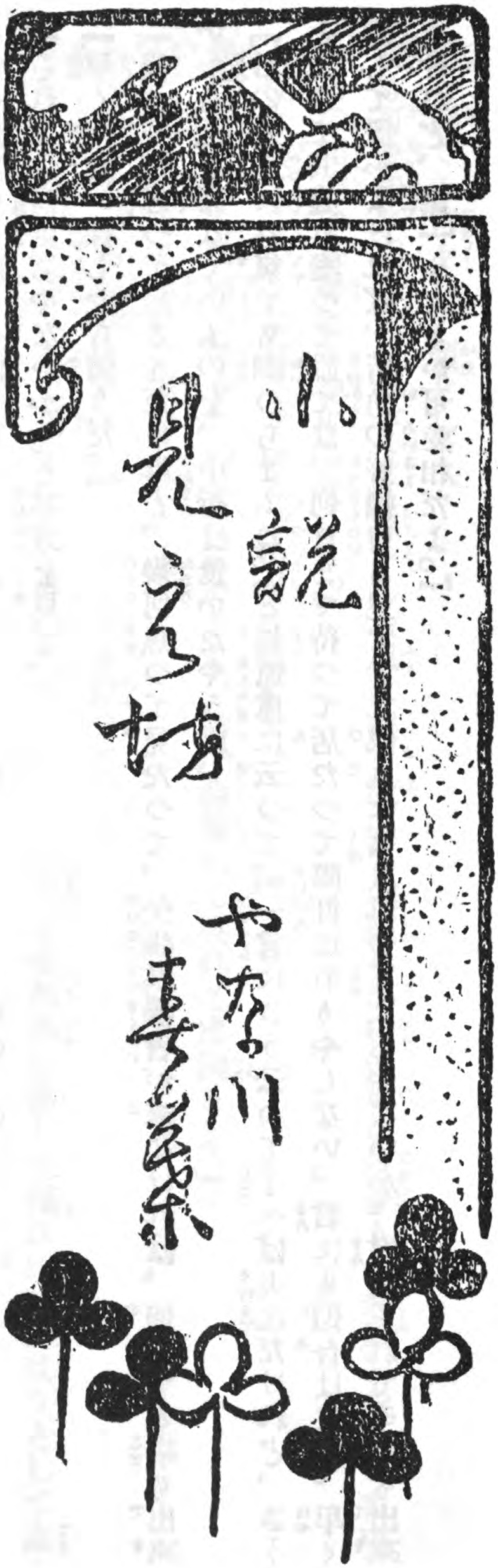
體力增進論

全

正價　四拾錢

送料　八錢

著者前に腦力增進論を著し世に裨益せしもの少なしとせず更に本書を公にし相俟て心身の完全なる發達に資せんとす由來體質の軟弱なるは我が國民の一大缺點殊に一般學生の通患なり希くは此書に據り研究鍛錬して軀幹長大體力剛健の人と爲り以て戰捷國の民たるに負かざれ



一

白藤の色さへ褪せた行春の、麗らゝかな日を浴びて、轍の跡に散る櫻の花片を踏みながら、江戸川堤を飯田橋の方に行く二人の紳士がある。

一人は淡い八字髯の一際目立つて快活氣に見ゆる三十四五の男で、鍔廣の中折に縞羅紗の洋服、手頃の洋杖を小脇に挾んで、赤革の運動靴を穿いて居る。一人は是よりは二つ三つ若さうに見えるが、略同じ位の年恰好、いゝ、しつくりと身に合つた中古の背廣に鼠霜降の穿袴、靴は佛蘭西革の流行形、細身の洋杖を振り廻しながら、押し並んで大跨に勢よく歩んで行くが、何處かに屈詫げな、神經質らしい處があつて、時々思ひ出した樣に空を仰いで、頭の上に生ひ出た葉櫻の小枝を、自棄に毆つては、ハラ／＼と散る若葉の行衛を小氣味の可さ相に眺めて居る。

中折の方は呑みさしの卷莨を捨てゝ、
『それでは要するに君は今、差し向き何處へも務めては居ないのだね。』
『さう。』と氣のない返事をする。
『ぢや困るだらう。』
『無論困る。』
『ハヽヽヽ』と笑ひ出して、『勿論困るぢやそれこそ困るぢやないか。早く何うかしなければ。尤も君のは此方等とは違つて、口が無いかつて、今直ぐ何うといふ身分でもないから、其麼に急がなくつても可い樣なものゝ、それでも今迄極つて收入つて居たものが無くなれば、夫丈自然貯蓄の方に手が付かうといふものだ。』
『いや此度の失敗で全然損耗つ了つたから、もう貯蓄といふ可き程のものはない。』
『それなら尚更ぢやないか』と其方を見て、
『早く何處か探したら何うだ。』
『僕も左樣思つて居るんだけれど、幾何焦つて見たつて、矢張其機會が來なければ、何うする事も出來ないから。』と膠なくいふのを、中折は憫いたやうに、
『君のやうに呑氣でも困つちまふね。』と無遠慮に云つて、『一言にさう云つて了へば夫迄だけれど、さうかと云つて其儘打棄つて置ては、何日まで待つて居たつて際涯はありやしない。君にも似合はない。早く運動して置かなければ、折角の好機會も見すゝゝ他人に奪はれつ了ふぢやないか。君はそれで辛抱も出來やうけれど、第一マダムが可愛相だよ。』

妻と聞くと苦々しい顏をして、
「妻も可愛相さ。」と云つたが急に焦々した風に礫を蹴つて、「然し都合の可い時斗りの夫婦ぢやあるまいし少つとの間位の苦勞は辛抱するだらう。」
と吐き棄てるやうな調子でいふ。中折は慌て丶、
「僕は何もそんな積で云つたのではないから、君、曲解して呉れては困るよ。」
「何。僕は何とも思つて居やしない。」
と云つたが、話が妙に白けて、二人は其儘默つて了ふ。
暫時別々に、川端に並ぶ葉櫻の下を傳つて行つたが、中折は突然思ひ出した樣に何か云はうとして友の方を見ると、彼は川上に漕いで行く貸舟を一心に眺めて居るので、
「君。おい山口。」と聲を懸けると、
「何だ。」と矢張其方を向いた儘返事をする。
「實は一つ務め口があるんだがね、おい君。他人事ぢやあるまいし、今少つと眞面目に聞き給へ。」
「舟を見て居ると何だか幼い時代の事が思ひ出せて愉快で堪らないから、つい見惚れて了つて居たのだ。」
と始めて此方を振り向いて、「その口といふのは一躰何處なんだ。」
「他でもない。僕の方の社長の石川ね。知つて居るだらう。ホラ何日か向島の百花園で逢つた男さ。」
と大いに本氣になつて尋ねる。
「うん知つて居る。」
「矢張あの石川が經營して居る貿易會社があるのだ。尤も是は橫濱だがね。恰度其處に、遠からず一人缺

員が出來る筈になつて居る。若し君さへ何なら直ぐに話をして見ても可い。』

と、一寸立ち止つて、身躰で風を防いで、莨に火を付け一服吸つて、『何分此方は未だ創立匆々だから、此方の云ふ丈 報酬を寄越すか何うかは疑問だけれど、然し頗る前途有望だといふ話だから、半年か一年辛抱して居りや乾度可いだらうと思ふんだ。』

と云ひながら相手の顔を窺つて、

『何うだね君。』

『さう。夫は至極好都合だ。』と眼を輝かして云つたが、急に調子を更へて、

『然し他に一つ心當りがあるのでね。』

『え。』と中折は驚いて、『だつて僅只今何處にもないと云つたぢやないか。』

『それは云つた……が……實際は未だ判然と決まつて居ないから、夫で發表しなかつたので…………。然し君がさう云つて呉れると、僕の方は直ぐにも夫と決したいのだが、何分其方があるから、兎に角何れかに結着の付くまでは、何とも返事を仕兼るのだ。』

と聊か狼狽した調子で答へる。

『然し何れにしてもそんな處があるなら至極結構だ。』と少しく中腹の氣味で云つて、

『それで君のいふ處は何んな處だ。』

『夫は、實は新事業なんだ。何分まだ何う方針を取るか、其點が未定なのだから、今少く發表を憚るんだが。』と曖昧に云つて、『要するに空前の新計畫といふ事だけは事實だ。』

『さうか面白いだらう。新たに事業を興すといふのは中々冒險的な處があるが、其代り確然した資本主が

つて、着々として遣つて行くと隨分面白いからなあ。』と贊成して、
『僕の方のだつて、現在明いて居ると云ふのではないから、兎に角先口の方を決行して見玉へ。若し甘く行かなければ、夫は又其時の事さ。』
語りながら行つて居る内、二人は何時しか電車道を横切つて、飯田町の停留場迄來たので、中折は一寸會釋をして、
『僕は是に乘るから此處で別れやう。暇が有つたら些と遊びに來給へ。大概夜分なら何日でも宅に居るから。』と電車の方に行かうとする。
『可いぢやないか君。寄つて話して行つちや何うだ。要事があるなら兎に角………。』
『別に用事といふ程のものもないのだが。』と考へて、『兎に角今日は失禮しやう。何れ其間に緩り伺ふけれど。君も閑があつたら是非來て呉れ玉へ待つて居る。』
と折から來懸つた電車に飛び乘つて、
『おや失敬…歸つたら妻君に宜敷。』
『難有う。左様なら。』
山口は夫處に立ち止つて、暫時電車の跡を見送つて居たが、軈て後ろに引返して、大跨に松原堤に沿うた人氣の少ない坂道に曲り込むと、急に歩を緩め、首を垂れて考に沈みながら、落膽したやうな足並で歩んで行つたが、坂の中途迄來ると突然歩を止めて、
『俺は何故斯うだらう。』
と獨り叫んで焦々しながら、自棄氣味に路傍の礫を叩き付け、

「其中には何うかなるだらう。」と獨り慰めるもの丶如く云つて軈て又てく〳〵と歩み出した。

二

「へい今日は。庭先から御免なさい。」
柄の小さい小紋の着物に、黒繻子の半帶をキチンと締め、切髮にした半白の髪を奇麗に撫で付け、右手に小さな信玄袋を捧げて上品な五十六七の婦人が、裏口の木戸を開けて靜かに這入つて行た。東々と椽側に差し寄り、障子の外から硝子越しに中を覗いて、
「今日は。春さんはお在宅にかな。」
「はい。」
と閑雅に答へて、内から障子を明けたのは、山口の妻の春子で、年頃二十三四、難を云へば眼元に少し險を持つて居るが、色の白い口元の尋常な、惣じて人好のする顔で、髪は當世流の廂髪にして居る。何心なく顔を出して、其人を見るより急に、手に持つて居た縫ひ懸けの着物を傍に押しやつて、
「おや秋山の叔母さんで御座いますか。」
と怡々と出迎へて、
「よく被參して下さいました。さあ何うぞお上り下さい。何時も〳〵取り散らして斗り居まして。」
愛想よく云つて頻りに四邊を片付け始める。
「何うぞもう其儘にしで構つて下さるな。今日はな、朝から餘り好いお天氣だものだから、宅に引籠んで居るのも惜しい樣な氣がしてな。加之久しく御無沙汰して居るものだから、何んな樣子だか、御見舞旁お午過からぶら〳〵出かけてお邪魔に來ましたのさ。」

と云ひながら、自分で夫處に雪駄を揃へて、そろ〳〵と座に通る。
春子は快く座蒲團を勸めて、
「左樣で御座いますか。それは何うも可く被參して下さいました。さあ何うぞお敷き下さいまし。私の方こそ是非お伺に參らねば濟まぬ〳〵と存じながら、つい〳〵一日延びになつて御無沙汰斗りして居ます。」
と云ひながら器用に茶を入れて、
「粗茶で御座います。」
「はい。是は難有う。」
と一口啜つて、
「時に今日は、繁さんは何處かへお出懸けかな。」
「はい。お午頃に一寸夫許迄と申して、飄々出かけました切り、まだ歸つて參りませんので御座いますよ何れ又何方かお友達の家にでも寄つてゐますでしやう。」
「あゝ左樣かな。」
と云つて、帶の間を搜つて地味な縞珍の煙草入を取り出し、小形の銀煙管に煙草を詰めながら、
「大概何時頃お歸りぢやろかな。」
「左樣で御座います。出かけに何とも申しませんでしたから判然とは譯り兼ねますが、もう程なく歸つて參りますでしやう。あの何か御用事でもお有りなさるのでは御座いませんでしたか。」
「いゝえ。別段用事といふ程でもないのぢやが。」
打ち出した吹殼を丌首の先で灰に埋めながら、

「其後今の、何の方はもう決まつたかの。」

「あの奉職の方で御座いますか。いゝえ薩張捗取りませんので眞實に困つて了ひますのですよ。皆様も色々御親切にさう仰有つて下さいますのですけれど、何分當人があの通りの者ですから、一向何處とも決まりませんので…………私も始終さう申しては勸めて居るのですけれど…………。」

と聊か伏目になる。

「いや何うもな、いざ探すといふ事になると帶にや短かし襷にや長しで、何でも此方で氣を揉む樣には行かぬ者ぢや加之近頃の若いものは皆、始から可い處〳〵と斗り望むものだからの



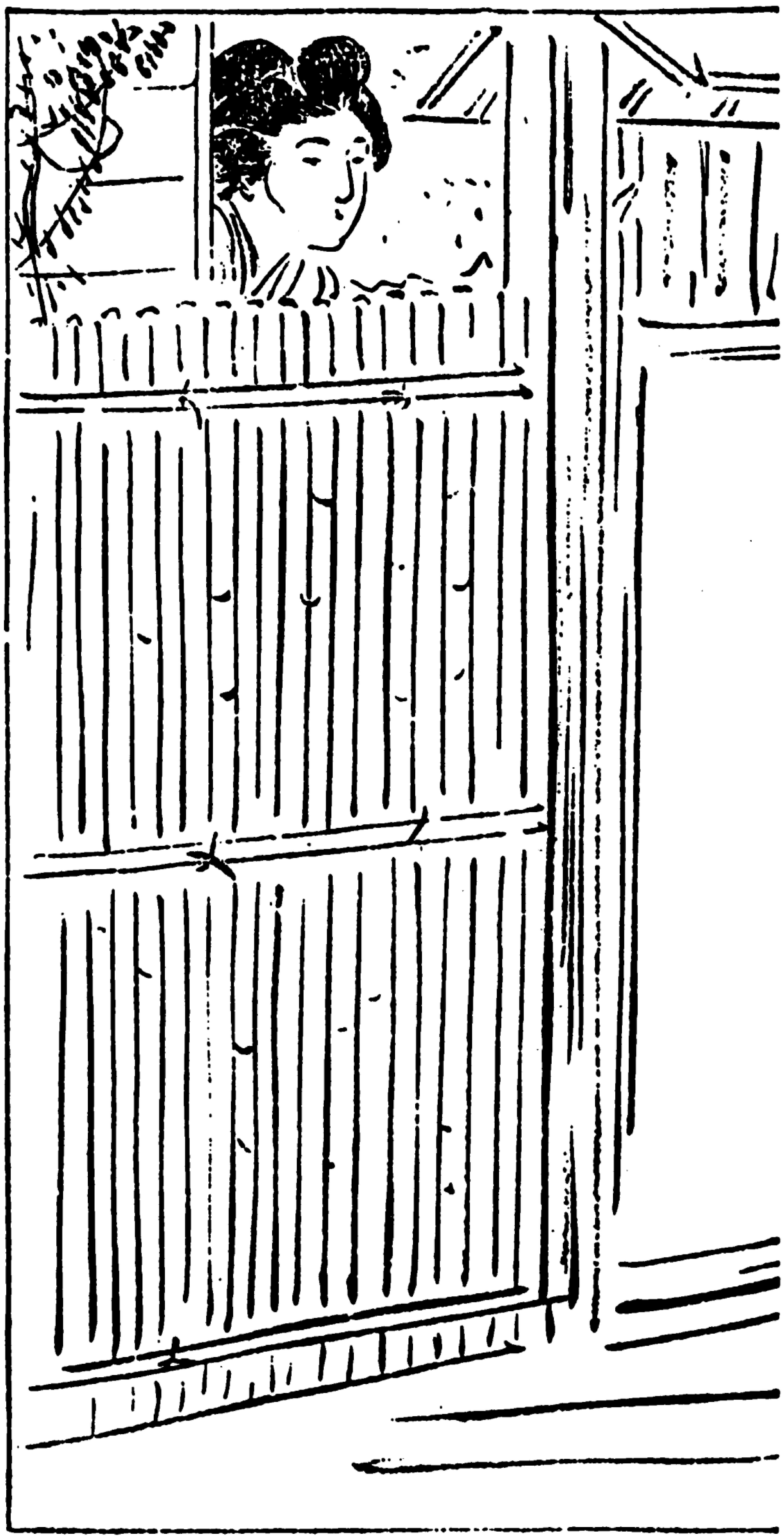
何うしても早くは片付きませんぢやこ左右當世はまあ學問よりはの、お世辭の方が勝つ時節ぢやから何でも其積にして行かんとの。』

と云つたが氣をかへて、

『然しもう彼是四五ヶ月も經つた事だから、さういふて斗りも居られんで、其内には何處か相應な所ならね。

『左樣で御座います。まあ一日でも早く何うにかして與れませんと。……私だつて氣が氣ではないので御座いますよ。』

『さうとも〳〵。』と大きく默頭いて、『さう何日までも遊んで居ては、何時傳來の家督に手がつかぬとも限



らんからのう。そんな事でもあると、それこそ大變ぢやで。」
と容易ならぬ顔色をしたが、
「然し繁さんは働があるから、今に出世をしなさるじやらうが、それにしても遊んで居てはのう。まあ成る可く至急に何處か探して、皆にも安心させねばなりません。」
「もう〳〵私も側から出來る丈は勸めても見ますので御座いますけれど………。」
老人は夫には耳も貸さず、例言葉を續で、
「私共でもね。及ばぬながらも皆心配してな。」
「色々お心配をかけまして。」
「なにそれはお互ですが。それに就中一郎は、あゝして始め繁さんに澤山お世話になつた恩があるからといふので大相心配して、方々まづ運動とやらをして居ます。」
「何うも何日も〳〵御親切に有難う御座います。」
「いゝえ。そんなにお禮なぞ云はれると、却つて俺の方が痛み入りますぢやが、まあ一郎で見れば、今斯うして居るのも皆繁さんのお蔭ぢやとな、毎時も口癖のやうに云ふて居ります。」
「何うも恐れ入ります。お世話なんぞと申すやうな事は御座いません。皆一郎さんのお働なので御座います。」と謙遜つて、『ほんに近頃は一郎さんも大變御出世遊ばしまして、お結構で御座います。』
「何ね。繁さんなぞと違つて、愚者の上に彼兒のいふ丈の修業をさせてないものだから、今では自分でも大變悔しがつて居るけれども、何も無理にさう贅澤をしやうとも思はず、私なんか却つて氣樂で好い位に思つて居ますぢや。」

『いやもうお羨ましい位で御座います。』
と逆はずに合槌を打つ。
『加之。親の口から斯んな事をいふの變な話ですけれどの、他人といふではなしするから云ふのですが、一郎は學問のない代りに大變義理堅い辛抱な兒でね、今の處へ出ても是と云つて大した手柄もない代りに別段失敗もなしに忠實に務めて居るので、お蔭で今では社長さんの氣受も可い方だ相での………。』
と止め途もなく述べ立てる。
日常はもう蒼蠅い程に聞き厭いて居ることながら、今は夫さへ身に泌んで、あれ丈の腕を持ちながら、せめて一郎さんの半分なりとも辛抱氣が有つて呉れゝばと、夫に對する愚痴も出るので、
『眞實に一郎さんは御若いのに大相御辛抱で被居います相でして、宅でも始終左様申しては感心して居るので御座いますよ。』
『そんなでもないですがの。』
と隱居はホク〳〵して、冷へた茶を啜りながら、
『物事は何によらず辛抱が金ですからのう。それと今一つは何でも自分だてをせずに、長い物には卷かれろで、少々は此方に理屈があつても、上のいふ事なら萬事御尤で押し通すのがね、何よりさ。』
『左様で御座いますとも。』
隱居は倘頻りに諄々と述べて居たが、思ひ出した様に容姿を改めて、
『それに就て此處に一つ務め口があるといふ話で、早速繁さんにもお話して見やうと思つて來たのですがの。』

「おゝ左樣で御座いますか。何うも御親切に有難う御座います。」
と丁寧に頭を下げて、隱居の言を待ち構へる如く熱心に其面を見守つた。
「それは斯ういふ譯なんでな。」と開き直つて、「矢張伜が勤めて居る處の課長さんといふ人が大變に可い人で、それが又伜をまア大變寵愛して下さるのでな。毎度碁のお相手だの何だのに行つて居る中、話の序に繁さんの事を話したのだ相だ。すると大相氣の毒に思つて、幸好い處が明いて居るからといふ事なので實は一郎が來て自分で委しく話をすると云つて居たのだけれど、今日私が來たものだから、序に話の緒だけといつてな。」
「それは何うも有難う御座いました。」
隱居は何も言葉を繼で、
「尤も始は雇とか何とかいふ名義だといふのだ相なが、それでも月々手當の二十圓も出してな、先ず一年も忠實に務めて呉れゝば、其時は又腕次第で、其上を幾何でも出さうと云はれるぢやさうな。まア俺で見れば此麼な好い口は又とあるまいと思はれるがの、それも一應は繁さんに相談してからでないと。」
「結構で御座いますわ。那麼な處が有りますなら、夫こそ願つてもない仕合で御座います。良人も決して異存は無いと存じますから、是非何うぞ宜敷く御願ひ申ます。」
「それはもう、繁さんの氣さへ極まればの、一郎からさう云へば直ぐ先方は何うにでもなるといふ話ぢやから。」
と云ひながら、徐々煙草を片付け、一寸身繕をして、
「それでは繁さんがお歸りだつたら、其話をして置て下さい。」

と立ち上る。

「おらもうお歸ですか。まあお宜しいでは御座いませんか。もう彼是其時刻ですから、程なく歸つて參りましやうからさうお急ぎなさらずと、今一服召し上つて。」

「有難う。然しまた來ましやう。今日は一寸其處まで來たので、直ぐ歸るやうに云つて置きましたから、宅でも待つて居やうで、さう緩りもして居られない。春さんも閑があつたら、遊びに來て下さい。」

と立ち上つて、

「左樣なら。繁さんに宜敷。」

「まあ叔母樣。もう程なく歸つて參りましやうから。」

「折角だけれど、今日は眞實に緩りしては居られないのだから、左に右これで……。」

「左樣で御座いますか。」と春子は强てとも云ひ兼ねて、「折角入らして下さいましたのに一向お構ひも致しませんで、甚だ失禮致しました。其中には是非御伺致しますから、皆樣にもお閑の時にはお遊びに被參して下さる樣に仰有つて下さい。」

「はい難有う。今の事は成るべく早くね。」

念を押しながら、椽端に出る。

「はい承知致しました。何うも態々御親切に有り難う御座いました。何分此上とも……。」

「困るときはお互です。左樣なら。」

「左樣なら、御免遊ばせ。」

庭もせに茂る夏草の中を分けて歸つて行く隱居の後影を見送つて、春子は暫し恍然として椽端に立ち盡

して居たが、軈て心付いて四邊を取り片付けて居ると、表の格子戸を開ける音がして、間もなく主人の山口は束々と入つて來た。

春子は愛想よく振り向いて、

『おやお歸りなさいまし。』

『誰か來たのか。』と夫處等に散ばつて居る跡を見て、立つて片手に帽子を持つた儘尋ねる。

『えゝ。あの秋山の叔母樣がね、貴方に逢ひたいと云つて今迄待つて被居したのですけれど、余りお歸が遲いので儘只今しがたお歸でした。何處か途中でお逢ひになりはしませんでしたの?。』

『いゝや逢はない。』



と素氣なく云つて、其儘洋服を着換へに次の間に入つて了つた。
日頃の氣質を知つて居る春子は、別段氣にも留めず、
「今直ぐ其方に參りますよ。」
と云つて、急々と夫處等を取片けて居る。

三

手早く着物を換へ終つて、山口は長火鉢の前に胡坐を搔き、自ら茶を入れて一服呑んでゐると、間もなく用事を濟ませて、茶室に這入つて來た春子は、夫の前に坐りながら、
「貴方今日は隨分御緩りでした事ね。何方へ廻つて被居したのです。」
山口は呑みさしの煙草を灰の中に突指して、
「あれから何處といふ事なしに、飄々小石川の方に行つて、門口を通つた物だから、福井の家に寄つた。」
「お在宅でしたの?」
「會社の用事で四五日前から靜岡の方に行つて居る相だ。直ぐ歸らうと思つたけれど何しろ彼の妻君に捕まつちや堪らない、面白くもない話相手を二時間餘もさせられて、辛つと切り拔けて臺町の方から降りて來ると、小學校の前で、松田に出會したものだから、二人で江戶川端を話しながら、飯田町迄一伴に歸つて、彼處で別れたのさ。」
「松田樣と云ひますと、あの以前貴方と一伴に鐵道會社に務めて被居した方なのでしやう。」
「うヽ左樣だ。」
「まあ珍らしい方にお逢ひなさつたのね。連れ合つてお歸りなされば宜しかつたのに。」

「俺も大分勸めたけれど、遂々肯かずに歸つて終つた。」
「近くに居た時はよく來て人を笑はせる斗りでして面白い人でしたが、隨分久しくお便りがありませんでしたわね。今は何うして被在るんでしやう。」
「矢張彼處に居て、餘程好い地位に昇つて居るさうだ。」
と、聊か面白からぬ顏をして、長煙草で煙草を吸ひ付ける。
「へいさうですか。彼の方は隨分お出來になるんでしやう。」
「何。格別出來る男ぢやないのだけれど、如才なく上役の機嫌を取るからさ。」
「そりや始めから中々如才のない人でしたけれど、何うしたつて夫斗りでは……。」
と云ひかけたが氣を換へて、繁の顏を窺ひながら、
「貴方、松田樣にお話してお覽なされば宜う御座んした。」
「何を。」と繁はもう夫と氣着て居ながら、態と知らぬ顏で尋ねる。
「何をつて貴方務める處をでさわね。松田樣は昔からのお馴染ですし、加之其處に出世して被在るのなら何うにか成らぬ事もありますまいから。」
「それは話したさ。」
「何うでした。心當りはありましたの。」
「有つた……。」
と云つたが、急に不味さうに冷へた茶をグッと一息に呑んで其儘默つて終ふ。
春子は眼を輝かして、

「何んな事です、心當りといふのは。」
「彼男の務めて居る會社の社長がやつて居る横濱の貿易會社ださうだ。」
　春子は大に安心したやうに、
「さうですか、それはまあ宜う御座いましたわね。さうすると濱の方に移轉すのですね。」
　繁は益々苦々しい顔をして、
「まだ何とも極めやしない。實は斷らうかとも思つて居るのだ。」
と吐き棄てるやうにいふ。春子は驚いて良人の顔を瞻視めた儘、暫時は物も云はなかつたが、軈て口を開いて、
「貴方其麼な好い處がありますのなら、何故直ぐ其場でお頼みならさなかつたのです。」
「さうお前のいふやうに輕々しく行くものではない。加之第一友……………。」
と云はうとするのを、奪ふやうにして、
「それは左樣かも知れませんけれども、平素とは違ひますからねえ。貴方は夫でも濟みましやうけれど、些とは家の都合も考へて下さらないと困りますわ。もう彼是半歳にもなるのですから、そりや何日迄遊んで被居しても、是ぞといふ的があつてなら宜しいけれど……………。」
　と喞言がましく述べ立てる。
　繁は聊か色を作して、
「誰も遊んでは居やしない。お前には左樣見へるか知れんが、是でも俺は一生懸命に奔走して居るんだ。然し幾何焦つたつて適當の處がなければ詮方がないではないか。」

「そりや左樣ですけれど、傍から見ては何うしても左樣は見へないではありませんか。先日も吉本さんが彼程勸めて下さるのに斷はつてお終ひなさるし、紡績會社の方だつて左樣だし、松田樣の方だつて結構ですのに………。」

「然し自分の氣に適らないものは詮方がない。」

「だつて、それは餘り………。」

と云ひかけたが、其儘口を噤んで、火鉢の灰を搔きならして居る。

暫時兩方も默つて居たが、繁は氣を更へて、

「秋山の叔母さんは何しに來られたのだ。」

春子は氣不味氣に顏を上げて、

「矢張貴方の事で、一處明があるからと云つて勸めに來て下さつたのです。」

繁は厭な話を外らさうとして問ひ掛けたのに、是も亦同じ事なので、

「うむ左樣か。」

と云つた儘默つて終ふ。

「二郎さんの會社に周旋するからと云つて來て下さつたのです。是程皆で色々と心配して下さるんですから、貴方も大概な處なら辛抱して出て下さいよ。」

と別段仔細に話すでもなく、又元へ皈つて說き初める。

繁は焦々して、

「さうがみ〳〵云つたつて詮方がない。あれ程いふのに、お前にはまだ私の心が判らないのか。」

「そりや判つて居ます。判つて居ますけれど………。」
「判つて居るなら少しは俺の思ふやうに爲せても可いぢやないか。」
「だつて………。」
「よろしい。お前迄俺を信用しないのなら………。」
と云つて袋から大和を一本拔き出したが、その巻の堅いのに一層腹立しく、滅茶〳〵に揉潰して終つた。

四

横に絞つた窓掛から、華々しい夕陽の漂ふ大學の森を望みながら、悠然と倚子に凭つて、頻りに麥酒の杯を擧げてゐるのは、粋な洋服を着た眼付の利口さうな紳士と、繁である。紳士は懐かし氣に山口の顔を見ながら、
「君と逢ふのは殆んど彼是十年目だなあ。然し偶然再會するといふのも何かの縁だらう。先刻切通で見た時、何うも君のやうな氣がしたけれど他人の空似かとも思つて躊躇して居たのだ。彼の時若し君が偶然に顔を擧げなかつたら、其儘行き過ぎて了つて、又何日逢へるやら判らなかつたかも知れない。」
「さう。」と山口は何か考へて居るらしく無愛想に答へる。
「兎に角奇遇だね。」と云つたが、山口の様子を見て、
「何うかしたのぢやないか。馬鹿に沈んで居るぢやないか。何か心配事でもあるのか。」
「いゝや、其麼な譯ぢやない。」
と顔を擧げたが、自分を瞻視てゐる友の顔を見ると、眩し氣に慌たゞしく視線を落して、氣の抜けた麥酒を苦さうに呑む。

友といふのは、彼が始めて高等商業學校に入學した當時席を並べて居た葛西といふ男で、二年許り交際して居た。其中に山口は家事上の都合で、中途から廢學して實業界に飛び出し、葛西は無論其儘止つて首尾よく卒業した。學問は取立てゝ云ふ程の成績でもなかつたが、英語を操ることに妙を得、加人之に取り入る事の上手な男で、夫が爲にある一派の學生間では輕薄漢として頗る擯斥されて居たが兎に角頗る才子肌の男であつた。

其後久しく消息を知らずに過して居たが、今日不意なくも、切通の坂下で先方から聲を懸けられて、山口は進まぬながら茲に誘はれたのだ。

葛西は悠然と後ろに反つて、左の肌を倚子に懸け、呑みさしの葉卷に火を點じて、

「時に君は其後何うして居たのだ。隨分學校時代の友人に聞き合せて見たが、一向君の消息を知つて居るものがないのだ。君の事だから屹度今に世人を驚倒せしむるやうな大事業を初める計畫中なんだらうと噂して居た處なのだ。」

「いや駄目だ。理想と實際とは並行するものぢやないからなあ。」

山口は胸を刺されるやうな氣がしたが、強て平氣を裝ふて、

「そんな事はない屹度するだらう。友達甲斐に少し承りたいものだね。」

「眞實だ。」

「所謂天機洩らす可からずかハヽヽヽ。」

と洪然として笑つたが、急に眞面目になつて、

「戯談は戯談として、今は何處に務て居るのだ。」

山口は苦り切つて、
「實は或る會社に出て居たが、今春少し考が有つて斷然退社して終つた。」
「ぢや今は。」
「斯うして遊んで居る。」
「何處か他に務る考なのかね。」
「うゝ。」と山口は輕蔑されたやうな氣がして、急に昂然たる態度で、
「僅か斗りの給料に縛られて、社長の機嫌を取つたり、朋輩に氣を兼ねたりして事務を取るのは否になつたから、種々さう云つて勸めて呉れる者もあるけれど一々斷つて了つて、不遠自分で事業を起さうと計畫して居る。」
と云つたが、自分ながら妙に氣が咎めて、思はず私に拳を握つた。
葛西は微笑んで、
「さうか面白いだらう。君の氣質は 全く其方が適して居る。僕も君程の腕があると、何、此年齢をして人の風下に立つて居たい事もないが、矢張扶持に離れると一家路頭に迷はなければならない境遇だからなあハッハッ」。と快活に笑つて、「君は以前から事務家としてよりは、事業家としての天才を有して居た。面白い大に遣り玉へ。」
山口は此言葉を聞きながら、獨り焦々して居たが、突然立ち上つて、
「僕は失敬しやう。」と柱に懸けて居た帽子を取る。
葛西は驚いて、

「何うしたのだ。然う急がなくつて可いぢやないか。折角久し振りで逢つたのだから、差支がないなら、今日は緩り快談しやうではないか。」
「難有う。然し僕は少し急ぐ事があるから、左に右今日は失禮しやう。」
「何うしても皈るかね。」
「うゝ、今日は……。」
「さうか。」と一寸考へて、「一緒に行つても可いが何うで方角が違ふから、夫では此處で失禮しやう。」
と云ひながら、ポケットから名刺を出して、
「僕は今此家に居るから暇が有つたら是非遊びに來て呉れ玉へ。」
「難有う」。と名刺を受取つて、「僕は今日生憎名刺を所持しないから。何れ遠からず僕の方から訪問しやう。左樣なら。」勢ひよく表に出た。
日はとつぷりと暮れて、街道には電氣燈の光が美しく輝いて居る。
胸の中を掻き攪られるやうな氣がして暫し俯向いて歩んで居たが、突然途中の郵便局に飛び込んで端書に何か認めて、片手にポストの蓋を開いた儘、無言に文句を繰返して居たが、
「實際自分はあんな事は出來ない。今少し大きな人間の筈だ。」と獨言いて潔くそれを投げ込んだ。妻と友人に勸められて、奉公口を頼みに行きかけて居た處を、葛西に引き留められたので。今投げ込んだの其謝絶狀なのだ。
二足三足其處を離れると、急に或る考が電光の如く閃いて、慄然として立ち止つたが、
「えゝ。何うなるものか。」と、彼の常套語を吐き棄てるやうに云つて、薄暗い小路に曲り込んだ。

（完）

朝鮮の旅行談

柴田常恵

朝鮮の旅行談と云つても、誠に期間が短いのみならず、別に帶ぶる所の要件もありたる爲に十分の視察も出來ないので、其通過した所は、重に鐵道線路に沿うた部分のみと云ふ位で、その範圍も極めて狹小なのであるから、誠に纒つたお話も出來ないのである、が、併し予が通過した所で、慥かに京城の南北で風俗習慣等に稍異る點はある、けれども一體に朝鮮人根性とも云ひますか、

個人同士に陷擠

を試みると云ふ氣習は一般に認めらるゝのである、

ソコデ旅行の行程は略しまして、まづ朝鮮へ旅行する者の心得、および旅行中に感ずる事共をお話して見ませう、

旅宿屋がない

朝鮮を旅行して、第一に不自由を感ずるのは、宿るべき旅人宿がない、之は到る所同樣であるから、朝鮮へ旅行する者の一般に不便を感ずるのである、然らば夜になつて、木の下か又は人の軒下にでも宿らねばならぬ、所謂野宿でもするのかと云ふに、さうでは無い、旅宿らしきものに宿泊するので、その旅宿らしきと云ふのは、先づ我國で言ふ所の

掛茶屋又は木賃宿

の如きものである、而して此の旅宿らしきものは、或點に於て我國の飲食店に類似して居るので、先づ夕方になつて宿泊すべき旅人は、此の飲食店に入つて夕食を認めて後、宿泊の事を頼み入るのである、而して承諾を得て宿泊するとは云ふもの丶、寢るに

夜具も布團もない

のみならず、

枕は木の丸太

で、凡そ二三人位互ひ違ひ、又は並んで寢られるやうな長いのである、之も田舍へ入ると、一家族が共に出來るやうな長いものを用ゐるのである、是等も

隨分堪へないのであるが、殊に閉口するのは、假令宿泊人が幾人あらうとも、

部屋は大廣間

で、別に一室々々に仕切つてあるのでは無いから、その大廣間で一同雜魚寢をするのであるから、旅人に取りては不用心此上も無い、

朝鮮の飲食物

は と云ふと、上流の者は米を常食とするのであるが、下流の者に至りては、麥や小豆を常食して居る、殊に夏になると、下流の者は

常に眞瓜を食して居る

のであるから、京城や海城邊では、一日に爲で何十駄と云ふ多くの眞瓜を運び來るのである、さうして其價は一錢に約二三本位である、その上流の常食なる米飯も

日本とは炊き方が異つて

居て、十分に水を吹かした後、蒸すなどゝ云ふ炊方では無く、大凡グラ〳〵と煮て、最早熟したと思ふ頃を見計つて、飯揚笊とも云ふべき、丁度日本で百姓衆が馬糞を浚ふのに用ゐるやうな、細い雌竹で造られたる物に盛り、金にて造られたる、恰かも托鉢僧の持つて來る鐵鉢やうなものゝ中に掬ひ上げられるのであるが、すべて朝鮮では

飯の盛換はない

のであるから、此の時十分に一食分だけ盛りわげる、その盛りわげる時、溢れさうになると、別に消めもしない手で押付けて、若しも飯粒が手に附くと、其を口に啜り込み、其儘手を洗ひもしないで、復前の如くするのであるから、之を見ては迚も虫の弱い者などは喰はれるものでは無い、

知らるゝ如く朝鮮は、水の質の惡い所で、夫が爲と云ふでもあるまいが、一般に茶や珈琲など云ふものを間に飲むといふ事は無い、故に喫食の後にも別に茶を出すと云ふ事も無いので、豫め米粒を掬ひあげた後の、所謂米汁が一椀、飯と共に備へられてあるのみである、ソコデ副食物は如何なる物を重に食

するかと云ふと、まづ干鱈、明太魚、栗、豆腐等であるが、此の豆腐も柔らかものでは無く、所謂蹴瓜づけば怪我をするといふやうな硬い豆腐で、何れも縄で縛つて持歩くと云ふ始末である、此の外に漬物を食しますが、此の漬物には種々あるのみならず、朝鮮人の風習として書籍を大切にするのである、けれども、此の漬物を作るためには

書籍を賣つても漬物を作る

と云ふ風である、それに尙ほ彼等の風習として、御飯を除くの外は、如何なる食物の中にも蕃椒を投れるのである、

食卓はザツトちやぶ臺のやうな物で、匙と箸とを使うて食事をするのであるが、日本のやうに坐つて食すると云ふ事は無い、多くは蹲踞で食するのであるが、間々盤踞を搔いて食する事もある、そのあぐらのかき方も我國とは異つて居る、それはさうとして措いて、その安坐をかくときは、膝の上に食器を載せて食するのである、物を寫したり書いたりするにも此の膝の上で行る、而して彼等は三度とは云ふが、實際は二度で、その二度とも冷飯を喰ふといふ事は無い、その都度炊いて暖いのを食するので、是は朝晩に行るのであつて、此の外午前十一時頃に俗に煮込みといふやうな物を間食するに過ぎない、

井戸には決して車を用ゐぬ

それから朝鮮では、何所の井戸へ行つて見ても、決して井戸に車を用ゐたものを認むる事は無い、皆釣瓶のみである、是は井戸が一躰に淺い爲であらうと思ふ、之に就て思ひ起すことは、彼の武州の高麗郡は、昔し朝鮮の高麗より來た者を措いた處だと聞き傳へますが、それかあらぬか、彼の郡では今も尙ほ車井戸を用ゐると云ふ事は至つて少ないが、之はその當時の遺風ではあるまいかと考へらるゝのである、前に釣瓶と云つたが、その釣瓶も我國に於て用ゐる物とは全然違つて居るので、恰も夕顔か冬瓜の大きなものゝ皮を乾し固めた物を、大抵折半位に切つて中の實を取り去り、三ケ所に綱をつけて、凧の釣

の如くし、程好き所にて一つとなし、上の方は一本となしおき、之を以て水を釣るのであるが、之は銘々水を汲む時に持つて行き、汲み終れば家に持ち皈るのである、而して前にも云へるが如く、井戸の水は至つて淺いのであるから、少し大勢集つて汲む時は、直ぐに水が涸るので、その時は俟つて居て汲まねばならぬのである、その汲みたる水を運ぶには、是も我國のやうに手桶と云ふものは無い、只丸い桶やうな物だが、近來は石油の空鑵を用うるのである、而して持運びには、之は水に限らない、凡て朝鮮人は、我國人の如く肩へ天秤を掛ると云ふ事は一切無いので、餘程重い物はチケと稱する背負道具を使用するのである、併し水の如き輕いものは、凡て頭に戴せて運ぶのである、此の液躰で思ひついたが、小便なども矢張り頭の上へ戴せるので、歩きながら揺れて顔面へ滴れても、チヨツト手の先で拭つて置いて、少しも頓着しない、實に穢いのも度を過ぎて居るやうだが、まだ之より吾人が堪へられないのは、

前に述べた釣瓶の小さなやうなものは、克く水や米汁などを飲むに用うるのであるが、一體に朝鮮人の風習として、小便は夫程に汚穢ものでは無いと思つて居るのであるから、若しも急に小便が催うすると、座敷の眞中でも關はず、その食器の中へ用を便じて之を外に散し、別に其食器を洗ひもしないで、その中に水や湯を注で呉れるので、是には實に閉口せざるを得ない、少しく尾籠に渉りますが、大便の方は聊か穢いと云ふ感じのあるものか、まさか之は座敷の眞中で用を達すと云ふやうな事はない、併し彼等の家には別に雪隱の設が無いので、何れも家の周圍で遣る、その用の達し方は甚だ呑氣で、長い煙管で煙草を吹かしながら、他の用を達して居るものと談話を交へつゝ遣つて居るので、その醜態は二眼と見られないのである、尤も上流は別である、

雨天には外出せぬ

外出と云ふても、朝鮮の女子は支那婦人と同じく、滅太に外出することは無い、まづ重に男子に限るの

であるが、概して云へば彼國には雨具といふものが無い、故に雨降には外出しないのである、若しも途中で雨に遇ふとすれば、僅かに小さな油紙を帽子の上に載せる位に過ぎない、尤も百姓は簑を用ゐ、又は竹若くは菅のやうなもので編んだ笠を用うるのである、その他の人民は帽子を用うるのであるが、自から之にも二種ありて

上流のものは馬尾

以下のものは竹

にて造られたる物を被る、以上は男子の方面で在が、

女子が外出する場合

には、之も京城附近と田舍では自から相違があつて、京城附近の婦人は青色の被衣、田舍の婦人は白色の被衣を用ゐて身體を覆ひ、夕ゞ眼ばかりを出して歩くのであるが、此の被衣には縞物や模樣のある物は決して用ゐない、近來白衣の制を變せられたが、長い習慣の事であるから、概して白色を好む癖が失せない、その白に次では青、黄、赤、紺、紫と云ふやうな順である

外出の時の乘物

これも男子と女子とで區別があつて、女子は駕籠に乘り、男子は驢馬に乘る事となつて居るが、彼等一般の風習は、

平常跣足である、

間々草履を用うる者もあるけれども、多くは跣足で往來をして居る、尤も上流のものは履を穿くのである、

簪の長さ一尺七八寸

朝鮮人は男女ともに簪を用ゐて、男子は顚頂の上に髮を卷き、四五寸位の簪で之を留めておくが、女子は普通下髮である、けれども儀式の時は之を卷いて、一尺七八寸もある簪を挿す、此の簪には龍とか鳳凰とか云ふものを彫刻してある、田舍の婦女子は常に額の上に髮を卷いて居るのである、小兒の樣子は支那と大差は無い、尚は此の他の事は後日お話しする事として、今回は之にて止めおかう、

家庭に於ける心理學の應用

高島平三郎

第八　想像（下）

●●●●●●●想像作用の利點　想像作用が人生に取つて大切であるとは色々の點から見ることが出來ます。

(一)理會　第一に吾々が他人の談を聞いたり又は書物を讀んで其意味をさとることの出來るのはどういふ心の働であるかといふにこれには受動想像が働かねばならぬのであります。何故と申しますればすべて話や書物に書いてあることを理會しますにはその人の說くがまゝに吾が心の中に表象（觀念）を作つてゆくのでありまして、若し此の表象が出來ねば理會が出來ぬからであります。それゆゑさとりのわるい人は即ち想像力の乏しい人であります。一家の主婦たる人が下女、下男に何か話して聞かせたり命い付けたりする時には殊更心を用ひて彼等の心の中に十分その命令の表象が出來るやうに深切丁寧に話してやらねばなりません。すべて子供や無教育の人は他人の話をとんだ間違つたことに理會することが少くないものであります。これはつまり想像を作る材料が乏しいから命令通りの表象を造ることが出來ず自分の持つて居る考のやうに理會してしまうのであります。それゆゑ想像作用をよく養へばだん〳〵物事の飲み込みに早く且つ精密に間違はぬやうになるのであります。

(二)發明　また何か新しく工夫するとか考へ出すとかいふことは全く發動想像の作用から出來るのであります。ワットやスチーブンソンなどの大發明は勿論のこと家庭に於て一寸したことを新に考へ出すにも其初は必ず先づ心の中で、あゝかうといろ〳〵に

分離結合してこれなら屹度出來るであらうといふ見込が立つてたら之を作り始めるのであります。婦人の方などが衣服を裁ち縫ひなさる時などやはり大發明と同じやうな心の働を要するのであります。尤も普通の端物を裁縫するのはだん〲慣れて來れば殆んど受動想像のやうに別段新しい考を費さずして出來ますがこれまで爲たことのないことをする場合例令ば父親の上衣で子供のズボンを作つてやらうなどいふ時にはたゞ學校で敎つた一通りの裁ち方縫ひ方では間に合はない。必ずいろ〲



と自分の想像からあの切れをあすこに當てゝこの切れをこゝに用ひるといふやうに心の中でつもりをなさらねばなりません。かやうに今まで習つたこともなく見聞したこともないことを自分の考で新しく作り立つてゆく心は全く發動想像の作用で偉人の大發明と少しも異る所はないのであります。それゆゑ家庭を治めてゆかれる間にもいくらも發明をなすべき機會があるのであります。隨つて主婦自らいろ〲の家庭の改良を心がけ下女下男にも分相應によき考を申し出させるやうに奬勵して

とは家の爲めにも自分自らの爲めにも甚だ美いことであります。たとひ他人に取つては珍らしくないことでも自分自らは始めて考へ出した事であるなら其人の爲めには一の發明であります。それゆゑ下女下男は勿論子供などがもう世間にいくらもあることを珍しさうに考へて來ても決してすぐに之を排斥してそれは珍らしくはないとか何にもならないとかいつて彼等の苦心を無にしてはなりませぬ、必ず相應のその苦心を認めてやり惜いことにそれは外にもかういふ發明があるとかいつて穩かに彼等の智識を擴めてやるやうにせねばなりませぬ。

(三)同情　他人に對するおもひやりも想像から出來るのであります。無慈悲の人おもひやりの無い人は其性質の殘酷に由ることもありませうが一つには少い時からの教育が想像作用を養ふに不適當であつた爲めに他人の心の有樣を理會することが出來ないからであります。なぜならば想像力に乏しい人はかうしたら彼の人がどういふやうに苦しむだらうかなどといふことは考に浮ばない、人の苦しんで居る有樣を見ても之によつて自分の心の中でいろ〳〵材料を組み立てゝこのやうに苦しからうなどといふ感がおこらないからであります。すべて詩歌小說などは想像から出來るものでありますから是等文學の嗜ある人は思ひやりにも富んだ人が多いものです。文學といふものはたゞ一つの美感の修養のためばかりでなくかやうに人情の機微にわたつて人の道德心をすゝめる上に大切なものであります。勿論文學の中には劣惡者もありまして人の弱點であるいろ〳〵の惡い心をおだてることもありますが善良 高尙 なるものは前に申した通り道德と一致して美はしい人情を養はしめるものであります。高利貸のやうな非人情の行をする者が文學などの素養のないのは當り前でありますが物質的の學問にばかり心をよせて冷なる理智の研究にのみ馳せて居る學者も文學などの嗜は手にも取らず隨つて無學の高利貸と同じやうに冷淡刻薄の人となる場合が少くないのであります。たゞ

學問した方の人は自分の仕事が直接に人に關係しないから高利貸のやうにすゝんで人を苦めぬ點が異つて居りますがそのおもひやりのないことは同一であります。勿論同情といふことは人の天性にも由りますから、斯樣な學問をする人が皆之に乏しいといふことはないのでありますけれども概して他人の心を想像すべき精神作用を養はぬ人はおもひやりに乏しいものであるといふことは事實であります。それ故家庭の主婦たり母たる人は、常に適當の方法を以て自分の想像力を養ひ、老人は老人子供は子供下女は下女と、夫〲の人の心をおもひやり夫〲の人に同情してその心を慰め或は之を勵まして一家が美はしく治まるやうにせねばなりません。又子供その他のものを敎へ導くにも、他人に同情すべき樣にやさしくさとすことが大切であります。子供が蟲魚や鳥獸に對して慘酷なことをする塲合にもよく自分の身に引き較べさせるのが最もよい敎訓であります。是れやがて想像力を利用して道德心を養ふ方法に外ならぬのであります。

（四）計畫　前にも述べましたやうにすべて心算といふことは何か事をする前に豫め心の中でいろ〱と想像を畫いて定まつた表象を組み立てることをいふのであります。それゆゑ何事をするにもつもりのよく出來る人即ち計畫のよく立つ人はつまり想像力の盛な人でなければなりませぬ。計畫といふ事は何事にも必要でありますが家庭を治めるには特に缺く可らざることであります。經濟の如きも豫め出入の計畫を定めておいてその臨時に入つたものはすべて貯金するやうにすれば、少しも苦まずに貯金が出來ます。學問するにも何か仕事するにもすべて確實な基礎からわり出した計畫を立てゝ進まねばなりません。是等のことが何れも想像作用から出來るとすればその如何に大切な働であるかはいふまでもないことであります。

（五）理想　人が若し現在の狀態に滿足して何等の不足を感ぜず隨つて何等の改良進歩を計らなかつたら

此の世の中はどうでありませうか。いつまで立つても少しも進むことなくその內にはおひ〳〵退歩して來るやうになるでありませう。そこで人は現代を超越て一層よい狀態を心中に畫き常に之に憧がれ之に刺激せられてあらゆる點をおひ〳〵改良してゆかねばなりません。かく現在の狀態に滿足せずして一層よき狀態を想像することを理想といふのです。故に理想は各自が完全無缺と認める想像的狀態をいふのであります。世の中に理想の無い人ほど氣の毒なことはありません。かういふ人は全く動物と同じくたゞその日〳〵を暮して居るに過ぎぬのであります。理想は實に人が動物と區別せられる大切な作用でありますから後に更に詳しく說くことに致しませう。以上が想像の利ある點でありましてこればかりを見れば想像は實に大切なもので少しの害も無いやうでありますが、すべて利のあるものは害も之に伴ふもので想像にもいろ〳〵の害があります。今次にその主なる害を擧げて家庭を治める方々の御參考に供したいとおもひます。（以下次號）

新式菓子製造法

梅田矯菓

馬鈴薯饅頭

原料調合率　△白砂糖五拾匁　△馬鈴薯擦肉三十五匁　△炭酸安母尼亞粉末一匁五分　△米利堅麵粉入拾匁　△別に馬鈴薯餡

先づ鉢中へ前記の分量の塊のない白砂糖五拾匁を投れ、次に上皮を剝ぎ去つた馬鈴薯參拾匁を山葵擦で擂下ろし入れ、杓子で能く擦交せてから、其中へ、炭酸安母尼亞の碎し粉を一匁五分と、米利堅麵粉入拾匁とを毛篩にわけ、手頭にて靜に擦漉し入れ、徐々と攪まはし、煉混せて堅目に（但し手頭で煉種を摘み取り麵粉をつけ、延べ擴げ見て伸縮自在なる位也）捏ね集結して、麵粉を少々撒布いた箱內へ掬ひ取出し、雜と折重ねつゝ周圍に粉を糁してから五匁位づゝに切分け、其種緣を指頭で摘み、延べ擴げ、其中へ拾匁の早仕立赤豆餡玉か、馬鈴薯餡玉を

容れ、徐々と指先で押詰てみ種皮を寄せ合して確と括りつけ、稍平目の圓形に格好良く整へて丸め、濡布を敷延べた輪蒸籠内へ少々づゝ間隙を離して列べ入れ、直に充分烈蒸氣を發する飯焚釜の縁へ蒸籠底輪を組合して掛け、上蓋を載せて凡そ拾匁時間程蒸膨脹してから、火傷せぬやうに注意して蒸籠横縁を兩手で確と抱合ひ、釜から外づして上蓋を取り除け、濡手で蒸物を輕く摘みとり、胡麻油を少許綿布に浸して塗布いた葭簀の上へ列らべ、熱氣を能く發散して後菓子皿へ入れて御出しなさい。

前述の早仕立赤豆餡の製法は、上等の乾餡粉五拾匁を銅鍋か琺瑯塗鍋へ投れ、清水貳合六勺を注ぎ込んで七輪烈火に掛け、杓子で間斷なく攪拌しつゝ暫時熱し、其中へ上等粗目糖を六拾匁程加へ、稍々煉合してから更に六拾匁を入れ、萬遍なく攪きまはし鍋底へ焦着せぬやうに注意して充分煉交せ、熱氣を能く加へて下ろし、乾いた平板へ掬ひ出し、熱氣を發散して後迄も濕氣のない容器に移し入れ、風通しの良い冷やかな室内へ入れ貯えつゝ、お使ひなさい

又蒸物をなすには、飯焚釜中へ清水を五六分目注ぎ入れ充分沸騰せしめ蒸籠を掛けなさい。

馬鈴薯金鈍

馬鈴薯餡百匁程を銅鍋か琺瑯塗鍋へ入れ、清水數滴を注ぎこんで七輪烈火に掛け、杓子で間斷なく攪きまはしつゝ拾分間ほど、鍋底へ焦着かぬやうに注意して煉交せ、成べく濃堅に煮詰て下ろし、直に毛張の裏漉篩へ上げ、杓子で手早く擦漉出して塵芥糟を取り除け、其半分程の薯餡を取り分けて六匁位づゝの餡玉に圓め、次に殘部の薯餡に（但し餘り熱氣強ければ稍冷し）碾茶粉を一匁程採み合せて薄緑に着色し、更に上微塵粉を二匁程加へ混せて、一分角位の荒い編目の籐張の裏漉篩へ掲げ、手掌で徐々と壓擦出し落して朧餡を拵らへ、前の餡玉を朧餡で半包とし、朧餡を捲附けぬ方を上向に列べ、其表面へ先の尖つた竹箸で朧餡を摘み取り、體裁良く載せ附け飾るのですが其朧餡の附け方法は、最初縁へぐ

ゝるりと載せつけてから、中央へのせ附けるのです、附飾而して臊餡は成べく尖端が上向になるやうに、附飾るが宜しいです。

慈姑羹

原料調合率　△白寒天一本　△清水一合五勺　△上等粗目糖百六拾匁　△鬱金粉一匁　△慈姑擦肉汁百弐拾匁　△片栗粉参匁

先づ成べく大粒の慈姑を一升程求め、庖丁で上皮を剝ぎ、清水に一兩日間浸しおいて悪汁を抜き、後細長い白寒天を一本温湯内へ投れ、三四時間漬け水膨し、其間を利用して皮剝慈姑を山葵擦で下して容器内へ百二拾匁だけ取り集めて蓋を被せ置き、次に柔かく水膨した寒天の含水を握り絞り、細かく千切つて銅鍋か琺瑯塗鍋へ投れ、良水一合五勺を注ぎこんで七輪烈火に掛け、能く煮崩して稍沸騰せしめ、次に上等粗目糖百六十匁入れ、時々杓子で攪拌しつゝ糖塊を悉融解し、煮上がれば火から下ろし、別器へ毛飾を當て煮液を漉過して塵芥糟を取り除け、漉液を以前の鍋へ戻し入れて再び七輪火に掛け、暫時沸騰せしめ、其中へ慈姑の擦肉汁を百二十匁と片栗粉を三匁とを交せ合して加へ、杓子で間断なく攪拌しつゝ、鍋底へ燋着さぬやうに注意して、凡そ二十分間程手を休めずに万遍なく煉合し、濃くドロ〳〵に煮詰め、其煮詰加減を見計ひ揚げ際に鬱金粉一匁を清水にて溶き延べて加へ、攪き交せつゝ、薄黄に着色して火から外づし、直に深サ一寸横縦五寸程の漆塗重箱か鉄力箱内を濡布巾で撫引き濕した内へ流しこみ、風通しの宜しい平坦な場處へ列らべ、半日間程風に曝しおいて充分熱氣を發散しめ、凝結て後、其箱の内緣に清水少許注ぎ入れ濕して平板上へ裏返し、庖丁を濡布にて濕し、幅一寸長さ二寸位づゝに切り、其切口を斜に附合せ菓子皿へ躰裁良く列べてお使ひなさい。

長芋揑蕎麥饅頭

原料調合率　△白砂糖七十匁　△蕎麥粉四十匁　△上粳粉五十匁　△長芋擦汁四十匁位　外に早仕

立餡等

先づ乾いた鉢中へ塊ない白砂糖七十匁と蕎麥粉四十匁と上糝粉十五匁とを投し、手頭で能く掻きまはし、交せ合してから其中へ上皮を剝ぎ去つた長芋を四十匁程山葵擦で下ろし入れ、其薯液に糖粉を折りこみ重ねるやうに揉交せ、柔やかに捏ね集結めて糝粉を少々撒布した箱中へ取出し、周圍に糝粉を附着し、五匁位宛に切分け、其種縁を薄く摘み延べ擴げ、其中へ十匁程の早付立御膳餡玉を載せ、指頭で徐々と壓詰入れ、種皮を寄せ合して確と括りつけ、楕圓形に轉ばし丸めて格好良く整へ、濡布を敷延べた輪蒸籠内へ少々づゝ間隙を離して配置良く列らべ、飯焚釜の上に載せて七八分間蒸し膨脹し、程を計りて釜より外づし濡手で蒸物を輕く摘み取り胡麻油を少綿布に浸して塗布いた葭簀上へ載せ列らべ熱氣を充分發散してから菓子皿へお盛りなさい、



但し長芋は上皮を剝いで、一兩日間淸水中に浸し惡汁を能く拔出した者を擦下して捏ね混るやうになさい

諸人種婦人の装飾（下）

理學博士　坪井正五郎

一體未開時代の者は文明人に比べて幾分か感覺が鈍いのであるから、從つて多少の痛さを忍んで直ちに身體に施すのである、けれども文明人は之に代ふるに品物を以てするの異があるのみで、装飾を施すと云ふ點に至つては毫も差は無いのである、同じ入墨でも、今尚ほ我國人の或一部に行はれて居る所のものは、最初針の尖で衝突て種々の色を入れるのであるが、左程痛くは無いのである、尤も總體に施すときは身體も腫るけれども、小部分では左程の事は無い、而して未開種族には男子に多くして女子には之を施す者が少ない、現に行はれて居る所は、マルキサス、ボルネオ、北海道のアイヌ等である、此のアイヌの婦人は唇の上下に入墨を施すのであるが、之に關して世間では、嫁したる婦人の證據であると云ふやうに一般に誤解せられて居る、けれども之は嫁に往つた、亭主を持つたと云ふ證據では無い、何故なれば、一般にアイヌの女子は、幼少の頃より口端に入墨をして、年と共に漸次それを仕上るので、丁度嫁に往く時分に漸く出來上るのである、同じアイヌ人も、樺太アイヌは幾分唇にも掛けて、その他は唇の外邊に細く入墨をするばかりで、北海道アイヌの如く部分が廣くない、

　アイヌが入墨をする方法は、吾等が見聞するも悚然とする位で、先づ初め鐵鍋にタモの木を入れ水を注ぎ、別に樺の木の薄く削りたるものを焚きて之を沸して澁を出しおき、サテ施術者はマキリと稱ふる小刀やうのもので傷を附け、その出血を止める爲に鍋中の澁を以て洗ひ止め、而して其樺の木を焚きたる鍋底の墨を塗込むのでありますから、往々施術を受くる者は卒倒することがある、然るときは蘇生せしめて再三再四之を行ふのである、實際は嚴禁して居るのであるけれども、何時か施して仕舞ふから今

は獸許の状となつて居る、

第四は咽喉である、アイヌは咽喉にレクツンペと云ふものを纏うて居る、多くは細き布に種々の飾りを附けたるものを纏ふのであるが、時としては薄き木に種々の形状を彫刻したものを用ゐて居るものもある、その他未開種族には入墨を施して居る者さへもある、

第五は手である、此の手には腕環、指環の二様を箝める者もあれば、我が北海道アイヌの如く手の甲と前膊とに入墨を施すものもある、



第六は爪である、此の爪に装飾を施すと云ふ事は、我日本でも洒落者は爪の根に臙脂を刺すとか聞及びますが、埃及に於ては、臙脂の葉から汁を取つて、それを爪に塗るのである、之も一々面倒と云ふので、臙脂の葉を揉みて一夜指の先端に巻き附け、翌朝になりて之を取りさる時は、初めは暗赤色であるけれども、後には全く紅になるのである、之は着色の側であるが、之に反して着色は用ゐないで、爪を伸して飾とする、即ち彼の支那人の如き装飾も行はるゝのであるが、是は全く聯想

の上から來たものと思はれる、爪を伸して居ては荒々しき仕事に堪ふる事が出來ない、それ故に彼の勢働者の如きは爪を短かくして居る、ソコデ是等の聯想上から出たものと考へらるゝのである、

第七は歯である、此の歯を装飾するにも種々の風習があるので、折角天然の大切なる歯の形を變更するものがある、ニユーギニー、臺灣の蕃人、ボルネオ等である、又或者は一本おきに歯を抜て謂ゆる歯を元祿風にする種族もある、その形を變ずると云へば、ニユーギニー人の如きは削りて一枚〳〵に三角にするのであるが、或種族の歯の眞中に穴を穿けて金などを鏤めて居る者もある、次に色を以て染める即ち鐵漿の如きである、此の鐵漿も大部今では我國では衰へたと思へば、伊豆の七島などでは昨今之が流行し初めて來たのであるが、物の變遷と云ふものは奇妙なものである、而して此の着色も單に黒色のみでは無い、マレイ諸島やボルネオ、亞非利加等に至れば一枚毎に異つた色を以て、全で五色に着色して居るのも見受けるのである、

從來我國などに於て黒色を貴びしは何が爲であるかと云ふに、其理由は甚だ不分明であるのみならず、鐵漿を塗るのは、貞女兩夫に見えずと云ふ證據の爲に施したものであると解釋せられ來たつたのであるが、是は全躰夫婦間に於ける餘所の風俗習慣を知らないから言ふ事である、何故なれば、歯を黒く染めるのは單に我が日本ばかりでは無い、マレイ諸島のものも同じく黒く染めるのである、尤もマレイ諸島では、丁度吾等が食后に果物やチーズを取るやうに、常に好んで檳榔子の實を食するので、その食するに先だち、之を一種の植物の葉に包み石灰を附けて食するのである、然るときは其澁のために、歯は總躰に黒くなり、唇は臙脂を注したやうになるのである、而かも此の實を常に食する者は、言はゞ我國に於ける中産以上の者で無ければ出來ないので、中流以下の者は偶々之を食するに過ぎないから、その歯に白斑が出來るので、之を補ふために纔に一種の汁を滴

らして謂ゆる鐵漿を製して塗るのである、且つ多くの者の中には此の實を好まない者もあるのであるが、現に角歯の黒いのを以て誇りとする土地の風習であるから、それらの者は單に鐵漿を用ゐて歯を裝飾するのである、而して結婚の時には、此の實を夫より婦に與へるのである、未婚者には設ひ間接には爲るとも直接に與ふると云ふ事は許さぬのである、是より推測するときは、日本へは此の風習の一端が傳來したものではあるまいかと想察せらるゝのである

第八は腰部である、衣服と云ふものは寒暑を防ぐ爲であるとか、又は何の爲であるとか、今日では種々の理由が附せられてある、けれども衣服の無い人種もあるのを以て見れば、衣服と云ふものが果して今日云ふが如き目的を以て起りしものなりや否は別問題として、如何に衣服の無い南洋の諸島や亞非利加内地人の如きものでも、必らず頸の飾とか、又は腹より下には必ず腰簑の如きものを纏うて居る、

第九は足部である、ボルネオ人は股に半股引やうのものを纏うて居るが、マレイ人は膝から下足首の所まで全で箍のやうに金の輪を幾つも箝て居る、又亞非利加人は足首の所に同じく金の輪を箝て居るが、斯樣の事は決して珍らしくないのである、

第十は衣服である、之は前にも少しく述べたが、寒暑を防ぐと云ふよりは、最初裝飾より起つたものに相違ない、今日では品位を保つ爲に如何とか、禮儀の爲に斯うとか云ふけれども、それは人文の進んで來てからの話で、最も原初は裝飾に發したと云ふは、未だ十分に皮膚を覆ふことの無い以前よりして、腰の周圍を卷く事の行はれたに依つても知らるゝのである、暹羅の如きは、廣き布で腰を卷き、後ろより股間を潛らして殆んど股引やうに前に挾んで居る、最早今日では暹羅國の王室では、上部だけは洋式を取られますけれども、皇后陛下の御寫眞などを拜すると、矢張腰部より下は以前同樣である、又處によりては身躰の上部に袈裟やうのものを掛けて居るものもあり、又は廣い布の眞中に穴を穿けて纏うて居

る種族もある、之は台灣の南牡丹庄の土人が用うる晴衣の上衣腰卷とで、此方は(之も亦實物を示さる)樺太アイヌの用うる前掛と脚袢とであるが、何れも原料は内地等より輸入さるゝ物を原料として此く思ひ〳〵の意匠を凝して紋樣を縫ひつけてあるが、却々巧みなもので殊に此の前掛の如きは、チヨツト遠くから見れば、黒の布地に白絲で摸樣を縫ひつけたやうであるけれども、決して左樣では無い、黒い布を此く面倒にも細く縱横に切り拔て、それを白地の布に綴ぢつけたものである、

樺太アイヌの用うるシトキと云ふものがある、元來シトキとは鏡その他圓いものを一般に稱する語で、之は儀式の時に胸間に下げるので、實は鏡が正式であるけれども、それの無いものは刀の鍔や椀の蓋などを附けて居るものも見受けるのである、

之は(實物は帶皮に圓形の輪等を幾つか附けたるもの)樺太アイヌが葬式の時に帶るもので、且つ死者の棺中には必ず一個を入れて遣るものとなつて居

るので、中々大切なもので、此の皮は時として布を用うる事もあるが、その他の裝飾たる金具は、一切滿洲方面から輸入さるゝので、此の價格は幾何程のものであるやと尋ねしに、貂の皮三枚と交易したと答へたが、此の貂の皮は多く英國へ輸出せられ、裝飾品用として貴重な物で、一枚の時價凡そ金二十五圓乃至三十圓程するものであるから、如何に彼等が之を尊重して居るかゞ察せらるゝである、

以上陳述するが如く、或者は同一の部分に多少異なるとも裝飾を施し、或者は亦全く之を施さない者もあるけれども、通じて見來る時は、自らその間に普ねく通ずる所の理法のあるものである、即ち全く裝飾なしに居る者は無いのである、

或者の如きは身體の苦痛を耐へてまでも裝飾を施すのであるが、それは何が爲であるかと云ふに、其は全く習慣である、智識の低い時に比して稍進んだ者は、己れに取つて飾りにしたと云ふ念慮の爲には、單に眺めただけでは滿足が出來ないから、花なら一

枝を手折と云ふやうになるのである、その如く自身は勿論、その親連も苦痛を忍びてまでも世間一般の習慣に從はんが爲に裝飾を施すのである、併し智識の程度の低い時代は、その要求も甚だ幼稚で、單に自己の身邊に之を附する事が出來さへすれば、それで滿足を表するのである、けれども智識の進むに從つては、單に目に見るだけでは滿足しない、即ち心に映ずるものを以て樂しみとするやうになる、尚ほ一歩進んでは、單に自己の心に映ずるのみでなく、他の者にも之を見せて樂しましむると云ふやうになるのである、

　尚た自分の考が小さい時には社會との關係も淺いからして、他に向つて同情すると云うても、親が子に對し、夫が婦に對すると云ふ位であるけれども、之が發達して來ると、自己の樂みを以て他人を樂ましめ、又他人はその樂しみを以て彼等の多くを樂しましめ、彼等の多くは其を以て自己を樂しましむると云ふやうに即ち自他の樂しみが合體して來る、之は外形のみでは無い、心に感ずる事も同一である、併し其樂しみを合すると云つても、自己の樂しみが果して彼等をして悅ばしむるに足るや否と云ふ事は一の疑問で、又至難の事である、即ち或行爲、學問思想等を十分に示すと云ふことは、見る方の眼で如何に之を受取るか、豫じめ測り知る事は出來ないのであるが、兎に角其等の樂しみを獲且つ分たうとするに就ては必ず智識上の裝飾が起て來るのである、

　彼の鳥獸の類を見れば、雄は雌よりも奇麗に裝飾して居るから云々の說を爲すものもあるが、それは體格上男子の裝飾の變遷を見れば、思ひ半ばに過ぐるものゝある事なれば、そは諸姉の判斷に任せて、爰には男子は男子らしき働き其れ自身が裝飾となるが如く、女子も亦女子らしき働き裝飾の働きを爲さねばならぬと云ふ事を告げるのみで、敢て之を以て誡めとしやうの考では無い、多くの經驗より得たる正邪曲直の判斷を誤らぬやうに、作すべき事をなし、爲すべからざる事は作すなと云ふに過ぎぬのである、

季節の料理

霞袖女史

鯛なべ

通常の刺身の如く切りて用うるので、液汁は味淋と醤油の外に、鰹節のだしを加へて中淡とし、胡椒を少し振りかけ、菜と相良麩とをあしらふのである、相良麩は凡そ二分ほどの厚さに切るものとす、

蛸なべ

蛸は生のまゝにて薄く切り、之に焼豆腐とほうれんさうとをあしらふものであるが、又餅を短冊に打ちて共に煮るときは、頗る美味なるものである、

白魚なべ

白魚のあしらひには、青菜でも宜いが、三ツ葉なれば頗る妙である、又乾海鼠、半平、獨活などを入るれば更に妙なりとす、但し乾海鼠は、七八日以前より水に浸して置かなければ用に立たゝぬのであるから、之を忘れてはならぬ、

海泥鰌の天ぷら

ざんぼを片身づゝ卸して骨を拔き、チヨット鹽水をくゞらせ、又水氣を乾かす爲にザット炙り、それより衣をかけて揚げるものである、

烏賊の天ぷら

烏賊は先づゆがきて、賽の目又は平取に切り、庖丁目を少しづゝ入れ、衣をうすくかけて揚げるものである、

小鯛の天ぷら

新鮮なる小鯛を片身おろして、骨を拔き取り、薯蕷をおろして玉子を交ぜ合せ、その中に右の身を入れ、うすく衣をきせ、その上に別茶碗に拵らへたる上衣をかけて揚げるのであるが、この上衣は別に作り方の異なるのでは無い、たゞ玉子だけを少し薄くするのみである、

打ち烏賊の天ぷら

生の烏賊を庖丁にて極細かに打ち刻み、それに又他の魚のおろしたるを打ちまぜ、よく擂りたる後、

更に黒胡麻の擂りたるに玉子黄を入れ、よく交せ合せて適度に丸めて揚るのである、

鶯蕪菁の一夜漬

鹽押をしておけば、一夜で漬かるのです、之を根ともに一寸五分程に切り、煎酒をかけて食するのである、

あちやら漬

これは酒と酢と醤油とを等分に和して、鍋にてよく沸し、冷してのち、その中へ守口大根を薄く小口切に切りたるものを入れ、又は結び昆布、小梅、干金柑、獨活等の纎切にしたるものを適宜に入れて漬けるのである、

魚の麹漬

之は鯧、鯛、鰆、又は九孔螺など、何魚に限らぬのであるが、小魚は甚だ宜しくない、まづ魚の骨を去りて克き程の切身とし、麹を醤油にてびた〳〵に溶き、その中へ右の魚を漬けおき、木の蓋を用ゐないで、紙を張りて蓋とするのである、是は乃ち麹と云ふものは湧き易いからである、その漬けおく日限は二日間が限度である、それより以上は客には用ゐられぬ、但し用法は麹を落してはならぬ、

鷄卵飯

玉子飯の炊きやうは、飯を常の如く仕立て、生玉子に味淋、砂糖、鹽を入れて、よくまぜ、之を薄く焼き、之を刻みて飯の中に交せ入れるのである、尤も清汁は淡いのが宜い、

豆腐飯

之は豆腐を賽の目に切り、よくゆでてあげておき、飯を常の如くに炊き、椀に飯を盛り、その上に豆腐を置き、清汁をかけて出すのであるが、又は葛餡をかけ、或は生姜柚子等を擂り添ふるも妙なり、

針嘴魚の細づくり

針嘴魚を片身づゝおろして、骨を去り、皮を剝き、之を饂飩の如く竪に細く切り、その背の身の厚き所は二つに割き、而して此細き身を揃へて、之を横に二つ切りにし、之に酢と醤油との二杯酢をかけるの

である、おしらひは獨活を適當とする、

赤貝の敷味噌

赤貝を霜降りにし、皿に先づ摺味噌を敷き、その上に赤貝を入れ、赤貝の上に纎打ちの獨活を載せるのである、霜降りと云ふのは、赤貝を茹でずに、チョット煮え湯をくゞらせしを云ふのです、摺味噌の仕方は、味噌の中へ砂糖と芥子とを入れ、摺鉢にてよく摺るのである、

若芽と纎切大根の三杯酢

二品とも水で洗ひ、纎切大根は短きものゆゑ其儘、若目は細かに切り、而して之を酢と醤油とに少し砂糖を加へたる中に入れて掻きまぜるのである、凡て酢と醤油と味淋とを和したものを三杯酢と云ふのである、尤も酢と鹽と砂糖とを和したるものも三杯酢と稱ふるのである、

鹽鮭の生酢

鹽鮭をそのまゝ細かに切り、味淋をかけて茶漬の菜とするのであるが、又一種の仕方は、之を三分ほ

どの薄さに切りて燒き、之に橙酢をかけて食するのであるが、是は鹽鮭の料理の中で最も佳味なるものである、

けんちん鯛

大鯛の鱗を去り、背開きにし、骨を拔き取り、腹を割り、腸を奇麗に出し、そこへ、豆腐をよく味淋と醤油にて煎り、銀杏、木耳などを味淋煮となし、白味噌を味淋醤油にて緩く溶きたるを、右の品と共に鯛の腹に入れ、上より布にて腹を一枚かるく結び、蒸籠にて蒸し、のち味淋醤油に鰹節の煮汁にて煮つけ、掛汁として、之に添へて出すのである、

白魚と木耳の紅梅煮

木耳は暫時水に浸しおき、而して之を白魚と共に煮るのである、その煮方は、酒三分に醤油七分の割合で、鹹く煮るのである、但し砂糖を少し入れることを忘れてはならぬ、紅梅煮とは、即ち鹹く煮て、その色が赤くなる所より名けたものであるが、餘り鹹くしてはならぬ、



私は自分の職務が職務だけに、理窟ツポイ學生に向つて話をして居ります、或は其他廣い荒ツポイ事を、男子の前では隨分話しもして居ますが、御婦人方の會に出ましたのは今日が始めてである、元來さういふ譯でありますから、私の身體が御婦人方の前で話をする身體で無いといふ御斷りをいたしました、而も又私がお話するのは、寧乃御氣に入つた話よりも

御小言を申した方が

眞面目な話

宜からうと思つて、一般に御婦人方の少し御小言を述べたいと思つたのである、デ私の話はであるから、鳩山夫人の後位に御話を申した方が宜かつたであらう、殊に最早餘興は濟んで仕舞つた後、

結構な事をお聽になつた後に、今後は餘り難有くありますまいと思ふ、所が、別段小言といふ程ではありませぬ、近頃婦人社會で、色々公共事業に働きます、是は誠に結構な事であつて、極めて上流の人であつて、財産には餘りあり、閑暇がある多くの人が働かれて、尤も上流といふ人であつたならば、是が

從來の娯樂

といへば、僅に芝居であるとか、或は着物三昧であるとか、色々な事に心を盡して居る人が、

一般の公共の事

に盡力をされるといふ事は、非常に結構な事である、所が、是は私共、まづ皮想の上では上流と考へて居るけれども、生活の程度に於ては、最上流の地位では決して無いのである、まづ上流の最下か、中位の私共の生活である、その生活の一家の主婦たる人には、誠に隨分

御迷惑なこと

であらう、又隨分宜しく無い點がありはしないか、と云ふ事を私は感じて居るのである、嘗て私は「女鑑」の上にも少し述べたことがある、その點は一般の婦人に、少し小言を云ひたいといふ考へであつたのである、元來この婦人といふものは、廣く云ひましたならば、必ずしも

一家の内事ばかり

をする者でないかも知れぬ、併し一般に言ひましたならば、婦人がまづ

内事を主とする

のであつて、男子は外に出て働く、之がまづ一般と云つて宜しいやうである、併し是は

一概に言はれない

グツト上流、極最上の人か、極々下流の人になつて來ると、或は反對な事がある、極上流と云ふと、如何いふ事を言ふかと言ふと、世界には

女皇とか女帝とか

いふ人がある、是は外面に當つて國家の仕事をされる、政事をされるのである、今日に於ても、近頃まで英吉利のヴイクトリア女皇のやうな人があつた、今日でも支那の西太后のやうな人がある、斯ういふ人はグツト上流の人であるが、又極端に下等の事を見るならば、遊んで眠て居る、朝鮮人の男子の如く寢て居つて、さうして

女が働く

尤も開けない處では、婦人が重に働いて、男は碌に仕事をしないといふやうな所が、今日でも隨分あるやうである、我國に於ても、最も開けぬ所にはある、殊に農家で、而も婦人の多い所で、男子の少ない所では、寧ろ男子が婦人に食はして貰つて居るやうな有様がある、また近く云ひましたならば、東京に於ても色々の賤業社會に於ては婦人が働いて居る、老爺は寧ろ之に食はして貰つて居る、その代り權力も無いのである、よく昔の話であると、天保錢一枚もらつて寄席にやつて貰ふといふ話もあつたが、今日では天保一枚では行けまいから、五十錢銀貨一枚貰つて行くといふやうな事があるらしい、是は餘程下の話、苟く

も中流である以上は
男が外の事をして
女が内の事をする
といふのが、是が今日の
一般の規則となつて
居ると、私は考へるのである、併しながら、必ずしも昔の如く支那流に、婦人は全く外に出さぬ、外の男子には顔を合せぬ、而も内房に押込んで置くとかいふやうな、さういふ古い事を云ふのでは無いが、家の内に於ては、婦人が最も働かなければならぬものであつて、外に出て働く暇は殆んど無いと私は考へるのである、それは何故かといふと、一家の中には、非常なる
女の責任
といふものがある、殆んど全力を盡しても、終生の業としても、苟も一家の主婦となつた以上は、それでも日も亦足らずといふ程、仕事が多いのである、所が、世の中の御婦人方は、誠にどうも
暇閑な御方と見えて
能く世間の方々に走り廻つて居る御方があるやうに思ひますが、是がどうして出來るかといふ事を、私は
寧ろ不思議

に考へる、是は私共が自分の生活程度を立場として、此社會の程度を考へるから、さういふものであつて、皆さんの中から、さういふものでは無いといふ御反對も出るかも知れぬが、私は其邊も如何なものであらうか、果してそれ以上の生活をなさる御方、それ以上の教育を受けて居らるゝ人であつて、果して其一家に於ける所の責任を盡して居らるゝや否やといふ事を甚だ疑ふのである尤も先づ上流といふ所であつて、彼の富豪なる貴族（貴族にも貧乏がある）それから富豪なる者、斯ういふ所であつたならば、その方は金の點に於ては不自由がない、そこで着物を着飾つて見ても、また閑がある、さういふ所から色々な事に盡力なされる、また或は立派な着物を着らるゝといふと、内に引込んで居るのも勿體ないやうなもので、出なければならぬやうな必要も、自然出るかも知れぬ



兎角に外に出歩かれるやうである、是は公共の事に御盡しなさるのは結構であるが、そこで内はどうであるか、その内に於ては、婦人の務といふものは幾らでもありませう、恰も家は一つの國家と同樣である、國家の中には色々な仕事があると同じことで、家は家で小い事から判斷をしなければならぬ、例へば、國家の上には、何所の國でも十省とか十二省とかあつて、それ〳〵分擔して仕事をして居るやうなことを、一家では主婦たる者がしなければならぬ、或は自ら手を下さなければならぬ、又自ら手を下さぬならば、それを整理して行かなければならぬ、家の内に於ては、

非常なる權力

がある、また

充分なる責任

を持たなければならぬ、その權力を振ひ、それから責任を盡すといふことに、始終頭を費すことは非常なるものである、手短い事を云つたならば、

一家の經濟

といふやうな事もありませうが、就中私の言ひたいのは

衞生のこと

是は先刻岡田君が仰しやられたが、之も時間の制限の爲に、十分御盡しにならなかつたやうであるが、さういふ點が幾らもありませう、それから就中、是は先刻鳩山夫人が仰やつた、

子女の教育

といふ事である、子女の教育といふものは、誰が任ずるかといふと、即ち是は一家の主婦の責任であつて、大體の責任は男子が定めるであらう、併ながらそれを總て實行する者は誰であるかといふと婦人である、即ち子女の教育に關する細かな事は主婦が任じなければならぬ、例へば、子女が學校から歸つて、靜かに書齋で本を讀んで居るに付けても、あれは勉強して居るのであるから宜いといふやうに打ちやつて置いてはならぬ、或は爲にならないやうな物を讀みはしないか、如何であらうと注意するのみでは無い、若しその子女が、まだ初歩の學校へ行くものであつたならば、餘り多く温習させぬが宜い、往々世間では、學校に於ける子女の成績が良くて、他人より譽めらるゝのを喜んで、その子女の身體に碍ることも何も關はずに温習を强ゆる者がある、是は大いに心得違である、それが爲に子女は非常に腦を遣ふから、自然成人の後、身體が虛弱に陷るのである、

故に幼少の中に、精一杯はりきらして勉强させるといふ事は良くない、まだそれから中學および高等學校、進んでは大學にも入れて修業させなければならぬのである、よしんば後々高等學校や大學等へ入れないまでも、餘り小さい時分に勉強を强ひない方が良い、併し其邊の注意は主婦の任である、次は

科外の讀書

すなはち學校に於て授けらるゝ學科の外の本を讀むといふ事であるが、是は自ら二樣の別があるので、一は後來その子女を高等の學校へ入れないものは、多少その補ひとして、爲になる所の本を讀ませるが宜い、けれども之とても餘り强ては良かぬ、他の一つは將來その子女を高等の學校へ進ませる目的を有つて居る

方面からいふのであるが、若しも其子女が科外の讀書を爲す場合には、主婦たる者が、その**籍の撰擇書、**をしなければならぬ、兎角子女たちは、よく當時流行の小說などを讀みたがるものであるが、是も私は**絕對に反對はしない**同じ小說でも、それを讀んで社會の狀態、就中、社會に於て將來仕事をするに要するやうな事を書いたものは讀ませるも宜しい、けれども彼の所謂戀愛小說などいふもの、或は作者の假想に出でたる怪げなる小說などは、未だ頭の固まらない靑年の子女が、之を讀んで、或は實行せらるゝものかのやうな感想を惹起して間違を生ずる基となるから、それらは斷じて讀ませないやうにしなければならぬ、併し相當の年配になつたならば讀ませるも宜い、若しも餘り片寄つて**知らせない主義**ばかりを取つて居ては、その子女が社會に出る時になつて、**餘り初心過ぎ**て社會の用を爲さないやうでも困るから讀ませるも可いが、一體小說の種類も**靑年と老年**とでは、自ら讀むものを異にせねばならぬのである、所謂戀愛小說なるものは、世故を經たる老年の者が讀

むには差支へのないものである、けれども未だ年所を經ない頭の固まらない青年の子女などが之を讀むよ害こそあれ毫も益は無い、何故なれば、多く青年の子女は

小說に讀まれて

しまふからである、且つ青年の中は、兎角思想が極端から極端に向つて走るものであるから、是また主婦たる者が常に注意を拂ふと同時に、懇ろに子女に向つて反省を促さなければならぬ一要件である、

また主婦たる者は、子女の

觀察力を養成

する事を怠つてはならぬ、此の觀察力は單に自己のみでは無い、また他の方面を觀察させなければならぬ、即ち眼に見、耳に聞く事に於て之が養成に努めねばならぬといふのは、凡て其結果が子女の

智識を增進

せしむる根底となるものである、併ながら之を爲すにも、決して

他動的詰込主義

そしては可かぬ、凡て自動的に之を導かねばならぬのである、而して又人間には

夫々の責任ある事を自覺

さして、凡ての事は自分で行る、決して他人の世話厄介にならぬといふやうに誘なはねばならぬ、例へば、

學校へ行くにしても、自分の學校用具は自分で始末をするといふやうに習慣を附けるのである、夫から敎育の中で體育といふ方は、是は衞生といふ方に關係して、其方も最も大切な事であるが、

殊に德育といふ點

からして、有益なる國民になるといふ迄にやつて行くのである、女子ならば女子の如く、また立派な所謂

賢妻良母になる

まで導いて行くといふこと、男子であつたならば、何か役に立つ者に仕上げやうといふならば、どの位骨が折れるか知れぬ、小い中から時々刻々に之に頭を注いで行かなければならぬ、また少し大きくなれば年頃に由り、その敎育の進む程度に由り、又一方から云へば、四季の時候の變り目に依るとか、或は世の中の其時の風潮とか、さういふ事に由り、それから小兒の成長する時には、始終思想が變化するから、その思想の變化といふものに十分注意をして行かなければならぬ、さういふ事を注意して

立派なる人間

を拵へやうといふには、殆んど一人の子供を育てるに付けても、母親といふ者は殆んど一日も忘るゝといふ事は出來ない、半日も忘ることは出來ない、もつと極端に云つたならば、二時間も三時間も容易に忘れられない、尙ほ親切に云へば、主婦たる者は、始終朝から晩まで、晩から朝まで寢ても覺めても、

子女の心に通じて

居なければならぬのである、

小兒が學校に行つて居る間、僅に先生に託してあるが、その出る時又は歸る時の擧動を見なければならぬ、又夜になつても、此頃の擧動はどういふ風になつて居るかといふことに注意しなければならぬ、さうして良い方に向けて行かなければならぬ、所が極く富裕な人であつたならば、往々家庭教師といふ者を置かれる、斯の家庭教師といふものを己の代りに使つて、さうして子女の教育をさせるやうである、先づ家庭教師は重に女子である（女子とは限らぬけれども）小い中から育て丶行くから女子が澤山ある、之に依つて十分行けると考へられて居る、所が、此家庭教師といふものが甚だ充分でない



是は十分でない譯があるのである、今まで家庭教師といふやうな事は、十分日本に行なはれなかつた、昔から必ず無いには限らぬ、男子の立派な家庭教師といふものがあつたのであるけれども、兎に角今まで立派な者が無かつた、所で、今家庭教師になるといふ人は、過度時代であるからして、矢張々若い人でなけ

れはならぬ、所が、若い人で家庭教師なれば、

立派な資格のある人

はどの位あらうか、家庭教師といふ者は、

餘程大切なもの

である、親が始終子女の教育に熱心に掛つて居ても、なか〳〵容易に行けないものである、況んや、他人に頼んで之を導いて行くといふのであるから、なか〳〵容易な事で無い、それで餘程是は經驗した上、立派な人を撰ばなければならぬのである、所が、如何にせん今日では、若い人にそれを望まなければならぬ、而も若い人は、立派に外の公の學校の教員とか、さういふ事で獨り立つて行ける人は、寧ろ家庭教師に入らない、多くは普通一般の學校には、

餘り向の悪いといふ人

まづ家庭教師にでも這入つた方が宜からうといふので這入るやうに見えるのである（悉くとは申しませぬが）まづ二の次の人が家庭教師に這入るやうである、それでどうして

教育が出來やうか

又何故に良い人が行かぬかといふに、是は扱ひが違ふ、子女の教育に重きを措かないで、親が甚だ此點に向つては冷淡である結果として

家庭教師は先づ守り子

で宜い位に考へて居る、さういふ工合にまるで雇人、普通の女中を取扱ふやうな考を持つて居るから、どうしても立派な人は行かぬ、若しも眞に己の大事の子女を之に託すると思つたならば、

自分が尊敬すべき人

を以て之に任じなければならぬ、その家庭敎師の力といふものは、特り子女に及ぶばかりで無く、其家の敎育として、親達までも自然と家庭敎師に化せられて良くなるといふやうな、立派な人物を選ばなければならぬのである、所がさういふ人はなか〳〵容易に得られない、又今日の取扱では行かぬのである、さういふ事であるから、假令、金が餘りあつて人を傭入れるとした所で、今日傭つてある所の家庭敎師といふものは、決して餘り立派な者では無いのである、その立派でも無い者に吾子女を託して、己は他の事をしてまるで、知らぬとして、それで濟むものであるか、私は立派な家庭敎師のあるといふ事は餘り聞かぬ、私は所謂眞の家庭敎師といふ者を持つて居る所は餘り多く耳にせぬ位である、が、是は斯ういふ性質の者で無ければならぬ、是は西洋などで經驗の結果として、家庭敎師といふ者は、多く年を取つた者で、

女子ならば四十格好

から五十乃至六十歳といふ位の人で、さうして詰り一家の中で父母が非常に尊敬を表して、小兒もそれに從つて尊敬するやうになる、所が、今日は傭ひ人のやうな考へ、只女中の少し上等な者で、僅にさんづけをされる位な所になつて居るから、そこで甚だ立派な人は行かない、さうしてどうかといふと、その位の資格の低い人であるから、自分の意見を十分行ふことが出來ない、若しも行ふといふと、一方に父母の氣に入らぬ、

さうすると飯があがる

一方は子女の氣に入らぬと、その方に容れられぬ、互に兩方に持つて行つて、好い加減なことを言ふやうなもので、

其責任を全うして居らない

殊に小さい子女を育てる時に、是は今の家庭教師にあるべき事でないが、往々守つ子位に見ることであるが、小兒の時に大事な氣象といふことを仕込まなければならぬ責任といふ事をチットモ知らない、今日皆さん方の如き教育ある御方は、さういふ事は爲さるまいが、私は屢々見ることである、小さい小兒がヒヨロ〳〵歩いて居て、ツイ轉んで頭を打つて泣く、さうすると云ふと、泣いて居る所に行つて、石なり柱なりをブン擲つて見せる、是が惡い極く惡い、

怪しからぬことです

僅なことであるが、此位怪しからぬことは無い、石や柱は固より動かないもの、それに此方がブツつかつたのが、惡い、石や柱は自ら動くことは無い、さういふ事が、人間の責任を知らせない初めでなる、一般にさういふ事をやつて居るでせう、そればかりでは無い、まだ幾らも斯ういふ事がある、

ソコデ今日男子にしろ又は女子にしろ、教育を親からさせるといふ事を以て、是は親からさせるのだから

己が受けてやつて居る

若し受けてやらねば親が困るから、親の爲に受けてやるといふやうな無責任な考が出て來る、寧ろ自

の考といふものが附かぬから、さういふ事が一般に浸みこむ、是等のことは

根本からの間違ひである

女子では餘り荒ッポイ事は出來ぬけれども、世間には隨分荒ッポイ歩きやうをして居る女子があるが、男の子などはイタヅラを爲るが宜い、イタヅラと云つても惡いイタヅラ、性質の惡い、イタヅラをしてはならぬ、が、暴れ廻つて無邪氣なる暴れ方なら、どんな事をしても宜い、竹ッ切を擲げても宜い、眼ぐらゐ一つ怪我をしても宜い、さうすると、再び斯ういふ事をしてはならぬといふことに氣が附くから宜い、傷が出來ぬ位なイタヅラをして、轉べば頭を擦りむくとか、頭を打つとか、高い所からドッカり墜ちる、落ちても死んで仕舞はなければ宜い位にして、

責任を重んじさせ

なければならぬのである、此事は前にも少し述べましたやうに、凡て斯ういふ風に自覺させなければ可かぬ、假令 來は宜かつたにしても、最早今日は新な日本に此新國民が出來るといふ爲には、矢張り

教育の根本の氣合

が逸つて來なければならぬのである、その大事な時期であるからして、殊に今日に於ては猶更のことである、何れの時期といつても、此教育を疎かにして宜い時は無いのであるけれども、殊に今日の時節に於ては、之が非常に大切なことである、それ故に、其點から云つても（種々な點もありますけれども）此一家の主婦といふものになつた以上は、どうしても

餘所の事は行れぬ

のである、私が殊に主婦と云つたのは其所である、それは主婦で無い人、女の中でも獨立して自分がやつていかう、まるで一家といふものを有たないで、獨立して遣つて行かうといふ者は、是は別である、女がそれで立てるか、それが得策であるかどうかは別問題であるが、既に一家を成して居る所の夫婦で、家を有つて居つた時期を過して、所謂今日では彼の隱居的になる、自分の小兒が妻を有つて一家を成すと、自分は一つの主婦たる所から去つて仕舞つたといふやうな人は格別であるが、それが女で全く獨立して居るか、例を出すのも可笑しいが、下田歌子女史のやうな人は、自分でやつて居るのであるから、是は一家の主人であつて、私の主婦といふ者は

家を有つて夫婦を成し

子供があるといふ所の意味である、

それから又お婆アさんで奥村五百子のやうな者は、さういふ人は別に大いに働いて貰ひたいが、中流の婦人方で、外で働きたがつて、さうして

大事な職務を忘れ

はしないかと云ふことを、私は考へるのである、

所が、一體人間には、男子でもある事であるが、兎角利慾といふ事を欲しがる、さういふのが普通の性である、併しそればかりで足りる者は、どちらかといふと未だ人間の

動物性を離れぬ

もので、所謂下等な動物と云はなければならぬ、所が、婦人には殊にある、能く謂ふ虚榮心といふものがあつて、人より上にたちたい、少くも人と同じやうになりたい、尙ほ上に行かなければ承知しない、それは人間として立派な者になるならば、それは結構であるが、さうで無い、社會上の地位に於て必ず人の上に立たなければならぬ、人が綺麗な着物を着る、少し綺麗なリボンでも着けると、その通りにしないと肩が狹まるやうな考になる、さういふ考は就中女子に多いのである、ソコデ社會に何かして働いて居れば



幅がきける

あの人が幹事になつた、支部長になつた、自分もさうならねといふと、自分の名譽が下るやうな心持がして、矢張り其所に出て行つてやらない、斯ういふ考があるのである。それが爲ではあるまい（マー私はさう解釋するが）それが爲では無い、公共の仕事をしなければならぬといふ、誠意誠心であるかも知れないけれども、それは或事柄に依つては、婦人で無ければ出來ない事もあるから、勿論働くなとは云はれないが、それには最早一家の役目を終つた所の老人――今日は老人は出來ないから、止むを得ず若い人が出て行くが、間もなく教育を受けた人が、社會に立つて宜いやうな人が大分出て來たのである、鳩山夫人などは、婦人としては最高の教育を受けて居らるゝが、最早子供には立派な法學士も一人出來て居るし、又明年あたりは法學士になるやうな人があるといふ譯で、間もなく孫も生まれるやうな譯、まだ主人公が御座るから、其方に努めなければならぬが、例へば、主人公が居ないといふ時は、社會に出て働かねばならぬ譯になる、さういふ譯であるから、無いことはないが、多少行らなければならぬが、まだ出來ない地位でありますから、殊更にそれを務めらるゝやうである、

然らば社會に務めるといふ事をしないで、我家の事に務めるといふことで濟むかといふ御考が出るかといふと、我家に務めるといふ事が、やがて私は社會に務めるといふ職務であらうと思ふ、即ち

一家を立派にして子女の教育

をするといふのは、その中には男の子もあり、また女の子もあり、それが立派な者になつて行けば、僅か自分の一生ではない、社會がズット進んで行くのであるから、自分は立派な者になつて――初めは若い時代に

自分がまづ立派になる

さう初めは考へなければならぬ、併し既に結婚でもしたならば、己れが立派な者になるよりも

其夫を立派な者にする

といふのが一つの務である、所謂賢妻である、次に小兒を産んだならば、

其小兒を立派にする

といふのが務である、さういふ所から、是非とも己れが立派な者にならなければならぬといふのが、それが私の謂ふ虚榮心であらうと思ふ、故にさういふ點は今日最も愼しまなければならぬし、殊に今日の新たなる社會、所謂新日本と稱へて居る所の今日の社會に於ては餘程愼しまなければならぬ、餘程考へなければならぬことであつて、幸に今日生れて居る所の人は、過度時代である爲に苦しいやうなものであるけれども、其新たなる國民の社會を拵へて居る所の母である、即ち大事な國家の元である所の一家の主婦であるから、その主婦の責任を誤らぬやうにし、誤らぬ所ではない、之に對する

模範的のもの

を今日の社會に造り立てゝ行かなければならぬだらうと思ふ、

之に就ては緩ツくり色々御話したいと思ひましたけれども、大變時刻が遲れましたから、大體考へた所の主意だけを荒ツポク申上げた丈でありました、御耳觸りであつたかも知れぬが、主意は斯ういふ主意であります、これで御免を蒙ります(拍手)

御題「社頭松」

御製　常磐なる松こそ立てれ動きなき國を鎮めの神のやしろに

皇后宮御歌　榮えゆく齋墻の松に見ゆるかな御國をまもる神のこゝろも

東宮御歌　男山みさをゝ更へぬ若まつのすゑたのもしき君が御代かな

東宮妃御歌　松風も神のこゝろに靡きつゝ枝を鳴らさぬ御代まもるらむ

侯爵　德大寺實則
斎かれし神や植ゑけむ廣前を
　蔽ひて立てる松の一木は

田中光顯
大君の御代長かれと御注連縄
　かけてぞいのる神垣の松

伯爵　東久世通禧
かくてこそ五百代も千代も茂るらめ
　神の御前の松のむらだち

御歌所長　高崎正風
限りなく生添ふ松を男山
　神ぞ守るらむ我君のため

伯爵　大原重朝
皇神の宮居に生ふる若松は
　我大御代とともに榮えむ

侍從　西三條實義
何時の代に根ざし初けむ千木よりも
　高くそびゆる松のむらだち

掌典　大宮以季
神垣に年經る松はおのづから
　陰もゆたかに見えにけるかな

掌典　持明院基哲
勝軍いはひて植ゑし神垣の
　松は千歳をかけて榮えむ

掌典　入江爲守
風吹けばおのづからなる神樂丘
　吉田の宮の松そゆかしき

掌典　金子有卿
御手植の松に行幸の迹見えて
　ひかり彌ます神の玉垣

侍從　萩原員雄
廣前の鏡の影の清くなり
　音せぬ風や松に吹くらむ

掌典　長谷信道
年も今日あけの玉垣注連延へて
　緑も深く見ゆる松かな

○　高島千畝
廣前にたち榮えたる若松の
　千代の影汲む御手洗の水

○　德大寺いそ子
瑞籬の松吹きわたる朝風は
　神の御聲のこゝちこそすれ

○　大町駐
廣前に杖許されし老松は
　神に仕へて幾代經ぬらむ

○　奥田大和
神路山年籠りして大前の
　松に朝日を仰ぎつるかな

○　木村忠彦
狛犬も苔蒸しにけり千代を經し
　神の齋垣の松のしづくに

○　鷲尾とみ子
千早振神の廣前長閑にて
　鶴も遊べり松の木蔭に

あら玉の年の朝日を仰くかな賢所の松の梢に　威仁親王



佐々木信綱先生選

春の海

天

春の海みなみの島につかさつく
　若きいもせは船出するかな
　　　　美濃　杉山藤枝子

（評）いもせの上にとこしへの春の日させとこそ

地

荒獅子の聖者のひざに眠るごと
　靜けくなぎぬ春の海原
　　　　岩代　岸野菊子

（評）おだしくおごそかなる春の海をよくうたひ出られたり

人

新らしき船は港をゆるぎ出ぬ
　小波匂ふ春の海原
　　　　岩代　菅野和子

（評）萬歳の聲遠く波間にひゞくへし

秀逸

うろくつにあないせられて龍の宮
　見んとこそ思へ春の海原
　　　　常陸　岡田萬子

遠かすみ柵ひくひまゆ持ちわひし
　白帆見出てぬ大和田の原
　　　　神戸　井口その子

三才の船装ひて春の海
　八十島かけて漕ぎ出てまくも
　　　　神戸　那美子

櫻貝拾ふ手止めて磯の子は
　霞に浮ぶ鯨舟見る
　　　　神奈川　山本久代子

美濃　南みね子

去年の秋沈みし舟の帆柱の
　春の夕日に鷗ねむりぬ

美濃　杉山静子

長閑なる春の海行くわが艦の
　舳先に浪の花も咲くかな

美濃　一條桃代

白鳥のまひまふ様は蝶に似て
　野へさながらの春の海哉

東京　秋田登志子

美しの小貝拾ひて春の日を
　海に語りし人のこひしき

須磨　石原綾子

鶯のなく音きゝつゝ磯枴の
　嶺ゆのとけき須磨の海見る

美濃　早川ひさ子

のとかなる春の日なれはくるしさも
　しらてすきにし播磨洋かな

名古屋　中村浪子

紫の夕雲西にたなひきて
　春の海原浪にはえある

美濃　吉野花子

かへる舟ゆく舟春の日影浴ひて
　海白うひかる帆のうつりかな

廣島　鈴森きみ子

ほの〴〵と遠き磯より夜はあけて
　白帆なかるゝ春ののどけさ

秋田　古瀬りく子

あをもりのみなとをさして北海の
　おきにきはしき初にしんふね

秋田　古瀬惟子

山せかせ唄ふふなこのこえもして
　おきのとかなる春のうなはら

甲

○ 越後 水野やすゑ子
眞帆片帆霞に消えて濱の上に眠るかもめの夢しづかなり
○ 越後 岩木芳子
うす月に舟まつ春の夜のかげや小蟹こひよる礒かゝりかな
○ 越後 峯松子
さゝえとる海士はへさきに眠りつゝ船もゆるがぬ春の海かな
○ 茨城 金澤すゑ子
うちかすみ舟路のどかに白帆はりてかへるみ船に我が父やのる
○ 下總 中川千鶴子
春霞棚引く沖に眞帆片帆世をうみ人のたつきともなし
○ 東京 原三幸子
かもめなく聲はきこえて夕なぎのかすみをくらし春の海原
○ 東京 西村直子
さくら貝ひろふ汐干の沖とほくかすみわたれるはるのうなばら
○ 東京 田代糸子
くじらよる旅のゝ海の汐けふりなみもひとつにかすむ春かな
○ 東京 奈良八重子
紫の雲はうすれて清見潟みちしほたかく初日影榮ゆ
○ 埼玉 横田やな子
舟の帆に朝東風みえてむさしの海羽根田の沖に春は來にけり
○ 埼玉 横田秋子
竹芝や大井品川おしこめて霞につゞく春の海つら
○ 岐阜 歌川清子
なよやかに春の風吹く瀬戸の海白帆のどかに列び行くかな
○ 岐阜 山田はぎ子
ちぬの海百千白帆の初荷つみて出で立つ初春の風ふく
○ 岐阜 後藤英子

折々は鯨うかひぬ風なぎしのどけき春の大海原に
○ 東京 高宮安子
八重のくま濱なだらかに年たちて霞たゞよふ海の面かな
○ 大和 栗山とし子
外國にわたるもやすき心地せりなみしづかなる春の海はら
○ 奈良 栗山たか子
霞立つゆらのみなとによりつとふしらほのとけき春のあけぼの
○ 下野 井上貞子
濱しづか潮の音ゆるき海原の白帆かすみぬかもめむれとふ
○ 東京 今泉礒千島
眞帆片帆黄金の征矢に紅うして波上靜けき春の海かな
○ 神奈川 服部八□子
島陰にかたむく春を眞帆はりて船一つ出でゐまた一つ出でぬ
○ 東京 山本いし子
春の日や眠れる如き海原を帆上げて歸る眞珠船哉
○ 神奈川 中筋廣子
春のうみのながめのどけく黒ふれのつゝの烟もますくぞに立つ
○ 大阪 木村春江子
うちよする濱の花咲くちぬの海春のみ神やいまわたるらむ
○ 横須賀 渡邊比佐子
水散りて春の日低き松島の島をぬひ行く舟唄の聲
○ 四須磨 有村紫子
神かぜも納まる御代の伊勢の海はつにつみくる船もありけり
○ 四須磨 有村とみ子
いとたれて魚つる人もまじりけり心のとけきはるの海面
○ 千葉 金子智子
春なぎに佐渡へと渡るあて人の船かすみ行く越の海哉
○ 千葉 金子みさを子
島山の鐘うつ寺もほの見えて月夜うれしき春の海原

○ 美濃 静波春海子

鷗まふ影もひたりてのとかなる春の海原白帆むれ行く

○ 愛知 荒木都美子

うら／＼と明けゆく春の海静か我身も魂もかくよと呼びぬ

○ 名古屋 中村千代子

玄海の荒海原も春たちて波のたえまを船れむりゆく

○ 美濃 石原たつゑ子

よせ来ては汀につなぐ小舟との艶美くしき春の潮や

○ 美濃 杉山末野子

眞帆片帆蝶と見えて伊勢の海ゆめさながらよ春の曙

○ 東京 松村登志子

横須賀の港につどふいくさ艦みはたの風に春そしらるゝ

○ 近江 石王かず子

あたゝかき風をはらみし白き帆はなに渉むらん春の海原

○ 東京 中村千代子

我背子の船よいつこと尋ぬれど霞みて見えぬ春の海原

○ 美濃 桃井萩子

うごかぬに似たる白帆のいつとなく島かくれ行く春の海かな

○ 美濃 小坂いく子

朝の海潮の香こむる伊豆の島霞の中に見え隠れする

○ 土佐 秋月廣江子

日の御子のみ艦堂々波きりて進ますかげや大海の春

○ 神戸 足立ゑい子

みるめかる海士の小船も見えぬまでかすみ渡れる春の海原

○ 神戸 足立あさ子

さゝ波の三保の入江に打よせて春かぜわたる羽衣の松

○ 伊賀 佐々木いすゞ子

霧ふかく氷山ながれ春の日のオコツクの海物すごきかな

○ 名古屋 山根しげ子

波路行く君が心はとこしえに春の風にておくりてしかな

○ 旭川 佐藤央子

なよ／＼とふく春風にとまあけてながめもひろきふな住居かな

○ 長野 北澤千枝子

眞帆片帆風のまに／＼帆ながへて舟歌のどかに春の沖ゆく

○ 岩代 岸野せい子

春の色ながるゝ海のあさあけや君すむ島はうすがすみして

○ 福岡 みし子

春の海ひれもすなぎて海人がたくけぶり長閑にかすみたなびく

○ 横須賀 高橋つれ子

春の海よせては返す波もなし沖の白帆なかもめとや見ん

○ 兵庫 吉東静子

舟人のこぎ行くかげもうち見えて波しづかなり春の内海

○ 青森 川合りく子

霞とまがふばかりに舟うたののどかにきこゆ春の海面

○ 岩代 菅野とわ子

春風を帆にうけて走る大舟の行へは廣し空や海なる

○ 山口 村上操子

吹風もなみも見えざる春の海になとかすみのみ立わたるらん

○ 松山 上原のぶ子

たつなみも見えてのどけき春の海のおもてを人の心ともがな

○ 松山 田村多豆子

片帆まほたゆたに見えて春の海は船のゆくへも長閑かりけり

乙

○ 讃岐 松田綾子

春の日はあけそめにけりほの／＼と波間しづけくわたる舟かな

○ 越後 松永紫子

鯨かる船漁拾艘頭ひて霞立つ海いとゞのどけき

○東京　佐々木霧子
伊勢の海濱もしづかに百舟の渡り賑き春は來にけり
○長野　北澤清子
遠淺に何か漁るむしろ帆をはらましたりや春風の來て
○東京　堤いく子
花見衣しばしを更へて汐干狩春風寒き品川の海
○福島　深谷けい子
そらとほく春の海原かすみして八洲の外までなみ靜かなり
○磐城　木幡きよ子
舟の歳童ぬ思ひも明け暮てやすくよ渡る春の海原
○磐城　木幡きよ子
眞帆片帆風のまに〳〵帆をかへて舟歌のどかに春の沖ゆく
○茨城　富田とみ子
思ひわび戀の汐路を行く舟にほの〴〵かすむ浦の朝なぎ
○東京　松本まつ子
うづたかうつみてよりくるもゝ舟もかすみにやたつ品川のうら
○東京　河合清子
みくま野の浦の春風なほさえてくじらよるらむきそふふなびと
○東京　小島榮子
夕なぎにかもめはれぎるおとはしてかすみ榮たる春のうなはら
○東京　吉岡鶴子
春の浦にのりとる人のこゑはしてかすみこめたるゆふなぎのはら
○東京　高野元子
ゆく舟の楫はきこえておふみのはみるめもわかずかすむはるかな
○東京　金子逸子
こぎ出しまほもしらほもわかぬまでかすみこめたる春のうな原
○美濃　傍島みゆき子
貝ひろふ少女のむれのぬぎおきしこま下駄ちがく春のあみちぬ
○和歌山　植木業子

片男波春の汐路を見わたせばかすみに浮ぶ沖のつり舟
○佐賀　藤松りか子
舟うたの聲をのこしてしまもせもかすみはてけり春の海はら
○相模　杉義登代子
曉の海原見えて遙なる海士が家寄し白梅の花
○東京　平塚白百合子
新潮に船戸出うたのいさましう遠うなり〳〵なり春の海原
○秋田　細矢はる子
はるくればこほりもとけて樺太にみやこたよりもかよふ海はら
○美濃　加藤鳳子
霞れむりさめて島笑む春の海霞の中に遠濱の音
○秋田　齋藤たけよ子
かすみはれ朝日影さすうなはらをかゝみの山にうつしてもみむ
○東京　高橋珍子
磯に出てゝ見送る新婦ゆく小舟かすみにきゆる春の海はら
○横濱　鈴木まつ子
ほの〳〵とかすみははれて海原のなみも長閑けくみえにけるかな
○神戸　松野みとり子
君待ちて遂に暮れけり明石潟月はおぼろに心まとひぬ
○淡路　湖東すみ子
春の海木の葉と浮ぶ天の舟今日の得物のいかにありしか
○大阪　小西松子
この浦を舟出やすらん朝ぼらけかすみを漁る海人の舟うた
○青森　清藤光子
初かすみうすむらさきにたなびきて寶船浮ふ初はるのうみ
○三河　永井さい子
春かすみたち初しより海原のなみの花さく日はなかりけり
○岩代　菅野美佐子
國なりて水を隔へて幾千春神代ながらの小波やたつ

懸賞和歌　柳

天

煙なす柳の堤雨晴れて
　人あゆみ來る馬あゆみくる
　　　　　　横須賀　渡邊比佐子

（評）寫生の上乘

地

その昔し泣きて別れし故里の
　小川の柳今かもゆらむ
　　　　　　名古屋　中村浪子

（評）情のうちに景ありすくれしうた

人

猿曳きの出て行く門のついぢ垣
　なびく柳に夕日さすなり
　　　　　　千葉　益子操子

（評）舊都の春のおもかげうかびて

秀逸

　　　　　　新潟　岩本芳子
春の日もはやくれぬらん渡はの
　したりやなぎに月そかゝれる
　　　　　　東京　林　環子
ふく風になびきはすれど糸柳
　折れぬ心のうつくしきかな
　　　　　　長野　北澤千枝子
去年のけふ名殘をしみし柳かげ
　枝葉はふきぬ君はしもいかに
　　　　　　美濃　芳野富美子
右太田左加治田と傘太に
　柳の影に道しるべかな
　　　　　　土佐　秋月廣江子
いとゞしく旅にやせし子古里の
　柳の下にこし方思ふ
　　　　　　神奈川　服爲八重子
下蔭に散りし柳を結ひつゝ

妹も姉も花輪造れる
相模 杉磯登代子

家毎に水を招きて垣結ふて
柳植えたり草ふきの里
東京 山本いし子

川添を馬緩やかにうたせつゝ
柳手折りて行く舎人哉
神戸 那美子

掛け茶屋の門の柳に紅白の
手綱結ひぬ栗毛若駒
神奈川 山本久代子



里の子が物の怪出づとおのゝける
老木の柳またもえいでぬ
千葉 益子つる子

そのむかし乳母が住みける
川岸の柳かこめる家
なつかしき
千葉 益子智子

山をせに
湖を前な

る君が家の
門の柳に小鳥なくなり

懸賞文藝

甲

○　神戸　松野　みどり子

牛舎のいたつき癒えて牧場の風になびく靑柳の糸

○　青森　川合　りく子

鏡なす池のみぎはにたゝすみてみつに影さす糸やなぎかな

○　岩代　菅野　和子

花咲かぬ此山里も柳ありもえる風にぞ春は知らるゝ

○　山口　村上　操子

吹とたにしられぬ風も靑柳はわが袖がほにもてあそぶらむ

○　松山　田村　多豆子

のどかにもなびく柳の春風を花にいとへる人に見せばや

○　松山　上原　のぶ子

吹風に心なおかぬ靑柳のいとこそ春はこゝろやすけれ

○　越後　水野　やすゑ子

風と靜り浪に洗ひし靑柳の春のけはひの美しきかな

○　越後　松永　松葉子

春風は馬のたてかみ吹きて又心地よきまで柳をふきぬ

○　茨城　金澤　すゑ子

音もなく春雨すぎて月いでゝ露の玉ぬく靑柳の糸

○　磐城　木幡　きよ子

君が住む里に柳に見え初めて心浮立つ川添ひのみち

○　東京　湯　いく子

なたまきの四年の日記をくり返し身を思ふ窓にちる柳かな

○　東京　原　三幸子

のどかにも打なびくなりよろこびのまゆひらけゆく靑柳の糸

○　東京　吉田　龜子

うぐひすのもゝよろこびのこゑごとにまゆひらくらむ靑柳の糸

○　東京　小島　榮子

春はまた淺みどりなる若やなぎみづのかゝみにまゆつくるらむ

○　東京　高野　元子

川岸のやなぎの糸のかげ見えてあやおるみづに春風ぞふく

○　東京　田代　糸子

水淺きいさゝながはのきし柳まゆつくるまではや成りにけり

○　東京　金子　逸子

明けたく里のけぶりと見えつるはかすみになびくやなぎなりけり

○　美濃　後藤　みゆき子

つながれて眠れる牛の四五尺に夢むすばせず靑柳の糸

○　美濃　後藤　曉子

少女子は赤きたすきをあやどりて柳細工のかごあみて居ぬ

○　美濃　芳澤　敏子

老柳の花ほろゝちるたびごとに池の緋鯉のうかび出てきぬ

○　岐阜　山田　はま子

富人の嫁入荷車つゞきけり靑柳堤唄うたひつゝ

○　常陸　岡田　嵐子

渡し舟呼へど答へず川岸になびく柳の離招くらん

○　東京　高宮　安子

川そひの柳の糸は春の夜の月のまゆすみがらんとすらん

○　和歌山　植木　秦子

春來ぬと目にもさやかに知られけりのどかになびく岸の靑柳

○　大和　栗山　高子

春風にみだるゝ岸の靑柳のいとにひかれて人のとひ來ぬ

○　美濃　靜波　春濤子

鍬洗ふ夕さびしく門川の岸の柳は搖蕩るかな

○　名古屋　中村　千代子

高瀬川しぶきにけぶる靑柳の糸のたえまを舟一つゆく

○　美濃　一條　桃代子

水車のどかにめぐる黑川の岸うつくしきあのころ柳

○　東京　秋田聖恵子
鉦たゝく六部の姿野に消えて岸の柳に春雨の降る

○　美濃　峰々堂芳子
門川の岸邊の柳糸たれて若菜洗へる我妹なふる

○　近江　石王かず子
堤九里柳けぶりて舟曳のうたはかすかに月になり行く

○　東京　中村千代子
世の中のあらき風にもさからはでやさしくなびく青柳の糸

○　美濃　加藤里子
そぼぬれて柳に添ひし板小札草とめなる春雨の村

○　美濃　桃井萩子
春の月柳にかすむしづけさを舟にして行く多摩川の里

○　伊賀　佐々木いすゞ子
母校出てゝはや幾年ぞかたみにと植ゑにし柳大木となりぬ

○　名古屋　山根しげ子
夕けぶりなびくと見しはあまかすむ軒端にもゆる柳なりけり

○　飛騨　南みれ子
ところ〳〵藁屋根みえて新墾の川添柳芽ぐみそめたり

○　岩代　岸野常子
衣あふら少女も見えてあひるなく川おもしろき青柳の村

○　岩代　岸野菊子
牧の子のすさむ草笛もやこめし柳の村へ消えて入るかな

○　美濃　芳野萩枝子
鳳の子が柳の影をひけ白き鷺とかたる川ぞひの道

○　美濃　花園まき子
姿見に亂れしかみをかいあけつひとり頬笑む青柳の窓

○　神戸　足立ふい子
かくばかり多かる木々の其中に柳懐しき山里の春

○　神戸　足立あさ子
青柳の糸よりかけていかのぼりより集ひてぞ遊ぶうなゐ子

○　下野　井上俊丁
うた高く駒ひきかへる川添の柳にひくき夕月のかげ

○　佐賀　藤松りか子
ふるあめはそれと見えねとのきのはにつゆの玉なす青やぎの糸

○　神戸　井口その子
池水の氷にかたくとぢられて淋びしまゝの青柳の糸

○　東京　今泉磯千鳥
根柳として川の邊一里蔭しぬ柳に駒の草食みて居て

○　神奈川　中筋康子
水の色のみどりにたぐふ青柳のいとにつなげるよどの川ふね

○　大阪　木村春江子
鶯の羽風になびく青柳はのどけき春の姿なるらむ

○　神奈川　飯田白露子
清めして瓶の白梅さしかへて机にむかふ心地よき朝

乙

○　福岡　みし子
春霞たなびくひまの糸柳くる旅人のほたしなるらん

○　兵庫　古東静子
引駒をしばしとゞめてたれ柳の糸にむすひぬ樵るたの子は

○　淡路　湖東喜美子
糸柳にまづこそ春を知られけれ東の枝は芽ふきにけり

○　横須賀　高橋つれ子
亡き妹がかたみに植えし青柳伸びよのびよと春風の吹く

○　神戸　すい子
川端のやなぎの影も春めきて遠山里はかすみこめけり

○　神戸　今西操子
いつの間に向きを更へけん文机の垣根の柳萌えいでにけり

○春の日にとけて流るゝ雪みづに糸をさらせる青柳かな　青森　清藤光子

○ものすこくまどの障子にうつる影おほろ月夜のあなやきのかけ　三河　永井さい子

○黒塀の内にゆかしき青柳のなほき心を春風ぞふく　岩代　菅野佐和子

○火事ありて焼けのこりたる柳のみふさ〳〵なびく春は來にけり　岩代　菅野みさ子

○呉服屋に客にきはひて垣根なる一本柳風とかたれり　越後　松永繁子

○佐保姫のねみだれ髪が猿澤の池に漂よる青柳の糸　東京　佐々木壽子

○池の邊のしたり柳の打けふりなびく姿そ長閑かりける　東京　白井みれ子

○君まつにかたへの土手に身をよすればやせしわがかたなふる青柳　長野　北澤清子

○青柳の糸よる〳〵にもつれても嵐に折れすすきかへしけり　下總　中川千鶴子

○春風におきふしみだる糸柳なびく姿ぞまことなるらむ　茨城　富田とみ子

○とふ人もなきわが門のいと柳東風にふかれて誰まねくらん　福島　深谷けい子

○のとかなる春のみ空の風なれやたれし柳の糸にさはらで　愛知　白萩子

○うくひすのもひろとなく春の日にやなぎの糸ものひまさりゆく　東京　松本まつ子

○ひもかゞみけさとけそむる池水にうつる柳はまゆつくるなり　東京　河合清子

○いさらゐに影をうつして若やなぎ風にまかせてくしけつるなり　東京　西村直子

○したりたる柳に月はかすめども橋守る少女うつくしきかな　美濃　日島眞砂子

○亡き弟が手折りて植えし川柳青々芽ふきて春の雨ふる　東京　奈良八重子

○山川の黒木の小橋青柳の糸をつなてにわたる春風　埼玉　横田やな子

○里長が門の小川の柳陰つはめくる日はのとけかりけり　埼玉　横田歌子

○我軒に巣くひて生ひし雛つばめ柳なひけり川添堤　岐阜　歌川清子

○庇さし髪いちやうかへしも丸髷も柳くゞりぬ夕暮の湯屋　岐阜　後藤英子

○青柳のいとはもつれもなかりけりのどかにふける風になひきて　奈良　栗山俊子

○春の風秋の風にもさからはぬ柳の心もたんとぞおもふ　美濃　杉山藤枝子

○門川の岸の柳は花散りて小魚の心さよわするかな　美濃　杉山靜子

○川へりのしたれやなぎの糸青く物洗ふ女のかたなぶりつゝ　東京　松村登志子

○保津川の瀬の遠音にほのもれて柳にかすむ春の月かな　美濃　吉野花子

○しづけさに芽し柳に霞して春の月添ふ多摩川の里　美濃　小坂いく子

○紫のかすみの中にうすみどりあやもみたさぬ糸柳かな　上野　吉田しづ子

○河岸のやなぎの糸に結ばれぬたれのすさみかかみのなりつる　東京　高橋珍子

うちむれてあそぶうなゐに道とへはがとの柳をゆびさしてけり　旭川　佐藤央子

○

醫學士の瀬戸札しろき板ぶきの門にけぶれり春雨やなぎ　岩代　岸野せい子

○

こゝろよくいれし朝に青柳のなびくふせいのやさしかりけり　神戸　鈴木まつ子

○

柳影を旅入らしき八だいの人力はしる保津川の土手　美濃　芳野紫水子

○

たをやめの強き心や春風に打なびけども折れぬ青柳　廣島　鈴森きみ子

○

雪け水におされつ流れの捨小舟柳の糸やつなてなるらむ　東京　平塚白百合

○

むすほれし柳の糸を春風のやさしくふきてとかむとぞする　神奈川　飯田白露子

○

川添ひの一本柳いとたれてながるゝはまに小魚遊べる　西須磨　有村紫子

●和歌兼題

三月　土筆　春月

四月　雲雀　蝶

●投稿者はすべて婦人に限る、〆切は毎月五日と改め翌月の本誌に掲載す、但し俳句は選者の都合により爾後締切期日を掲載前々月末日迄とす●用紙は一人一枚に限る●



文學士鹽井雨江先生選

天

岩代　菅野和子

巨燵に這入つて縫物して居る自分は、大吹雪のさらさら、明窓になだれかゝるに、今更の如く寒うなつて、ゾッと肩すぼめて、手を暖めた。

「被在ますか」

圖らざる來訪者に驚いて、瞬間に何方かを考へた。

さあちやん？千代ちやんだか!!

「アレ!!美代ちやんでしたネ」

「こんな酷い日に、ようおいで下さいました。

「あまり嫌な日なものですから、つひ……。」

「さあ、寒うございますから、おあたりなさいまし、さあ無禮講ですよ。」

親密な二人は、友情と巨燵のぬくみにあたためられて、外の吹雪も耳にせず、いろ〳〵の物語が初

まつた。

「千代ちやんはもうお嫁さんになりましたワ。」

「ホヲやつぱり春美さんとこへですか？」

「イーエ、吾作さんの家へ!!」

「なんですと、吾作さんとこへッ」

私はお友達の千代子さんの縁談について、少からず喫驚いたしました。

私は思はず美代ちやんに「眞實ですか」と聞き返へした。吾作さんの家は今は落莫して、現在の住家は既に人の鬼手に渡つてをる。これは、媒介人の正直な説明にも明かつてゐる筈。それに、兩親は壯健で、兄弟も數多あるとの事。

「ネ、美代ちやん、あんな温順な方が、吾作さん所へ嫁つて、つとまりませうか？」

美代ちやんは、「人の氣は知れないものです子」と、私の意見に同感である。

全く何が見込みだらうとは、誰も疑ふ所。十人が十人、千代ちやんの性行を知つてをるものは、素封家の、家柄も良し男振りも佳し、阿母さん一人の春美さん所へ縁付かせたいとの氣込みなさう。

美代ちやんは、言葉をついで説明した。

千代ちやんの御兩親は、春さんが企望で、あんな貧乏漢の妻になるなら、以後出入を許さぬと怒られたとか。然し、兄さんは、本人の合意には何とも容喙する必要はなからうといつて、此度のやうに纏まつたとのこと。それで、祝儀もほんの形ばかり、追ひ出さるゝ樣な蕭條で、簞笥負うた馬と嫁さんと媒介人と提灯二つばかりで送り渡されたさう。

千代ちやんの質をよく知つた二人は、其の光景を聞いた斗りで、涙がこぼるゝのである。

然し、千代ちやんにしては、何か期する所があるのでせう。凡て運命なのです、運命！

女學校卒業式にも校長先生が言はれた、

「皆さんは、卒業後、現在のやうなお坊ちやん氣取りでは、成功しませぬ。決して皆さんには學問を敎へたのではありませぬ。これしきの知識で、世に處するに充分なのではない、更に〳〵

世の荒波。辛酸と戰はねばならぬ大覺悟をもつてほしい」と。

こんな氣儘な私等も、明日の身の上は如何にかはるものやら、と思へば、なんだか心細くなつた。

「もう此んな話は廢しませう。」

「さうネ」と二人は話題をかへて、樂しい文章ののはなしにうつゝた。

雪は大分積つたらしい。軒の松をくづれ落つる音がをり〳〵

（評）趣味ある雪夜炉邊の閑談に候かな。筆もよく活きて、其の情景動き得て候。

地

冬の夜　東京　奈良八重子

今宵の合戰も、汁粉の和睦に、十一時といふとき解散して、友の家を出た。白粉塗られた頰をひきもぎつて行くかと思はるゝ程きびしい寒風が、ビユーと一ふき吹いて、研ぎすましたやうな月が、天心に凍りついて居る。寒さにふるへ聲で話をしながら、村はづれまで來て、こゝで二人の友と別れ、只一人相模川のほとりを、北へと向つた。此處から妾の村までは、少なくも十町、しかも人家は勿論、森も林も、風を支へるやうなものとては、一つもない一本なりの堤――それを、寒風に晒されながら行かなければならないと思ふと、先づ泣きたくもなるのである。

「おゝ寒い」……ヒユーと走つて來た風に、思はずブルッと震うて、ショールをきつく胸の邊にあはせた。

凍つた樣な冬の白い空に、二十日頃の月が冴えかへつて、物凄い光をはなつてゐる。對岸の森の彼方に、羊毛のやうな雲が、輕く浮かんで、ぢつとして動かぬ。青雲寺の森が、行手にあたつて黑く見えたとき、自分の步調はたしかに速力をました。川傍の一本松が、寒颷に悲鳴を擧ぐる聲と、遠い彼方の村に、犬の思ひ出したやうに時々吠ゆる聲との外には、天地間、何等の音も、何等の聲もない。唯自分の下駄の音のみが、凍つた冬の空に響くのである。

あゝ凛冽なる冬の威嚴は、天の限、地の端、到る處に行きわたつて居るのであらうか。月はます〳〵冴え、風はます〳〵きびしく、寒さはいよ〳〵つのるのである、天も凍るであらう、地も凍るであらう、さては我血までも凍りはしまいか。

（雨評）女性の文としては、今少しくやはらかなる筆づかひの欲しきところはあれど、キリツとひきしまつてよく整ひたるところは、作文の道既に得たるものあり。

人

子守唄

岩代　岸野常子

華やかな夕陽の影は、墨繪の樣な愛宕山の後ろに落ちて、美しい薄紫に澄んだ空を、眞紅に染めなされた雲が、浮ぶ樣に辷つて、靜に東の方へ流れて行く。其の後から、幾十とも知れぬ小鳥が、チゝと鳴きながら、崩れる樣に飛んで行つて、とう〳〵灰色の空に熔け込んで了ふ。籬越しに、寸ばかり芽ざした麥畑の中を、サラ〳〵と縫うて流るゝ背戸の小川に、秋の水ちよろ〳〵と痩せて、向ふの風情よい五重の塔を壓した公孫樹の頂きに、烏が一羽、悄乎と止まつてゐたが、空を渡る友の聲に誘はれて、何處ともなく飛んで行つた。冷たい風が、庭の植込の梢を搖ぶつて、落葉が一荐りはら〳〵と時雨する。と、風の加減で、泣く子を賺す守唄の聲が、途切れ〳〵に遠く聞える。四邊は夕暮の色が犇と迫つて、守女の姿は見えぬけれど、思ふに、冷たい運命の神の手に捉はれて、是非なくも、慈愛深き父母の膝を離れ、誰れとて知る人もない家に雇はれて、朝夕稚子の夢を、安らかに守る可憐の者であらう。さらぬだに、此のうら悲しい秋の夕暮を、髮も紊れ、面も窶れ、衣もむごく破れて居るのであらう。あゝ、私も亦斯樣な守女の背に、朝夕聞いても眠くなりさうな、調子のいゝ守唄を聞かされて、安らかに眠つた事もあつたが。

幽かな記憶の端を辿つて見ると、今は丁度十年餘の昔、落葉繁き今宵の樣な晩であつた。――私の守女「あき」が、暇乞して立つと云ふ前晩――當

時六つになる私を抱いて、其の睫毛の濃い、涼しい眼に涙一ぱい、私の手を取り、私の笑顔をつくづくと見て、「孃様よ早う大きくなつて……。」と、熱い涙をはらはらと流して、幽かに云ひ置いた言葉も、今尚ほ我が耳に殘つて居る。私も親しい「おき」が去つたなら、明日からは、誰れを友として遊ばうなどゝ幼心にも悲しくなつて、犇と彼女の袖を握りしめた。さらぬだに、情に脆い優しい「おき」は、よゝとばかりに泣きくづをれて、涙ながらにまた語り出したが、今はよく覺えて居ない。彼女は其の翌日、里なる唯一人の母の病を看とるため、雪の様な、霜の朝を、遠い旅路に就いたのである。



「おき」は常時十五の、色の白い、口の締つた、目のパッチリとした、髮の黒い、可愛らしい娘であつた。幼くして父に別れ、兄は日清の戰に、遼東の野の露と消えて、

里には五十路に餘る母が唯一人、あけくれ、彼女の成業を、祈つて居るとの事であつた。恁うした裡に育つた彼女は、自づと、涙多い、思ひやりの念に富んだ、溫順な性質で、殊に、幼子には、大層忠實であつたと、母上は常に語られた。が、それは、固より私の知る由もないが、彼女の髮が僅かに亂れて、柔かに我額を撫でた事などを、幽かに覺えて居るのは、彼女を偲ぶ紀念である。其後、一二度は音信もあつたさうなが、今はそれさへ打ち絶えて、何處の空に彷徉つて居るとも知れないのである。幾春秋か過ぎ去り、過ぎ來つて、漸く大きくなつた私を「あき」が見たならば、あゝどんなに喜ぶ事であらう？折しも、颯と吹き來る夜風につれて、とぎれ〳〵に、覺束なう聞ゆるは、泣く子を賺す子守唄。

（評）前段の敍景の稍少しく長すぎたる嫌ひはあれど、苦心の文と見ゆるを愛す。

透逸

◎◎短文　東京　檜皮與志子

庭に來なく鶯のいとおぼつかなげなりし口ぶりの、此頃は面白く聞かれて、野にさく梅も盛なりとか。のどかなる春のけしきに、いつか心も浮立ちて、何心なく外の面にさまよひ出でつ。名もなき土橋の上に止まれば、去りし月、堤を破り、田を荒し、人の命をも奪ひし水も、春の心とやなりけん、小さき笹舟一つうかべて、くつがへしもせず、ゆるやかに流れゆく。川そひの路下りゆくに、ほとりの柳、折折の春風に、道行く人のかしらをなぶる、小枝のわざか、春風のわるさか、いとにくし。道つきて野邊に出でぬ。雪どけの道に、目だつわだちのあと、たどりゆけば、ゆく手に白き富士見えて、晴れたるみそら心地よく、わら屋よりのほりし煙の、そのあたりにかすみて、山々もおほろに見ゆるは、明らかなるより美し。ふと心づけば、かたへに路の薹とるとて立ちさわげるをさな子あり。樂しげなる其樣うらやましくて、

我れも仲間入して、やはらかき若草の間をさぐりはじめぬ。梅さく里わたりよりもれくるとりの音は、廣き野にのどけくひゞく。興深き春かな。

（雨評）　幼なげるところはあれど、何處となく優美に可愛げなるものあるを愛す。

◯◎音樂室　　越後　水野やすゑ

内にては、甘へ盛りを、學校にては、よくも先生先生と懐きて、今日も教室の大掃除には、小さき袂を捲き上げて、房なす髪を掻き上げつゝ立ち働く兒童等の愛くるしさよ。

自分も手傳へは、兒等も嬉しかりて、上の級よりも早く終りぬ。嗚呼終りしよ、早かりしよの喜ことばに、溢るゝ笑まひの敬禮を受けて、今暫しの間をと例の音樂室へと行く。昨日試みしマーチの、それよりそれと興に移れば、様々の取り亂したる思も今は消えて、そゞろ鍵板に引きつけらるゝ心地に、またしても、二三曲。

ほつと終りて、窓を見やれば、學校一の景勝を占めたるこの窓の、いつにもましてうるはしきよ。雪まだ殊る舊城の、千古址へて、お壕の水の漣もなく、崇高、雄偉の影を浸して、石齋細工の如く立てる南葉連峯には、今し入りなんとする夕つく日。一天ぼつと卯色を流して、僅かに菱か岳の頂に見ゆる薄紅梅の、殘照と對したる、えもいはぬ景色にもあるかな。

我はいつも恍惚として此眺を自由にするを悦び、一日の業を終りて、靜に家路につかんとすると、必ずこの室を過ぎるをたのしむ。現し世の浪にもまれて、疲れたる歩を家庭に運ぶ人たちには。門に迎ふる優し見の笑顔こそ、一日の憂を洗ひ去りて除りわりとかや。まして浮世の風を外に、天使そのまゝの愛らし子等を敎へ導きて、母ならぬ人の母たる我等には人に知られぬうれしさに充ちて、歸りにし後も、今日は誰のかうせし、今日は誰のかくもせしなと思ひ出でゝは、そゝろ微笑むさへあるに。日頃あこかるゝミユーツの神の寵もあつくこの自然の大なる眺にうたれては、この世ならぬ、神々しき心にみちて靜けき、清らけき、さてまた温かき思の溢るゝよ。このまに動かすば、

我ながら大理石の像ともなりなん。あはれうら若き血に誘はれて、人の身うらやましと思ひしもむかしや。今こそと世に時めく我が友の昨日の文には、心の波もうたせじよな。我はかくしてとこしへ神の形の兒等を敎へて、淸き慰をこゝに求めんものを。嗚呼日は入りぬ、投げ出す黄金の箭のうつくしさよ。隱れては更になつかしき日の光にもあるかな。

（雨評）末段の一節削すべし。卿が此の頃の筆少しく無造作にすぐる嫌ひあり。注意したまへ。

◎鄙の新年　　神戸　登與子

一夜の間に、前の畑も後の山も一面に、雪の花が咲いて、奇麗なこと。お日樣がにこつとした顏して、此の茅家を訪れて下さつた。世の富や財は不公平である。一朝夕の間にも變りやすい。併し、お日樣は、此田舍の家も分け隔てがない。いつもにこつとして訪れて下さる。ほんとうに變らない。晴衣の色合が何うなの、帶が何うなのと、氣苦勞もしないが、矢張り新年は來た。馬車の響、車の音も聞かないが、背戸には絶えずちよろ／＼と淸い音して流れて居る谷川がある。櫻の花瓣や紅葉など乘せて山の春秋を知らすは、此の谷川である。今朝も若水汲みに行つた時、深山の新年を告げ顏に、梅の蕾を浮べて來た。父上は何代と傳はつてきた、短い羊羹色の羽織を着て、村長樣の處へお禮に行かれた。あの羽織で、婚禮にも葬式にも行かれる。隣の花ちやんが來られた樣だ。此の雪景色を見ながら、ゆつくりと話しましよう、爐の傍で。榾も澤山ある。

（雨評）可憐なる文に候かな。

◎冬の夜　　越後　松永紫子

冬の夜……

どんより射した冬の日は、已に彌彦山の南へ沈んで、長嚴寺の森へは、寒鳥が、がーがー鳴いて宿つてから、しばらくたつ、部屋は追々暗くなる、灯がつく。雀もなきやんだが、寒さは增して來た。今までばら／＼と落ちて居つた雨だれも、垂氷になる爲めであらう、音がせぬ。炭箱を取りよせて、澤山炭をさした。冬の夜の唯

一の友は埋火である。

嗚呼この埋火をかきながら、たのしい昔語りするのが、何よりのたのしみ。餅甘藷のむしたてもよい炭火も盛りとなつた。あゝ暖い。自分たちはかうやつて居るに、職業となれば、詮方がない。あれ、あんなに按摩があはれに笛を吹いて行く。同じ人間だのに、なぜだらう、それにしても、自分の幸福さか嬉しく感せられてならぬ……笛のひゞきは、夜寒の風にだん／＼細くなつて消えて行く。人間の幸不幸は、何處から湧くのであらう。自己の力次第であらう。否、さうである。ぱちり／＼と炭がどぶ。自分にかへつて見ると、爐邊のまとゐの人々の顔は、皆あかくなつて居る。あゝたのしいこと。

木枯が吹く。泣きたい時は、あはれに聞ゆるだらうが、今宵は氣にもさはらぬ。犬の遠吠もさうである。

自分は、冬の夜といふ事と死滅といふ事と、どうしても聯想せられてならぬ。鳥の死なんとする時や、その聲やよし。それで、冬の夜は人の心も何となく善に近い……哲學者じみた考へ……

辻占……辻占……女の聲らしい。やがて消えると、夜番のたくの音が、かんかん／＼。冬の夜はげに物淋しいといつてはをしまひ、靜かなものだ。どこの森かで、ふくろのなきたてる聲が、神のをしへの如く、ひゞくのである……。まとゐの人々の顔は、ある者をえたるやうにほてつて居る……。

木枯は吾が世と吹きまはる……。

（雨評）うらやましい爐邊の情景かな。結末の一句は「吹きまはつて居るやうだ」とありたき心地するがいかに。

○◎夕暮れ　　横須賀　渡邊比佐子

消え失せた雨雲は、又もや白く、衣笠山の頂に。桃の咲いた藁屋から、眠むさうな梭の音、高く、低く、破れ垣を洩れて彼方に、遠く。

牛の聲、モーと、長く村外れに聞えて、後は鄙唄の聲のみ、節面白く花野を廻つて、さゝ川に。

水を招いた門柳の家、靑く、春風に翻られて小さ

く、霞の中に入つた。

遙に、雲雀の囀り落ちて、日は既に八幡の森陰に異様な光りを陰してほの暗く、オレンジ色の夕雲は、西の空一面に流れて、水車の響一入高く、龍本寺の晩鐘は夕靄を破つて、微に、常夜燈の光り鎮守の森にとぼつた。

家路をたどる車の音、人の聲、一度に土橋を渡つて、南に……又もや牛の聲長く、背戸に溢れて近く、聞えた。

（副評）　水彩畫を見るやうな心地す。

◎春　　東京　平澤いと子

日はホカ〳〵と暖かく、もう丁度花の頃のやう。梅の枝がすこし、丸まどをのぞいてゐるやうにうつゝてゐる、ぬひかけの手をとめて、ぢつと見つめてゐると、小鳥が一羽々しきりと枝から枝へとびうつゝてゐる。梅のかげはだん〳〵廣かつて來た障子の腰のあたり、まつくろなかはいゝ小猫のかげ、しきりと小鳥のかげに見とれてゐるかたち、やがて丸くなつてね入つたやう。

わらいわし音とともに、松の高こゑ「せつかく拭いたばかりなのに、またあとをつけて……」

（副評）　のどかなるけしき、一すうつし來たれるところが面白し。

◎友がりへ　　下野　井上絢子

今年は鄙に、去年に變る年をむかへられた御心中、お察し申します。私元旦にふと思ひ出しましたよあなたが手づから調へられたお雜煮を、姑様が如何な思ひで箸をつけられたであらうか、又去年は玄關に、絹帽の夫君を姑と共に送り給ひしおもひ出は、どのやうであらうか、ことしはいかなる人の君に代つたことであらうと。靜子さんおつらいでしよう。私は時々あなたの身に成て、人しれず泣く夜がありますよ。良人様もあんまりですね。けれども、あれだけの位置においでなさる方ですもの。あなたがお心づくしなさる程、良心がとがめなさるに相違ありませぬ。切つても切れぬ御縁は、姑さまが實子を捨てゝあなたについて居らるゝことです。親に孝養をつくし、夫に貞操をつくす妻の眞情を、木石ならぬ良人様がうれしくない

ことがありますか。「靜さんゆるしてくれ」ときつとお仰つてお居でになりましやう。あなたが孝と貞とをおつくしなさるので、あの姑さまですもの、必ず我子の無情を怒り、あなたに同情し、又大に感謝あそばしますよ。

靜子さん、お辛抱も今すこしですよ。貞操といふ藥がきいて、良人さまはもう目がさめてお居でゝしやうよ。私は良人様が悔い改めて、あなたをおむかへなさる日の近きにあることを信じて居ます。其のとき、あなたのよろこびの顔を拜したい。その時は、私にもよろこばして下さい。先日のお歌、床の中でよもすがら泣きました。あなたの心を汲むだけのお返しができないのは、どうぞゆるして下さい。

（選評）　情はきこえたり

◎田舍道　上野　吉田靜子

うらゝかに晴れ渡つていと靜かな初冬の日、村外れの伯母の許を訪ふべく、家を出た。左は田圃、右は雜木の林、霜解けのした細い道を、徐かに辿つて行くと、淋しくなつた木立の奥の方で、村鳥のすさまじう喚く聲が聞ゆる。私の他には、通る人もなく、荷馬の跡の蹄に溜つた水を、痩せこけた野良犬が、ペチャ／＼と甜めて居る。倒れかゝつた道知るへは落葉に埋まつて居る有樣で、時々思ひ出したやうに吹く風が、木の葉をクルクルと卷き上る。それと、同時に田の面に下りてゐた雀の群が、パッと飛び立つ。折から、通りかゝつた杣の爺さん、大きな斧を背に横たへて、枯れた道芝の上に腰を下し、やをら、烟管を取り出して、燧石を、カチ／＼と打つ。

其の音に驚いたのか、冬枯れた櫟の梢から、小鳥が二羽とび去つた。

長い林を通り拔けると、此度は右も左も麥畑、一面に青々とした中に、低い藁屋が三四軒散在して屋根の上に鷄が鬨をつくつてゐる。其の聲が、微かに空の方へ消えてゆくと、後から白い煙がスーと夢のやうに立ち昇る。あの藁屋の中には、春作つて秋穫つて積んだ俵を眺めながら、新藁たゝいて、孫の草履作る爺さんも居るであらう。ア、實に平和な景色だと、足を止めて見入つて居ると、

何處からか優しい機織唄が、澄んだ空氣の上を滑つて聞えてくる。お米も澤山穫れた、畑には麥が青々して居る。

これからは、手織木綿に晴着の新調、ゆつくりと春を待つ、其の樂しみは、巷の人の想像も、出來ない事であらう。チッとこんな事を考へながら、私はいつしか村外れに出た。向ふに見ゆる高い土扉は、亡母とも思ふなつかしい伯母の家なのである。

（兩評）樂しげな田舍道に候かな

ヽヽヽ〇落葉　相模　柚木とよ子

何故か私は忘れられない十二月の十五日、矢張今日の樣に寒い日でありました。日毎に吹き荒ふ北風に、欅の枯葉は、二三を殘して、宛然飛び下りる樣、それは〳〵寒い日でありますた、日向に成つて居る南の椽で、一人髮を結んで居ると、表に優しく訪ふ聲がした。立つて返事をした時、障子を靜に繰り明けた年寄の順禮、片手を柱に小腰をかゞめて、孃樣に御願で……後は聞きなれぬ遠國者の詞と、息の洩る口の云ひ方とで、よくは判らなかつたが、中食させてとらしかつた。私はもじ〳〵しながらも、はいと云ふと、笠を取つて靜に這入つた。

年頃は七十以上とも想はれる、色白で、氣品も何處となく高かつたが、それだとて、弱々しいとにはなかつた。笈や鉦や、前に下げた白布の袋などを、靜に置いて、そして喫食し始めた。私が出したお茶と醤油、嫗は嬉し相に會釋した。よき功徳になつたと思ひ乍ら、嫗の後に有る笈を、見るとはなしに瞰ると、一枚の札が有つて、中央に見尊大師御舊三十四號巡拜、右に明治三十九年五月十七日、其の左には岐阜縣美濃の國海津郡東江村大字大和田、下に伊藤つなと、少し大きく。離れの筆かは更に知る由もないが、長い月日を共にしたらしく、墨色もいたく古びて。あはれ、老い先き短い順禮の一人旅、其の裏面には深い仔細があるのであらうと、涙ぐみつゝ、幾度か小さい胸を躍らせたが、遂に其の身の上を問ふ機會が無かつた。やがて食し終へた順禮は、相州小田原へ趣くのだ

と母に語つて、里數や地理を詳く聞き、有難う御座いました、と厚く禮を述べて、暫し唄つた御詠歌の一ト節。

盛りの花は散りもせで、苔の花は枯る丶世に、苔の花は枯る世に、後れ先だつ世の無常、誰れからさきの夜の雨、老木の松の袖ぬる丶、老木の松の袖ぬる丶袂をよそにせんすべも。

遠く故國を立ち離れて、行く先々に秋の哀れを怨じつ丶、彷徨て行く順禮の身の上、私は遂に泣きました。唄ひ聲細く門を離れる時、木の葉交りの北風に吹き遣られて、淋しく振り返つた其の姿、お丶どうして私に忘れる事が出來ませう。

（園評） 其の情に先づきこえたり

、、〇新年　越後　岩本翠浪子

陸軍歩兵大尉の正裝をした人、朝からの年禮廻りに、屠蘇の醉の足元危く、軒並の標札を見ながら歩いて來たが、左側の角より十軒めばかりの、いづれも同じやうに奇麗に造られた門の、三番目に掲げてある「稻田」といふ標札を見て、此處だ〱と獨言しながら、門を入つて、格子戸を開けて、稻田君居るか、おめでたう、松村です、と大聲を出すと、奥の間から出て來て障子を開けて跪づいたのは、十八九の丸顔の色の白い可愛らしい細君。大きな丸髷に赤い手がらを掛けたのを、大尉の眞向に突き出すやうにして、お辭儀をしながら、どなた樣でございますかといふと、大尉は始め臭い息を吐きながら、ヤ、奥樣ですか、奥樣にはまだお目にかゝりませんですが、私は稻田君の親友で、松村といふ者です、何うぞ以後御懇意に願ひます。稻田君は留守ですか、私も昨年の暮れに新潟の分備隊の方から歸つて參りましたので。

稻田君とは、二年振りなんですから、一度伺うと思ひながら、ツイ〱、失禮いたしました、と、挨拶をする。細君も改めて、初對面の挨拶をした上、モー主人も歸りませうから、何うぞマア、お上り下さいましと、大尉を座敷に通して、火鉢を出す、茶を出す、屠蘇や吸物を出す、組重の肴を出す、燗をした酒を出す。折柄表にカラ〱と車の音がして、此の家の門前に止つた。夫人は主人が歸つたので御座いませうと、座を立つて、玄關の方へ行きお歸へりなさいましたか、松村さんといふお方が、御出になりまして、只今座敷に入らツしやいました、の聲共に夫人を先に立てて座敷へ入ツて來たのは、年頃二十六七の、羽織袴の若紳士。大尉は、ヤー稻田君しばらくと、背後を振りむくと、全く一面識の無い人。これはと驚けば、主人も見ず知らずの人が居るに驚いた容子。

○　○　○　○　○

アゝさうでしたか、陸軍の稻田さんなら、直ぐお隣りです、郵便などが、時々間違つて來ますよ、アゝゝゝと、笑ふは主人の聲。飛んだ御馳走さま、との挨拶も可笑しく、極りわるげに苦笑をして、出て行く大尉の姿、かゝる樣するは正月のみ之も新玉の餘光にや。

（園評） 選者の知人にも、かういふ滑稽劇の主人公を實際にやつた人があつた。思ひ出されてなつかしい。

、、〇落葉集　岐阜　佐藤清子

ひんがしの空にはかに時雨きて眞黒きに、七つ頃の日の照り澤う

ていや増く、塵を流せる様な靄を突いて立る大銀杏の葉の、枝をはなるゝが、始は風のまゝに群すゞめの亂れ飛ぶが如く、終に後れて飛ぶものは、ひら／＼と菜の花に戯る蝶に似て、捨てがたき眺にこそ。

水もやゝ涸れゆきて、岸なる杭もいと長く、底なる小魚も數ふるばかりに澄みたる谷川の淺瀬に、二葉三葉あく迄紅き花紅葉、小石の蔭にめめられたる深山の秋も、はや更けたると思ひしられ、いとあはれになむ。

唐紅の焼の柿の葉、風なきに散りて、其が下にまゝごとなし居る小さき妹達の前に落つれば、争うて拾ふ無邪氣さ。彼れ等にはまだ秋の寂しさのしまぬぞ、いと羨しき。

、〇胡蝶日記　越後　伊倉彌壽子

（一）

秋蝶の舞獨置けに花も香もなき文机を、伍う舞ひつ。そと寄りてかざしの花を動かせ見れば、其を追ふべくや、はた、逃ぐるにや、折々は障子の紙に、ばた／＼とけたゝましい羽音。丸扇そと押して出だしやりぬ。

（二）

月清うして、バイオリンの音いよ／＼澄める其夕べ、「姉様絵を書いて下さい、花書いて？鳥かいて？よ姉様」末の妹のむづかるゝを、御手本なくては書かれじと、つれなくも云ひ捨てしに、何思しや、いづこにか走せ行きて暫し、「姉様、御手本これよ、」紅茶花の花重き程つゆ置けるを一枝。「オゝ美くしい花、サア書きませう、」つと取るや、白紙の上にハラハラとこぼるゝつゆと同時に、ポタリと落ちた、蝶の骸？二人は思はずアッと叫んだ。オゝ、そ

れよ、日ねもす我が文机を舞ひつゞけれし胡蝶にやあらん。

（三）

紅きつゆ散る山茶花の木の下に、可憐なる胡蝶の墓は立てられた。吹きすさぶ夜半の木枯しに、暖かき夢さめしならん、手向の花や散りけんと、夜もすがら夢にまで、朝淵晴きに先づとひぬ。いづこにかと暫し見つむるに、おゝいとしよ、桐の一葉に覆はれて、一滴の涙だにぬれず。

それよ、其花の眞盛りな時、胡蝶いうら若くして狂ひ舞ふ時、如何なる縁のありけるにや、そと落葉はらふや、つゆなき花の、ホロ／＼とこぼれぬ。

、〇新年　兵庫　古東靜子

昨日は怠りの身をばかこちて、机上の壁の深き恨みに泣かんとせし己が心も、ほの／＼と明け渡る空と共に、新まりぬる新年のいづくにか、平和の聲あり。一陣の清風さつと面をはらへば、汲み入るゝ若水の音だにも、ゆたけさあふれて、いつしかとなく新たなる心に、希望の光りみち／＼て、恨みの嘲言も今いづくにか。初日のかげの一きはうるはしきに心ひかれて、さえ／＼しさいはん方なく、みどり子が和氣靄々無邪氣の遊びの笑まひのうちにと、己が身もなりはてぬ。あゝ、楽しき今日の日よ。げにゆたかなる新年、春秋なほ遙なる身、前途の望み多くして、弓はりのはりつめられたる己が心の内ぞ、げに／＼たのしきや。

、〇別れ　枥木　白石玉子

松の林を通りぬけたが友も妾もなほ無言にて、青々としたる野道を行く。一面に野原にて、木の葉は皆な枯れ、松のみが我れ見よと云ふ斗りなり。「石塚さん、有難う。もう宅へも半道とも御座いませぬから、御別れいたしませうね。」「何うぞ姉さんに宜敷。」「今別れたら、いつ御目にかゝれませう。別れが辛いわ。」「さうね、

姿も嫌よ。でも、何處までいても同じだわ。其れに、夕方でもありますからね。」妾今御別れしても、必らずあなたの事は忘れませぬよ。」「嬉しい事。」、まらぬ話しが、幾度びとなく繰り返さへれた。」入日も先き迄て高く有りしに、いつか名殘りを林の中にとゞめぬ。さらばと離きて、別れをつぐれば、早くも友の身は木の影にて見えずなりつ。いつ來たものか姉さまとかけよりたる妹、我れをあんじてか。

〇忘れ形見　栃木　新村なほ子

東風ゆるやかに吹きて、消えゆきし雪は跡を止めず、靄こめたる夏衣の空は長閑である。長らく冬籠りせし草は、柔かき緑の新芽を、そこここと出し初めた。岸の邊の柳は、ふつくりと銀の様な芽可愛らしい。春風百里、世は皆春めいた。何所とも無く鶯の聲が聞ゆる。我こそと匂ひ出でたる庭前の梅も、今眞盛りである。年々咲き出づる此の梅、平和の内に平和の花を咲かせて人目を樂しまするけれども、妾に如何許り涙を浮ばすのであつたか。妾は此の梅を見る毎に、小さき胸は躍るのである。これこそ幼かりし頃に別れし母の植ゑしなりと、父より聞いて居る。亡き母の忘れ形見は、實にこれである。妾は時に觸れ折に觸して、先づ思ひ出すは、亡き母である。妾はこの梅が何となく懷かしい。朝な夕な梅につれて母を思はぬ時はない。

梅よ梅よ、我が母はどんな御方だつたらう。されど〱、梅は答へず。何答へずとも、靈あれば感じたであらう。時にひらひらと落つる花辨は、いと意味ありげに、ゆらゆら池の面に小波立てぬ。春の日は暮れて、妾ひとり中庭に佇で居つた。お母よ安かれよ。

〇磯邊の一日　名古屋　中村浪子

囂騒たる濤聲に曉き夢は破れて、朝とく起き出づれば、曉星の影うすれて、哀れいいと深し。水青く山黒く、鎭守の森の彼方、鷄は啼きて曉告ぐる聲かしまし。里人の行きかひ繁く、磯藻取らんとて、節面白き磯唄うたひ、赤襷かけたる海女の群、一つ二つ、此處の磯、彼處の渚、渡り行く樣ぞ閑けし。腰蓑着けて櫂操ひ、どら漁り、磯さがし、汐入・歌ふ聲と共に櫓拍子高く、沖に走る漁船の群、さながら畫のやう。海底深く眠る魚も醒さますらむ。眠たてこめし霞、次第々々に霽れて、海、島、山、紫に鮮かなり。眠るが如き春の海原を走る白帆、水平線上に昇る黒烟、近く烟をはきて走る黒船、去來絶えまなし。都人の漁夫の歌と共に、櫻貝拾ひ、互に獲物の多きを誇り、十四五なる腕白盛りの男兒、波間を飛べる白鷗の群に、石投るなど、さながら畫を見る如し。

永き春の日もやう〱暮れんとする程に、夕べの鐘の音、浦濱に響き渡りぬ。波間の鷗早くも塒に歸りつ、沖邊はるかに見渡せば、落日の光り海に映じて、赤く麗はし。朝まだき漁りに出でし、男女の水白帆は、獲物皿たけに、磯邊に群れて、その多寡を語らふさては、思ひ〱に家路に歸り行きつ。夕げの膳に向ひ、一家團欒笑ひさゞめく聲、ところ〱戸の隙間洩れて聞こゆ。折しも、今日漁りし獲物を乘せて、櫓音高く出る船五艘六艘。聞けば、今夜の内に程遠き市へと運ぶにてある。

團々たる月、雄大のみ姿もて水平線上に昇れば、海原は金龍の踊るが如し。月は殊の外靜けき漁村を朧に照し、沖より吹き來る風は妙へる梅が香を運ぶ、これぞ島の白梅としる。時、歸雁哀れに鳴きて、そゞろ故郷の父母戀しめぬ。靜かに寄せては返す男濱女濱、磯馴松を吹く汐風と調を和し、神秘なさゝやくが如き思ひあらしむ。



新體詩

文學士　鹽井雨江先生選

天

波船　　越後　岩本芳子

若草ふみてはる〴〵と　春をたづぬる人のせて、
流れしづかに風ゆるう　舟、脇川の里いでぬ。
今來し方を見返れば、　水むらさきにそめなして、
汀の小舟紛のごとく、　わしのしげみにかくれ入る、
棹にみだるゝさゝ波は、　色さま〴〵の花模様、
いざ手をのべて花の香を、包みてゆかん旅衣。

（雨評）有聲の畫、詩趣掬すべし。

地

ひとり言　　土佐　秋月廣江子

見しとや、いづれ、影ひそむ深山育ちの色なるを、
怪しうたびし玉章の、　ふさはぬ文字をかへりみて、
そゞろ亂るゝ、思ひ哉。
杣木を拾ふ行きかひを、　唄ふ節にもいつしかと、
戀はしらぬにわらぬ共、　花にむつるゝ蝶の上を、
只美しと見し身とて。
姿ばかりはおとなびて、　十九と春をなのるとも、
紅白粉は香も知らで、　みだれしまゝの黒髪も、
結ばんとせぬ我なれば。
戀ふも仇よ、一時の、　まぼろしにきく樂の聲、
さめての思ひつらかるを、なれし谷間の白雲よ、
花なき夢ぞ安からぬ。

（雨評）深山の花のひとり言、可憐なる哉。

人

お光　　信濃　相村志操子

お光や！、お光や!!
泣きつゝ母は走りけり、髮ふりみだし振りみだし、
山路を奥へ、はだしにて。
お光や！、お光や!!
呼びつゝ人はつゞきけり、手に〳〵松火ふり照らし、
山路を奥へ、むらかりて。
お光や！、お光や!!

蝉は深山に響きけり、　ねぐらの鳥をおどろかし、
眠れる獣を走らして。
　お光や！、お光や!!
蝉ははつたと消えにけり、毒蛇すむてふ谷の底、
一つの屍取り巻きて!!!。

（評）意匠一寸面白し。

秀逸

◎長閑　　横須賀　渡邊比佐子

日傘の見えて守唄の　聞えて清き菜の花の
道をたどりて行く彼方　此方に眠る花の蝶、
馬鈴に飛んでちら〳〵と　花野を左また右に。
桃咲く家の垣近く　歌もきこえて梭の音。
風のまに〳〵誘れて　小川に落つる花びらの、
二ひら三ひらせゝらいて、牛の遠音のいと長く。

（評）採り來れる情景に詩はあれど、言ひまはしの工夫足らぬををしむ。

◎人形を夢に見て　　東京　秋田登志子

衣は友染　下衣は緋絹、
髪はおさげで　面顔白く、
黄な笑聲に　障子が揺れる、
　妾の大切なお君ちやん。
繪筆なぶつて　墨する時は、
朝日輝く　机の隅で、
歩調正しく　絵を見て踊る、
　ほんに可愛いお君ちやん。
床の白梅　一輪とつて、
黒いおさげに、かざしてやれば、
小さい眼で　妾見て笑ふ、
　ほんに優しいお君ちやん。

（評）工みたる意匠にはあれど、想像少しく不自然の境に入りたる嫌ひあり。

〇明治四十年を送るとて　　神奈川　山本久代子

春にあこがる小女子の　小さき指に數へ來て、
哀れ今年のその運命、　殘る一つに惑るかや。
時とか呼べる永々に　斷ゆる事なき卷物の
四十年の部　繰り終へて、　新らしき年を迎へんか。
思ひ出づればうらめしや、　時てふ杼を織るうちも、
汚點や裂け目をとゞめつゝ　學は進まず業成らず、
幸なかりける古き年、　飽くを知らざる深淵に、

はまりて行きぬ、いざ友よ、
知るべからざる破衣して、
其破れるおんかつぎ
悔みの涙打はらへ。
新らし年はいでましぬ。
取りて、まことの幸を得ん。

（同評）　意味はきくべきものあれど、調の工夫足らず。

、、、〇さゝやき（偶吟）　木村　春江子

梅の一輪匂はせて
ことほぎ錦へて打向ふ
心静に坐すれば、
日に榮え行く大御代に
研ながらたどる文の道、
絶ゆる事なき道しるべ、
しるべの春にたどりつゝ
嶮しき山も登り越え、
いつかきはめん文の道、
主まつらん文机に、
思は清き三つの朝、
ふとさゝやきぬ、我が魂。
生れ出でたる身の幸よ、
分け行くはてははるけきも、
我がはらからの幸をしも、
思をこらしすゝめなば、
千尋の海もうちくゞり、
ゆめなたゆみそ、我主よ

（同評）　御光なるさゝやきにはあれど、詩韻乏しく

、、、〇　東京　平塚　白百合子

打ふるふ身をなぐること
足にまとへるならんちも
水やしみけん、ひやゝかに
今しうましき酒の香は、
一こん二こんほすほどに
みうちをめぐる暖かさ。
もうろうこむる土間の内、
百つゝみうちあげつろふ、
雪は音なくふりしきて、
うすくてらして人もかよはず。
人は入りたり縄のれん
踏きれ、そこきれ、積む雪に
つゝむものなき足をさす。
うゑたるかれののどをたつ、
面は赤くかゞやきて、
かしこに此處に膝すゑて、
此處夕ぐれの街末町
酒めしとかくかけあんど、

（同評）　語り來たれるところに詩はあれど、發表の工夫足らず。

〇織女　名古屋　中村なみ子

織に籠む春の月、
小さき此の胸、何とはなしに
故郷の空、父母妹、
筬の音ゆるむその時は、
　からりんとん、からりんとん、と
　烈しく打つよ筬の音――
夜業倦まず打つよ筬、
戀情の色は衣にあり、
　からりんとん、からりんとん、と
或時は――
ストーブ燃ゆる暖かき、
舞踏の如に手足ふり
響きにつれて、織る機の
　蓬來の島――　涙の色――
　鶴の綾――　沈みぬ浮きぬ。
歸雁は鳴くよ、哀れにも。
雁の鳴く音に誘はれて、
戀ふればゆるむよ、筬の音、
亦も叫ぶよ主人の聲。
こは彩もなき破れ衣、
悔恨の涙は衣とほす。
樂しく打つよ筬の音
工場の内に友どちと、
歌ふりあげて打つよ筬
きぬは榮あり目も映ゆき。

（同評）　工夫したるあとは見ゆれど、想のまとまりわるし。

〇わが庭　滋賀　中野しな子

名利の夢にあこがるゝ、
われに術願の富あらず。
花の匂ひにあこがるゝ、
われに胡蝶の戀もなし。
さらばよ、今は、天賦なる

自然の道をたのしみて、
黄金の色にまじろかず、
浮世の戀に穢ひちず。
ひるはひたひの汗に笑み、
夜は白雲の夢を追ひ、
庭の松風友とみる、
樂の庵ののどけさよ。

（選評）　想のまとまりわるし。

○新體詩　　東京　今泉磯千鳥

時の車の
廻り／＼て、
花摘みてにし
妹と二人
遊びし夏の
いつしか過ぎて、
冬の都に
木枯荒う
濱歩もいつか
睦語も今は
なりつれたりな、
人足繁き
世の諸人は
はた泣き叫び
華冥祈禱ゆる
夢見つ過ぐる
そもやみ醉の

いと早う
歡樂の
春の野も、
眞砂地に
濱邊をも、
今は早や
來りけり。
吹きしきて、
小走りに
さゝやきに
大晦日。
辻々に、
集ひ來て、
かこち居れど、
よき寐間にき
雅兒は、
干なるかな。

（選評）　すべて今一層の工夫を要す。

○雪　　越後　水野やすゑ子

雪ほチラチラ天から降て、
枯れた枝にも立派な花を、
雪に名高い高田の町も、
銀のごてんとならうとするよ、

天の神様花咲爺か、
松や竹にも一度に咲かせ、
あれよ見る間に、水晶の宮か、
ほんにきれいな正月飾、

、、鶯姫に　　岐阜　遊山花子

梅の宿見よ、梅の宿、
ゆめをうたひし和床ぞ。
胸にたゝみしはかなさよ、
誰が少女の血の涙だ、
けがれし耳を洗ひたる。
玉水細く根をつたひ、
妙なる秘曲通けるとき、
まどろむわれが情かな。
花一輪にくちつけよ、
たとへ涙のあれはとて、
愛の緒涙しそ、
やがてさかなむ笑みの花、

黄の美女、永久の、
小さき羽をあたゝかき、
辛きいのちを窓になく
捨てうた人罪なげて、
こずゑしたゝる雪とけの、
笑みの姿を醉うけて、
調は化して戀によひ、
ゆめな戀にぞ美くしき、
かいま漏れ來る聲よ讃よ、
世の幻にもたえづゝ、
春風ぬくゝ女がむれに
御座が幸の光ある朝——。

（選評）　氣取る事を戒めよ／＼。

、、花籠　　愛知　荒木都美子

菫

霞こめたり花の野に、
咲きて匂ふよ菫花、

紫の花美くしく、
靜かに眠る蝶一つ。

嫁菜

紅葉の如き手をかざし、
花は語りぬ此花も、

手折る一花嫁菜かな、
誰が手折るかや來る年に。

蒲英公

人望むなり黄金色、
蒲英公の花貴なる哉、

胡蝶舞ふよ貴なる色
黄金の色貴なる哉。

短歌

御歌所寄人 小出粲先生選

天

石　岩代　岸野常子

たゞ一つすゑたる石に草も木も
　みなおもしろくなれる庭かな

地

燈　松山　上原のぶ子

ともし火となせばはかなき稲妻も
　みやこを照す光なりけり

人

折りにふれて　東京　白井春子

門松のたちつらなりて内日さす
　みやこ大路もせばくなりぬる

甲

新年龜　愛知　長井まい子
おほうみのそこの小龜もうかぶらんなみ靜なるとしむかへて

柏　秋田　古瀬りく子
ふるはさへまたおちあへぬかしはぎのくぬぎが原に風そよくなり

霧中山　松山　田村多豆子
いかにせむわらくつやれて家もなき旅の山みち日はくれむとす

春雪　美濃　傍島みゆき子
やみつとて傘たゝみ居れば又ちりて袖にきえけり春のあわゆき

○　美濃　傍島曉子
母にだになほもらし得ずぬば玉の見し夢うれしはづかしきゆめ

雪中鶯　磐城　木幡きよ子
ふる雪に鳴く鶯の聲聞けば開かぬ窓に匂ふ梅が香

汽車旅行　東京　安田粂子
なか〳〵に面白きかな汽車のたびうつりゆく繪を見る心地して

春月　佐賀　藤松りか子
どことなく梅の香もして春の夜はおぼろにかすむ月ぞゆかしき

旅路月　神戸　井口その子
怖ろしき獸の聲にせまられて旅寐戀しき冬の夜の月

○　横須賀　渡邊比佐子
村はづれたそかれ寒き橋茶屋の小瓶に咲ける白桃の花

雪の朝たきゝとる子にかはりて　神奈川　飯田白露子
炉によりて寒さなしらぬ子もあらむたきゝ折にとわれはゆく身よ

社頭松　飛彈　南みれ子
年毎に色ます松の木の間より尊く見ゆる産土の宮

雪朝　東京　高橋珍子
つよかりし宵のあらしはしづまりて雪にあけゆくうふすなのもり

○　名古屋　山根しげ子

ちこせおひ霜をふみつゝしつのめが大根引く手やつめたかるらん

○　　岩代　岸野せい子

山中のみつうみしろく月さえてしもの夜寒なましらなくなり

鶯　　神奈川　鈴木まつ子

ふく風もまたはだ寒き谷かげになく鶯のさやかなるかな

○　　廣島　鈴森きみ子

鶯のゆめいかならん山かげの梅の一村月に更けゆく

○　　神戸　足立ゑい子

霞つゝ暮るゝやかてにおぼろ月人なつかしき春の夜はかな

乙

回禮　　越後　水野やすゑ子

行きちがひ雪道譲る人々のこゝろもうれし回禮の朝

○　　越後　杉山節子

父もなく母もなき身の寒の夜は殊更淋し埋火のもと

○　　越後　松永しげ子

霞立つ畑のなわけて里の子はわらひなりとゑ聲のみはして

春の歌　　越後　岩本芳子

はつみゆき今朝こそ降れと新らしき日記のはしめに記るしつる哉

○　　下總　高木美代子

富士見やる枯野に出でゝ霜生すれば野邊の烟りに影かくれつゝ

夜雪　　甲府　名取正代子

なさな子をふさせて後にいそしめは夜こそわさはとゝなりにけり

鶯　　埼玉　横田須磨子

鶯のもゝよろこびの聲なしもことしの春も友にしてまし

春　　埼玉　横田秋子

雛までも粧ひなして少女子がすがたつくろふ花のかんざし

鎮守の社に詣でし折によめる　　茨城　金澤すゑ子

御軍にかちえし魂のかたはらにけ高う咲けり大和撫子

歌　　常陸　岡田萬子

山人の炭焼く小屋の下かけに春知り初めてもゆるさわらひ

寒の夜に　　下總　中川千鶴子

ほかげかとねやの戸あけてはださむき霜夜に月をひとりみしかな

生れ年の中におひて　　東京　高宮安子

ながらへてまたもむかへしさるとしの中とちとせの齢やまはなん

若草　　和歌山　植木榮子

日かげさす垣根の雪は消えはてゝ淺みどりなる春の若草

犬吠が崎　　千葉　中川千鶴子

獅子と吠へ虎とたけりて荒波のよせてはかへす犬吠ふがさき

○　　神戸　今西操子

目に見えぬ人のこゝろも筆草の花咲く野べに匂ひぬる哉

社頭松　　大阪　岩橋化子

幾千年神のみいつのかしこきにみまへの松もいや榮えつゝ

軍人　　福島　會田とよ子

みちのくのいはきの山のいやたかく名をしあげてよ萬代までに

雪中梅　　福島　深谷けい子

ふりつもる雪の垣間に梅咲ててりぬふひかり孰れかさよき

社頭松　　下野　土屋園生子

神のます二荒の山の老松に御代の榮えん色ぞ見えける

○　　神奈川　服部八重子

守唄に眠る脊なしの子花の蝶花野めくりて小川流るゝ

○　　相模　杉義登代子

雨しふく庭の飛石窓近く桜の花散る手鞠の音

社頭松　　西須磨　有村繁子

しめはえし北野のもりの老松はいかなるいさをある木なるらむ

渡舟　　名古屋　中村千代子

母病みてみとりに歸る姿なるななとかくおそき渡舟かな

新年　　山口　村上操子

ひとゝせのはじめとおもふ心にやけふはこゝろの長閑かるらむ
松山 上原のぶ子

新年
かどまつのまちわたりにし年立てまつ君が代を千代といはゝむ
滋賀 中野しな子

雪中の竹
ふりつもる雪にしばしは身をまかすみさほや竹のこゝろなるらむ
美濃 桃井萩子

○
鐘低うしづみて消ぬしづけさは梅の花ちる初春の月
東京 中村千代子

初春
梅が香もやがてそふらむ昨日けふいとものどけき春の初風
美濃 西尾春湖子

社頭世祈
色かへぬ松うへならへ神垣にさかえゆく世をなほ祈るかな
神戸 足立あさ子

○
春のよの月の朧はさもあらばあれかをりぞしるき梅の下道
上野 吉田靜子

靜夜
きくとしもなけれど遠く聞こえくる靜かなる夜な ましらなくこゑ
東京 戸塚とも子

名所鶴
打よする波かとみえて夕まぐれたて野の島にあそふたづかな
茨城 宮田とみ子

鶯
岩陰に殘る淡雪消え果てん一聲低う鶯のなく
松山 田村多豆子

梅
冬の日は枯木と見えし庭の梅春はわすれず花咲きにけり
松山 上原のぶ子

梅
立そはる霞もあれど梅の花咲まさる春に何かおよばむ
山口 村上みさな

梅
きえのこる雪をまことのゆきにして軒ばの梅は花咲にけり
岩代 岸野菊子

梅
はりはらもまた雪枯のまゝにして梅が香るむしをたのなかみち
秋田 齋藤たけよ子

社頭松
玉幸ふ神のやしろのおい松もことほぎすらしことのれぞする
美濃 芳野萩枝子

○
うま方が鼻唄高く馬ないて長森坂をのぼる春かな
土佐 秋月寶江子

○
しばらくも心やすまぬ世なりけり何をなすべく生れこし身か

丙

師の古稀を祝ひて
軒にありて天をもつかん若松の年ふる師にわかみどりする
岩代 菅野和子

風
吹すぐる音ばかりかはうちそよぐ草木に風も見るべかりけり
松山 上原靜子

柏
何となくおとみにしむはかしはきのはもりの 神のみゆきなるらん
秋田 古瀬惟子

寒夜
嵐頓やみ更け行く夜半に竹の音のあはれに聞ゆ月さえわたる
下野 小島白菊子

湖
行く船の跡二筋の浪やのこす鏡に似たる春の湖かな
東京 林 鶴子

松千年齡
常にみし操木高き松林千代のためしはいふまでもなし
埼玉 横田やな子

春風
うなゐらがたこもてあそぶ春風に松ゝみどりものびまさりけり
長野 北澤千枝子

○
起伏やしのゝ篠やの夜半の雨ゆめに跡とふ奈良の都路
磐城 水幡清子

○
わが胸は蟲食まれたる紅薔薇の花ながらに朽つるにし似て
名古屋 楠たか子

冬の夜都の人に
君がりとゆめ路かよへば竹しばのうらかぜさむく千鳥なくなり
清國 宮成梓子

水仙

冬ざれの夕月淡き庭隅に姿やさしく水仙のさく　神戸　すい子

社頭の松

鳥居までつゝめるほどの松かざりふたもとゝもに年立にけり　愛知　井口登子

○

歯赤き小島さゝなく漁村やよき音よき香に新潮寄する　東京　今泉礁千鳥

東風

片つ枝の花咲き出てゝ徐ろに東風ふきにほふ白梅の窓　神戸　みな子

社頭松

五十鈴川清く流れて風月夜神遊ふなり松の緑に　愛知　荒木都美子

○

置く露は春の女神の御統に集めて作る玉にぞあるらし　東京　秋田登志子

折にふれて

すたちする鳥のこゑさへのとかにてのきの柳に春のたそふる　旭川　佐藤央子

社頭松

若松も神の恵みの露あびて緑りいやます五十鈴川邊に　名古屋　中村なみ子

柏

かるゝともちらてみさほを立つるみの柏や松のちよならひけむ　秋田　網矢はる子

○

つばくらめ濡れてとびかふ下京は靄に暮れゆく小雨の日哉　美濃　吉野花子

○

さびしみの家に一人の姫見えて取りまく垣は山吹の花　美濃　小坂いく子

○

旅し船言葉きたの敵追ひと向ひ合ひたる京の人かな　美濃　加藤風子



俳句

内藤鳴雪先生選

天

花吹雪烏帽子かたげる馬上かな　越後　岩本翠浪子

地

米白う搗て春まつ山家かな　横須賀　高橋つね子

人

春風や加茂の橋行く女輿　神戸　梶原京子

金明水銀明水も氷りけり　横須賀　高橋つれ子

元日や嬉しきうちに日の暮る

如月の草となりけり福寿草　神戸　足立あさ子

新らしき衣着て春の寒さ哉

大佛の鼻から起ちしかすみかな　福島　深谷けい子

寒月や遠き火事みる土手の上　岩代　岸野常子

風あらみ小石顔うつ冬の道　淡路　古東静子

鶯の小やぶに啼くや堤の下　京都　船津すみゑ子

讀者文壇

白梅の白きが神のこゝろかな	神戸	足立あき子
小春日や籠に盛るゝ摘菜かな	茨城	富田とみ子
木枯や鳥居に落る二日月	横須賀	柏原みな子
白梅や野は黄昏れて人おらず	岩代	岸野常子
御降やとま新しき漁士が船	備後	小林つれ子
踊る雁名し知れぬ草咲く田哉	名古屋	中村濵子
遠砲に霞める沖や朧朧	下野	土屋藤花子
柏手のひゞきに出る初日哉		
東風吹や奧街道の人通り	愛知	荒木都美子
春の月五百羅漢を照しけり	美濃	桃井萩子
山越せば田あり畑あり桃の花	同	小坂いく子
雲雀落ちて畑三畦黄昏るゝ	名古屋	中村千代子
冬の梅喚鐘はつしてなかめたり	下野	土屋圃生子
紅梅の散る日盛や豆大鼓	相模	植木とよ子
雲ばれや影數十羽の啼連れて		
朧夜や水車の邊り梅の散る	神奈川	山本久代子
春寒や毛脛あらはに町奴	東京	山木いし子
門松や其根に犬の居すくまる	同	川口秋子
若水に朝日の匂ひ掬ひけり	同	鵜澤貞子
轉び寢の枕となりぬかるた箱	同	小檜山幾代子
茶の花や畑の中の大師堂	紀伊	岸常子
尊さよ御手植松に初日影	東京	泉谷信子
大原女髪にそへし梅一枝	備後	小林つれ子
紅梅や田舍茶店によき乙女	東京	澁部貞子
鐵鉢に受けて小沙彌が落椿	同	栄田ふみ子

定價

一冊	前金	貳拾錢
三冊	前金	五拾七錢
六冊	前金	壹圓拾錢
拾貳冊	前金	貳圓拾錢

全國通送無料

廣告料

五號活字二十五字詰四十行 頁付十六 半頁付二十 一頁付六十

特等	六圓五十錢	二十圓	三十五圓
一等	三圓	十一圓	二十圓
二等	四圓	九圓	十六圓
並等		七圓	十二圓

御注文規定

一切前金の事（但郵券代用一割增の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地二丁目貳拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便局へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治四十一年一月廿八日印刷
明治四十一年二月一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 合資會社 國光社

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
右代表者 橋本忠次郎

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
印刷人 守岡功

發行所 合資會社 國光社
振替貯金口座番號 壹壹七八番
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋 特八八番）

前號判じ繪解答

前號判じ畫は、正解者百五十六人の多きに及びたれば、規定に從ひ去る十七日午後一時本誌編輯局にて、本社常務重役、編輯員及解答者本所區向島田尻しん子外數氏立會の上抽籤を行ひ、左の通り當選したり

▽一等 奈良縣高市郡白橿村 熊野靜榮君

▽二等 東京市本郷區新花町五四大谷方 石井しづ子君

▽三等 本郷區元町一丁目六十八番松方 土田八重子君

答案

立別れいなばの山の峰に生ふる
まつとし聞かば今歸りこむ

此判じ畫の歌は、有名なる小倉百人一首より取りたれば、字句の正當なる解答を得たる百五十六人を抽籤の資格者として、本社女子社員を代理抽籤せしめたり、右當選者の外規定の賞品を呈したる方は

東京 黑澤すみゑ▲同 中井稔子▲同 山岸とめ▲同 富田濱子▲同 武井初▲同 內山けさを▲茨城 堀みつ▲横濱 堺田秀子▲丹▲ 梅田敏▲東京 小谷治▲福井 五十嵐あき▲神戸 山之內榮▲東京 中村千代乃▲富山 吉岡マサ▲東京 田子かれ▲同 小川瑠璃子▲長野 奥原きよ▲愛知 榎本じやう▲東京 有阪いし▲福岡 青柳みれ▲新潟 細野庄二郎▲大阪 勝屋小波▲新潟 小池なつの▲東京 藤井はる▲陸前 山形すみ▲東京 小山かく▲山形 市原なほ▲陸中 澤山茂子▲東京 山尻眞子▲同 今泉義子▲下總 高木みよ▲福島 清水琢磨▲東京 戸塚とも子▲同 中村ミチ▲秋田 野上みよ▲東京 神田佐久▲同 島津つや▲下野 井上伺子▲東京 武田千代▲山梨 海野勢造▲東京 峰岸ます▲靜岡 松本まさ▲長野 平林しげ▲東京 三宅はな▲同 高橋たか▲同 神谷久千葉 成毛あき▲東京 本山よし▲同 阪野信子▲東京 武きみ▲馬道 岡崎激▲青森 夏目颯▲羽前 佐藤さと▲兵庫 石井たま▲埼玉 松本つれ▲石川 得賀ため▲茨城 榊原るゑ子▲渡島 橋本あやめ▲宮城 林芙蓉▲廣島 小藤てるよ▲茨城 坂野よね▽兵庫 古東すみ▲岩代 渡邊はる▲佐賀 呼子小學校▲東京 清水きぬ▲山形 小松定惠▲東京 藤坂優美▲同 日比千代▲甲斐 小澤ぬい▲東京 岡つち▲同 吉川なか▲同 中山はな▲筑後 三池千代乃▲東京 田中敏夫▲同 平井靜▲三重 平山妙▲大分 森田ツヤ▲秋田 須賀しげ▲同 石井れん▲愛知 鈴木みつ▲千葉 稻葉驛作▲東京 土屋申▲長野 倉田なこし▲山口 尾畑はつの▲熊本 田代治▲東京 増水みつ▲千葉 安藤咲▲埼玉 關根しげ▲埼玉 飯野▲もと後志 山本しづか▲渡島 櫻井梅子▲鹿兒島 山岡妙子▲東京 林辰▲埼玉 江原しつ▲神奈川 梅川まさ▲長崎 八尾いへ▲岡山 森田久子▲福島 渡部きよの▲三重 山本秀子▲新潟 岩本よし▲名古屋 中村濱▲靜岡 丸木清子▲青森 川村なよ▲同 川村きよ伊勢 下村業子▲東京 小林梅子▲同 相田雁▲山城 古川いそ▲廣島 戸城みち▲岐阜 江浦みちな▲千葉 金子操子▲神戸

三木光▲大阪　楢沿野▲佐賀　中野茂龜▲福岡　濱野ゆき▲岡山
小川龜▲秋田　小野崎登久▲伊豫　早水きみよ▲日向　石川つせ▲
東京富田とよ▲東京　谷村そ計▲富山　結城てる▲横須賀　北村包
彦▲伊豫　川上きせ▲東京　松村とし▲同　寺尾久代▲東京　梅野
絲▲福島　古内長太郎▲北海道　中島せん▲秋田　武内とよ▲三輪
よし▲秋田　古瀬惟▲旭川　成廣ゐさ▲秋田　古瀬りく▲近江　柚
木とわ▲紀伊　早川信惠▲東京　高橋きみ▲茨城　岡田尚子▲美濃
倉島みゆき▲福岡　植村鶴子▲水戸　堺和はま▲愛知　村瀬せい
▲溝上たけ▲東京　會場ゆき▲東京　田口よれ▲群馬　勅使川原きく
▲千葉　鈴木ゆう▲東京　上村つな▲秋田　谷藤政治▲福岡　大山
かたえ▲岩手　赤刪文人▲東京　江原よし▲埼玉小林千代▲東京
小島やす▲北見　渡邊イチ

◎字句の間違ひたるもの

正解	誤
立別れ	たつわかれ
いなば	ゐなば
生ふる	生ふ　居る　をゝる　をる等
まつ	待つ　松（これは掛言葉故假字の方よし）
かへり	かゑり　かいり等

少し字句の間違はあれど、いさゝかの瑕にて等外の賞品を呈せるもの

▲奈良　吉川はる▲神奈川　礒部霞▲岡山　日下テル▲東京　島上正
乃▲仙臺　香味さつき▲東京　木村靜江▲群馬　小林くに▲東京　厚
木ひさえ▲同　山本はな▲越後　水野やすえ▲下野　土屋藤花▲山
形佐藤はな▲埼玉　堀内みさ▲筑前　長野その▲石川　高木龜久榮

東京　日種富士▲廣島　佐伯みきな▲大阪　池端千代▲東京　竹内
しげ▲同　長谷川八重▲同　町井ます▲富山　菅沼隆俊▲長門　田
中眞▲遠江　・藤本彦四郎▲茨城　返津八重▲東京　小島冬の▲和歌
山　栖原かめ▲東京　吉武すみ▲長野　丸山　▲鳥取　井本きち
▲愛知　倉林すみよ▲東京　岩槻木とし子▲渡島　鈴木せん▲群馬
甲斐　椿枝▲三重　北村こめ子▲岩代　遠藤久▲青森　西田ちぎり▲
東京　矢島くら▲山形　鳥海節▲山口　田村唯一▲鳥取　松本金▲
鳥取　間山千代▲神奈川　石渡とき▲紀伊　岸いそ▲東京　大河仲
▲岩代　岸野菊▲東京　小林芳▲岩代　岸野常▲横濱　水野はる▲
東京　平原文代▲同　勝知代▲群馬　關根達▲廣島　田安ハナヨ▲
滿洲　藤井きく▲愛知　吉田峰▲福岡　望月八重▲廣島　平岡ヒセ
▲横須賀　永島とり▲長崎　田村やよ▲東京　遠山モト▲埼玉　本
多ヨシ▲愛知　秋田スヾ▲信濃　平林勝太郎▲東京[illegible]小潟ちか▲同
早川さく子▲　稲島　河原田小春▲千葉　宮原のぶ▲宮崎　宗ジュキ▲同
▲東京　大濱富▲石川　本多文▲岩手　石井みや▲横濱　島崎榮代
▲熊本　妹尾ます▲東京　田尻ヒロ▲同　春日代治▲同　大塚いく▲
茨城　和田とよ▲大阪　須原直△東京　早川菊枝▲佐賀　殿村とら
▲岡山　安藤うめの▲兵庫　辰馬みれ▲大阪　竹内富美榮▲兵庫
西多つま▲伊勢　卜部ます▲佐賀　池田逸次▲姫路　河内靜千▲岩
手▲　小野千代▲長野　今井ハナ▲水戸　守屋あや▲茨城　坂野伊左
衛門▲美濃　杉山靜子▲山口　村橋孝▲宮城　千葉ゑい▲大阪　山
中ます▲東京　田口重太郎▲長崎　松尾靜▲山梨　岩本きく▲東京
並木きよ▲同　塚越みす▲北ノ▲渡島　梅澤さだ▲仙臺　松本濱江
▲東京　中村しげ▲同　藤澤もと▲同　村林ちさ▲佐賀　末次▲東
京　鈴木この▲常陸　朝倉てる▲東京　林艶▲同　山部ふき　▲神
戶　古在敬▲栃木　森ル井▲廣島　加計園枝▲東京　小林德次郎▲
羽後　庄司ちさ▲岡山　松岡たみ▲飛騨　増子元江▲長野　古瀬隅
世▲相模　三崎敦▲東京　三戸とめ▲同　吉田はん▲三重　佐々木
いすゞ▲東京　藤澤まさ▲同　江崎謙三郎▲岐阜　杉山せい

女鑑

明治四十一年　二月一日發行　毎月一回一日發行　第拾八年第二號　明治廿五年三月十二日　第三種郵便物認可

東京築地株式會社國光社印刷